

525
304



始



58区8斗

變態心理の人人々

中村古峽 著



自畫像のヤシ (自刻木版)

東京・大阪屋號發行

變態心理とは吾々の普通の精神現象からはづれてゐる有ゆる異常な又は特殊な心理作用を総括した名稱である。従つてその範圍は非常に廣い。

同じく普通の精神現象から外れるといふ中にもその外れ方にはおのづから二通りの區別があつて、或るものはその分量に於て普通から外れ又或るものはその性質に於て普通から外れる。例へば白痴の精神能力はその量に於て著しく常人のそれから外れてゐる。又精神病者の妄想はその質に於て甚だしく吾々の空想又は夢想からかけ離れたものを持つてゐる。

更に又その外れ方に就いても、例へそれが量的であれ又質的であれ、一定の標準或は規範から過多であることもあり、過少であることもあり、より優秀であることもあり、より劣等であることもある。例へば天才者の精神能力と白痴の精神能力とは、常人のそれから外れてゐる方向に於て宛も天と地とを型取つてゐるかの觀がある。又狂人の妄想と哲人の獨創とは吾々の平凡な思索を標準として、確に正反對の側に位置を占めてゐるのである。

しかし變態心理と常態心理との間には決して一定の境界線はない。只その程度の如何によつて何れかに定まるものである。故に時には常態と變態の何れに屬せしめてよいか分らないやうな中間現象もある。又變態心理の現象は如何に突飛な、極端な、異常なものがあつたとしても、それは何れも吾々の常態心理の中に於て既にその萌芽を有するものであつて、全然最初から無かつたものが新に現出する筈はないのである。(拙著『變態心理講義』の一節)

變態心理の人人々



中村古峽著

この小著を沖野岩三郎氏に捧ぐ

大正

15.6.24

内交

東京・大塚書局發行

525-304

目次

ある青年の遺書	一
田舎教師	空
二 狂女	一一
うたたねの後	二七
盗癖	三四
正心邪心	三三
見棄てられた魂	三二
上奏者S君	一八
蕃地から	二五



ある青年の遺書

随分年久しくおれも反抗を續けて來た。しかしそれは、おれに取つて少しも忠實なものではなかつた。只夢中になつてゐただけだ。その反抗はおれの就職口を奪つた。おれの周圍を狭くした。けれども一面またおれを善い方にも導いて呉れた。おれはおれ自身を縦からも横からも見る事が出來た。おれをよほど人間に近寄せた。

おれは今度こそ本當におれの赤裸々なところを書く。今までは、他人に見られる虞れがあつたから、どうも本當のことを書くのに躊躇されたが、今度はおれの本箱に鍵をかけるやうにしたから、ちよつと見られることもなからう。尤も見ようとすれば、どうしたつて見られないことはないが。……

要するに、卒業後の浪人生活は、おれに取つて良薬であつた。おれは今過渡期にあるのだ。今

のおれには内生の争闘が激しく起つてゐる。一方には近代思想に進まうとするもの、他方には温良順心な人間にならうとするもの。——おれもさう無暗なことは出来ないと思つてゐる。だからこんなに苦しいのだ。だからこんなに悶えるのだ。まだ現代の日本は、おれ達の考へてゐるところまで進んでゐない。さうすれば、この二者の中何方を選ぶかは大問題である。これは先づ當分の宿題としておいて、此處一二年間の経過を見るのだ。

八月十日以後の日記を書く前に、その日以前のおれの思想とでもいふものを、少し書き留めて置かねばならない。いつも書くことだが、一體おれは餘りに感情的でいけない。

おれは學校に在學中から、すべての教師達に反感を持つてゐた。だから三月廿五日に卒業式が済むと、おれはもうこんなけちな學校とも、又こんなけちな教師達とも、今日限り交渉の無い身だと思つて、實に何とも云へないのう／＼とした氣持になつた。過去四年間一緒に机を並べて來た同級生達は、卒業證書を手にしたことに依つて皆嬉しうに見えた。そしてあの偽善者の校長から、職工上りの野卑な家具の教師にまで、一々丁寧に頭を下けて、名残惜しげに訣別の挨拶を

述べてゐた。しかしおれには、今日限りもうこんなけちな教師達とも別れてしまふのだといふ其の事が、實に嬉しくて堪らなかつた。本當におれには愛校心なんて爪の垢ほどもなかつた。式後卒業生二三人が、忠義顔に、校友會への寄附金や同窓會への會費などを集めてゐたが、おれはそんなものには一錢の金も呉れてやらなかつた。おれにはその金が惜しかつたのだ。おれはその金で本を買つた。おれにはそれが、その當時得意でならなかつた。

就職のことも一切學校からは世話して貰はないことにした。それには色々複雑なことがある。若しおれに、その時白畑未成といふ人がなかつたら、おれは恐らく、あのけちな教師達の態度に泣くほどの不満を感じてゐても、矢張り彼等に縋つただらう。けれども白畑氏が疾うから引受けてゐて呉れたものだから、おれは餘りに安心して過ぎたのだ。それに、おれはプラスターマンとして一生を送りたいとは思はない。おれは純美術に入りたいといふ志望と、建築を研究したいと思ふ念慮との爲に、課長の頼みを聞き入れて、三十圓の口を今井に譲つてしまつた。

おれは毎日白畑未成の名刺を持つて、色々の事務所を訪問した。しかし悉く失敗に終つた。おれは行詰つた。おれは満身の不平と不満を抱いて、毎日ごろ／＼してゐた。社會に對する反感

は益々激しくなつた。去年の十二月頃から、おれは餘程狂的になつてゐたらしい。一期卒業生の中でも、今だに浪人生活をしてゐるものはおれくらゐだと知つた時、おれは實際、あんまよい氣持はしなかつた。おれはひそかにあせり出した。その中に徴兵検査が近い來た。おれは青木の世話で、日本橋の或る家具屋の註文取りにならうとしたことがあつた。が考へて見ると、おれにはとても適しない。それでおれはそれを斷つてしまつた。

おれは徴兵を免れたら、この九月から美術學校の選科へ入らうと思つたりしてゐた。が六月十日の検査で甲種合格した。萬事は休すだ。おれは今更のやうに驚いた。おれはおれ自身の性格を考へて戦慄したのである。仕方がないから、おれは兄のいふ通りに一年志願をした。まだ何とも云つて來ない。おれは職業がないので、お面や焼物などを色々作つて金にしようとした。けれどもそれは、羽村孤月がお面を一個一圓で買つて呉れたのと、兄が二個を一圓で買つて呉れただけであつた。

此處で一寸石井一雄のことを書いておかう。彼もおれと一緒に就職口が見附からず、北海道に走つた。おれは彼とも暫く會ふ機會がなからうと思つて、何となく悲しかつた。おれは彼とは滿

四年間同居してゐたのだから。單に同居してゐたといふだけではなく、外にもまだ色々のことがあつた。おれは彼に金では随分迷惑をかけてゐる。——實際おれは、どうして金にかう不始末なんだらう。——石井は東京を去る時餘程金に困つてゐた。それでおれはまあ、長い間彼に金で迷惑をかけたんだから、その埋合せに少しでも呉れてやりたかつた。しかしおれの手許には例によつて金がない。貯金もたつた五拾錢ほどになつてゐる。おれは前にも云つた、校友會や同窓會に出す金で買つた書物や、その外随分手離したくなかつた書物を賣つて、大枚貳圓五拾錢といふ金をこしらへた。(それらの書物はまだおれの手許に戻つて來ない)おれはその中から銀貨二枚を取つて彼に與へた。少しでもお禮の印にしたかつたからだ。

けれども彼は直ぐ歸つて來た。北海道の學校を思ひ切つて歸京して來た。それから又就職のことで一しきり波瀾を起した。漸く函館に口が出來て再び行つたが、雇入れの都合で八月中旬頃まで東京へ行つてゐよとのことで、又上つて來た。おれに云はせると、彼は馬鹿だ。彼にはまるで自分自身が分らないんだ。彼は虚榮と空想とに酔つてゐるのだ。おれは彼が狂ひはしないかと思つて心配した。彼れの動搖つたらないんだから。彼れの失敗はおれによい教訓を齎らした。おれ

は益と自分といふものを突きとめようといふ心になつた。彼は積極的なのかも知れないが、しかし無謀な積極は何にもならない。おれと彼とは、或る一面に於いては相親しんで行くが、同時に他の一面に於いては非常に相反して行くことも事實だ。二人の中は、追々に交渉がなくなつて行くのだ。(以上八月十日夜十二時記す)

おれは時々、自分をいかにも藝術的に出来た人間だと思はせられることがある。おれはどうしてこんな者に生れ付いて来たんだらうと悲むことがある。

おれの心は餘程變つて来た。今おれは、何故この四月に美術學校へ入つておかなかつたのかと口惜しんでゐる。おれは悟つた、おれは建築の方へ行つては駄目だ。おれには建築は適しない。おれはどうしても純美術でやつて行かなければならない。おれは今その決心をしてゐる。軍隊から出て来たら、再び學校生活を續けるのだ。おれはどうしても、一度は美術學校へ入るのだ。この事はまだ誰にも話さないが。(八月十一日午前)

おれは近頃異性に對する感情が餘程強くなつた。異性の内的状態を考察したいと思ふ情が強くなつたのだ。おれは今現在のおれの周圍にゐる異性に對しては、不満で不満で堪へられない。目だるいことばかりだ。おれは兄がよくあんな女で我慢してゐるのが不思議でならない。おれは女の馬鹿なのがどうしても黙つて見てゐられない。おれの性質には、兄嫁のやうなのは全く駄目だ。おれにはもつと氣の利いた、そしてもつと家庭的な女でなくつちや駄目だ。おれは純朴な、自然な女を欲してゐる。おれは矢張り郷里の山形か秋田あたりの山奥から探し出して來たいと考へてゐる。母に對するおれの感情は、あの一件以來、到底以前のやうな温い敬愛の念を持つことが出来なくなつた。姉に對してはなほ更。兄弟としての情愛は全然消滅してしまつてゐる。おれには母や姉の動作が、一つ一つ野卑に見え、下賤に思はれて仕方がない。

おれのくすんだ、色彩のない生活に、一つの繪具が點ぜられた。それは先月の二十日過だつたと記憶してゐる。兄から養子の口があるが、行つて見る氣はないかと尋ねられた。それは仙臺の山村家で、おれの家とは遠縁の間柄だ。兄の説明はよく解つた。おれは以前から時々この事件を

假想してゐた。しかしそれはおれだけであつた。それでおれは承知したと答へようか、どうしようかと迷つた。勿論兄は即答を要求しなかつた。で、おれは少しも不賛成なことはないが、只おれの生活が今精神的にも亦身體的にも過渡期にあるから、軍隊に入つてゐる間にどう變るかは知れないと云つて、確實な返答を避けておいた。兄は大分不満らしい顔つきであつた。おれは心の中では、さうなることを切に望んでゐる。おれは兄があつたやうにいふのだから、若し先方の祖父祖母達と話しをする時は、充分におれを推奨して呉れるものと確信してゐる。おれは何だかこの話が、遠からず事實として現はれるやうな氣がしてならない。

おれはこの話を聞いてから山村家のことをそれとなく母から聞き出した。S子は十九歳だといふ話だ。決して年を取り過ぎてはゐない。おれは子供のやうにおれ自身が何かから何までしてやらなければならぬやうな異性は、いくら器量ばかりがよくても嫌ひだ。その點は、S子は甲だ。藩主の御屋敷へ奉公したこともあるといふから、多少は氣もよく附くだらうと思はれる。性質も聞いた。これもおれは甲だと思ふ。おれはもうその氣になつて、色々と空想を逞しうしてゐる。S子の名を聞いただけでも、おれの注意は鋭くなる。何か彼女に關する新しい智識を得んとし

て。當人は何にも知らずにゐるのに、おれだけがこんな考へを抱いてゐるのかと思ふと、滑稽な氣がする。また彼女に對して濟まないやうな氣もする。

おれは近代思想的に進まんとする心と、結婚に關して起る心との闘争に苦しんでゐる。何れを選ぶべきかに迷つてゐるのだ。しかし今のおれは、後者に進まんとする方が勝つてゐる。

(八月十一日夜十二時半記す)

おれは昨晚この家へやつて來た。東京を去ること十里。主人が公用で二三ヶ月旅行をするので、あとは女と子供ばかりだから、留守居に來て呉れと頼まれたのである。丁度今月中に書き上げねばならない仕事を持つてゐるので、勉強には好都合だと思つて引受けたのだ。今朝は五時半に起きて冷水浴なんかをした。昨日おれは日記を書かなかつた。おれは昨日近代思想社のOとAの二人が新事業を起す保證金の中へ、金五拾錢を寄附しようと思つた。手紙の文句まで下書きして、郵便局へ振替爲替を出しに行かうと途中まで出掛けたが、おれはその數分間のうちに色々考

へが變つて来た、おれは先づ偽名で出さうか本名で出さうかと迷つた。おれは偽名を使ひたくなかつた。それでは本名——。本名だつたら警察が注意しさうだと思つた。それが原因で軍隊では苦しめられる。仙臺の方の話は立消えとなる。……その結果おれはどうなるだらう。後者のことは別として、軍隊での不平不満は屹度おれの將來をよくしないことは分つてゐる。おれは到頭沈黙することにした。卑怯なやうにも思はれて悲しい。しかしおれは決して近代思想を捨てようとするのぢやない。おれは、おれが或る程度まで出来た上で、どうしようと儘だ。おれはこんな理窟をつけて寄附を中止した。

おれは仙臺のS子がどんな顔の女で、どんな性質の女であるか、全く知らない。まだ一度も會つたことがない。その女を戀ひ慕つてゐるなんて、随分愚かな話である。しかしおれはこの話が屹度成立つと思ふ。おれはこの話を初めて聞いた時から、ずつと頭の中にあるから、何かおれが新しいことをしようとする、直ぐそれが此の話の邪魔になりはしないかと考へるのである。おれがこの問題を成るべく離さないやうにしてゐるのは、おれ自身でおれを思ふやうにして見た

いからである。おれの利己主義からである。けれどもおれは、今までのやうな利己主義を振りまはさうとしない。おれは軍隊に入る前に、この話をもつと進めておきたいと思つてゐる。

(八月十三日午前八時半)

おれは近頃、歌が出来なくなつてしまつた。色々の原因があるだらう。けれどもこの傾向はおれのすべての方面に發見する。おれはその原因の大部分を、生活の餘裕がないからだとはかり考へてゐた。しかしおれは昨日さうでないことを發見した。おれはその豫防を實行すべく取りかかつた。が、どうも——これは永久的にやらねば駄目らしい。おれは今おれの爲に、ある通俗衛生學の書物から、左にその要領だけを書きぬいて置く。

神經衰弱の豫防法。

- 一、規律的生活をすること。
- 二、適度の勉強をすること。
- 三、友人を多く持たぬこと。

四、自然の美を愛すること。

五、劣情を遂行するな。

六、適当な運動を常に實行せよ。

神經衰弱の無藥療法。

一、慰籍である。

二、適度の仕事である。

三、體質の改良である。

四、沐浴にある。(一回の沐浴は六哩の遠足をしたと同程度の血液循環に効能がある。——
浴が一番によい。)

五、按摩である。

六、運動である。

自慰の矯正法。

一、原因を精探してそれを除くことが肝要である。

二、冷水摩擦である。殊に局部には冷水を注いで摩擦せよ。

三、精神の安慰である。

四、病者たることを忘れよ。

五、妻帯せよ。

六、轉地せよ。

七、飲食物に注意せよ。

八、大いに運動せよ。

遺精の無藥療法。

一、原因を探つて除け。

二、無刺激性の食物を選んで食へ。

三、冷水浴を行へ。(病者は五分以上十分間冷水中に座すること。一日二三回。)

四、寧ろ睡眠不足たれ。

五、婦人との交際を禁ぜよ。

六、夜具を硬くせよ。

七、運動せよ。

八、淫猥なる書畫や小説を讀むな。

九、心を高尚にせよ。

以 上

(八月十四日午後記す)

おれは今本當にいい氣持になつて机に向つてゐる。何か歌の本か小説でも讀みたいやうな氣分だ。昨日の暴風で随分方々荒れたやうだ。この狭い屋敷だけでも、桐の木が折れる、塀が倒れる、といふ騒ぎだもの。おれは暫く休養して、歌を盛んに作る積りだ。駒畫の下書きをする帳面を二錢で買つて來た。今朝石井一雄君の友人から電話で、東北線不通のため、常磐線で函館へ立つたと云つて來た。實際困つたことだらう。今後三四年は互に會へまい。おれが今彼れの立場にあつたら、矢張り東京が名残り惜しいだらうか？ おれは現在のおれの浪人生活が、おれの今後に取つて非常な良藥になると思ふ。おれもこれで何とか極るだらう。今も江見君の手紙に、國へ歸ら

うかと書いてある。おれは美しいほどである。今井君からは何とも云つて來ない。おれと彼のの間も、かうやつて次第に離れ／＼になつてしまふのだらう。おれは今彼と別れても少しも残り惜しいことはない。二人はかういふ運命だつたのだ。もう疾うからかうなりかけてゐたのだ。これも又例のおれの取越苦勞かも知れない。

おれは仙臺のS子の病身なのが氣掛りだ。夏は大抵温泉場へ轉地してゐると聞いたが、今年はどうしたらう。もう秋だ。こほろぎが鳴き出した。まだ寝たくはないが、もう九時になるから床に入らう。頭はます／＼冴えて來る。明日はまた早く起きよう。この頃は、おれの生活も少しは規律立つて來た。今日などは馬鹿に勉強したものだ。(八月十四日夜九時記す。)

最初二晩ほど、床變りといふものか、夜中に目が覺めたが、昨晚はぐつすりと寝てしまつた。今朝は五時前に起きた。非常にいゝ氣持になつてゐたが、朝飯の時ふとしたことから食ひたくなかつた。これは東京にゐる頃からの癖になつてゐるのだ。朝庭の掃除をしたつて腹はすかな

い。おかしな位だ。おれは愚だ。掃除しながらもS子のことばかり考へてゐた。まだ海のものとも山のものとも分らないものを、こんなに思つてどうする積りだらう。若しこれが成立しなかつたら、どうだらう。貫一、貫一！しかしおれはあんなことはしまい。おれは貫一も馬鹿にしてゐるが、宮はてんで問題にならない。おれは天下の女などは、みんな宮と同じく愚劣な人間だと思つてゐるのに、なぜS子のことばかり考へてゐるのだらう。女が——といふ後から直ぐS子のことを考へる、戀ひ慕ふ。矛盾だ、大なる矛盾だ。おれはどうしてこんなに矛盾の多い人間なんだらう。(八月十五日朝記す。)

おれはこの家へ来てからは、まるで新聞も讀まない。それでゐて今の仕事がどれだけ出来たらうか。まだ五十頁までしか進んでゐない。あと七百何頁とあるのだ。今日は十五日だ。あと十日間か十五日間で出来るだらうか。終日二階に閉籠つてゐて。實に心淋しいな。おれは就職が出来なかつた爲にこんな仕事をしてゐる。おれはもう二冊は書き上げてゐなければならぬのに、まだ一冊しか出来てゐない。折角兄が入營中のおれの小遣錢取りに見附けて呉れた仕事だが、なん

とも濟まない。今の分ぢやまだ後れるだらうが、残念だ。それにしてもおれは、どうしてかう頭が早く疲れるのだらう。口惜しいといつても仕方がないが。(八月十五日午後二時記す。)

おれは此の頃毎日二度づゝ盥に一ばい水を浴びるが、これが東京の真中だつたら、どうだらう。今風呂から出て水を浴びながらこんなことを考へた。少くともおれの此の頃の生活は、順調に來た坊ちやんといふ風だ。しかし、八疊と四疊半の二階二室を自分一人のものにして、大きな机の前に自分の好きな仕事をしてゐるのは、實際いゝ氣持だ。おれが若しこんな生活で生長して來たのだつたら。——しかしそれは愚だ！こんなことを考へてゐると、またS子のことの心に浮んで來る。今日は午後から何にも出来なかつた。堺枯川氏の賣文集を始め、松崎天民氏の數種の書物を読んだ。この頃晝寢が出来ないので困る。この時だけは、自分の自由になる家であつたらと思ふ。してもいゝのだが、この家の子供がやつて來るので、ゆつくり寝てゐられない。朝は五時の、夜は九時だ。おれは運動が足りない。仕事が進まなくつて困る。本當に日を數へては心でいらくしてゐるのだが、一向に手は働かない。困つてしまふ。(八月十五日夜記)

おれは實際今井君とは餘程の隔たりが出来た。しかしおれもあの會社へ入つてゐたら、屹度彼と同じ方向に同じだけ進んでゐたらう。否もつと進んでゐたかも知れない。おれは幸か不幸か、横道へ外れてしまつた。しかしおれの立場から見れば、決して不幸ぢやない。おれは今暫く沈黙してゐるのだ。おれの今は非常に肝腎なのだ。おれは小を捨て、大を取るのだ。おれは彼よりも急激であつた。そのおれが今かうやつて沈黙してゐることは、彼等にとつて非常に變節のやうでもある。おれはあの運動には決して多人數を要しないと考へてゐる。小さな人間が多勢ゐることは、却つて不得策だらうと考へる。到底大なる仕事は出来まい。おれ達の運動は露國の虚無黨のやうに、社會のあらゆる方面にその同志を置く必要がある。今のやうな小ほけな者ばかりが、がやく云つたつて何の効果があらう。只味方の不利益ばかりだと思はれる。おれは彼等よりは一歩進んでゐる。なぜなれば、おれは今沈黙を守つてゐる。そして軍人としても社會の一員としても、相當の地位に達して、金の餘裕が出来た時、初めて働くのだ。おれはそれまでは決して準備を忘れない積りだ。おれはこれを今井君やその他の同志に對する言譯だとは思はれたくない。お

れはそんな最後をしたくないと考へてゐる。おれは此のことが氣がかりだ。

(八月十六日午後三時半)

おれは今代書させられた。おれは今晚もかうやつて遊んでしまつた。おれはどうして頭がかう疲れ易いのだらう。それはあの爲だ。どうしておれはこんなに意志が弱いんだらう。運動が足りないのかも知れない。おれはこればかりはどうすることも出来ない。おれは此の頃人間といふものが、皆虚偽の權化のやうに思はれてならない。おれが裏表を使つてゐるやうに、人も皆かうしてゐるのだと考へると、全く人間が辭職したくなる。今日もそのため、半日何にも出来ずに夜になつてしまつた。今もなほ頭の眞底が痛い。實際おれは精神的犯罪者だ。おれはこんな考へを成るべく忘れてしまひたいと思ふ。こんな考へを成るべく起さずにしまひたいと思ふ。若し人間がこんなことばかりを考へてゐる者としたら。——出齒龜も出る筈だ。おれは少くとも將來に大なる希望を持つてゐる者だ。こんなものに迷つちやゐられないのだ。しかしおれは、この慾情の勃發してゐる間はどうしたつて駄目なんだ。だから、こんな考への襲つて來た時は、すぐ散歩する

か何かするといひのだ。しかし机に向つてゐるその事が、勉強のやうに考へてゐる此の家の人々は、おれが氣が進まなかつたり、雜念が湧いて來たりして、仕事が出来ない爲に階下の子供部屋へでも遊びに行くと、もう仕事に倦み飽きたやうに思つてゐるのだから困つてしまふ。仕方なしに二階で氣を轉じようとしても中々むつかしい。どうしても自分の自由になる家でなくつちや駄目だ。理想的には行かない。おれは來年一年入營してゐる間には、思想も習慣も大いに變るだらう。おれはその變ることを望んでゐる。おれは自分がよい方面——即ちもつと世間的になることを望んでゐる。さうでないに到底S子の家になんか入れないと思つてゐる。因襲と形式ばかりの老人達にも、氣に入るやうな人間に變りさうだ。さうなると、おれは今井なんかから、變節のやうに云はれるかも知れない。しかしそれは一を知つて十を知らないものだ。おれだつて考へはある。しかしそれを今此處に書くのは止さう。いくら机の抽斗に鍵はあつても、見ようといふ奴はおれの居ない間に見るに決つてゐるから。疑ひ深いな——これもあれの爲かも知れない。——しかもおれは、おれの目的が、まだ何一つ達せられない間にそのことを知られたくない。おれは又自分自身にも、屹度やり遂げられるかどうか、危ふく思つてゐるのだから。

おれは此の頃馬鹿に早く起きる。五時。そして晝寝もしないのだ。そして夜は九時半が最後だ。少し親しく馴れて來ると、子供が二階へ上つて來るので、うっかり勝手なことが出来ない。今日も晝寝したいと思つて、午後の二時頃ちよつと横にころがつてゐると、ひよつこり此の家の老人が上つて來られた。おれは直ぐ起き直つて體裁を作つた。おれはこんなことをしなければならぬ自分を嘲笑してやりたい。そして此の形式的な現代を呪つてやりたい。先人を呪つてやりたい。おれはどうして今井君のやうな、大きな者を相手にやれないのだらう。おれの煩悶はいつも自己省察のためだ。おれは本當に自分のことで喜んだり悲んだりはするが、他の人がどうだのかうだのと云つて、皆と議論することは出来ない。おれは餘りに自分の缺點や弱點を——即ち自分といふものを知り過ぎてゐるため、何にも出来ないのだ。先づ自分を。先づ自分を完全に近いものとして置かなければ、到底他人のことで心からの同情や犠牲は拂はれない、と考へるのである。おれはどうしてもそんな性質にはなれない。自己を没却してまで、口で御機嫌取りのやうなことは云へない。世間から云はせると、まだ修養が足りないのだらう。馬鹿なんだらう。

おれが若し、あの三十圓の口に入つてゐたらどうだらう。おれには到底満足ができなかつたらう。若しおれがそれに満足して働いてゐたら、おれは金に困らなかつたに相違ない。おれは金に困らないだけ、それだけ進歩しなかつたらう。反撥心も起らなかつたらう。こんなにおとなしくして居られないだらう。徴兵に行つても確かに勤まらないかも知れない。人間になれないかも知れない。

しかし、若しおれがあのお社へ入つておきさへすれば、おれは泣いても笑つても、只身體さへ出て居れば三十圓といふ金が入つて来るのだ。おれは残念なやうにも思ふ。奴等は形式に身體を出して居れば、それでいゝのだ。身體の労働はらくだ。少しでも頭の労働——今度初めておれはその味を知つた。おれが半日怠ければ怠けるだけ、それだけ直接におれの損になるのだ。しかしおれは例外なんかも知れない。おれの取越苦勞なんかも知れない。

おれは此の頃でんで歌も出来ない、詩も出来ない、創作も出来ない。おれは今自身に對する疑惑と不満とに苦しんでゐる。(精神的に。) 奴等はおれが何にも出来ないといふと、すぐそれは三等に入つたから逆上してゐる結果だの、何だのと云つてゐる。奴等がさう云ふのも無理はない。しかしおれにはどうしてもさう考へられない。それは、奴等は直接自分の働きでどうといふことではないのだから、おれでも彼等の境遇にあつたら、決して煩悶などはしまい。今の先輩といふ奴は、只形式的な労働を尊んでゐるやがる。おれは徹頭徹尾手の労働者は嫌ひだ。それをまだ得意になつてゐる奴等も高の知れたものだ。五錢の辨當が何だ。それが労働者として尊いのだらうか。澤菴の辨當を食つて、形式的に働いて、蔭では自分勝手なことをしてゐる奴等を、他の者が、労働者だ、尊い労働者だと云つて持ち上げるだけの價值があるだらうか。おれには分らない。おれには少しも分らない。

おれは近頃馬鹿に、世間の人が其の場にもない人の噂をするのを、不満で不満で堪へられなくなつて來た。うちの母なんか實際に愚だ。おれはあの一件以來、本當に母の何から何まで田舎式のやり口が癢に障つて仕方がない。何と形容してよいのか分らない、あのくすんだ表情の顔を見るだけでも嘔吐を催す。おれはそのくらゐ、人が他人の風評をしてゐるのを聞くのが厭だ。そ

れでて自分自身はどうかといふと、おれは自分の矛盾を感じない譯には行かない。おれは耻かしい。しかしおれは注意してゐる。おれは必要でない噂は決してしない。決して無意味にしてゐるのぢやない。おれは人に云へないから、こんな手帳を作つてその不満を書き留めたがつてゐるのかも知れない。少くとも自分自身にはそんな積りぢやないのだが。おれはおれの矛盾の多い陰影を残すために、——おれはおれ自身を後に残すために、書いておくのだ。だから真剣だ。赤裸々だ。これを見ればすぐおれのどんな人物であるかが分るのだ。

もう秋だからこんなに涼しいのだらう。今日はまだ仕事に取りかゝりたくない。今暫く何か書いてゐたい。肌が冷々として全く寒いくらゐるだ。おれが二階に上つてゐれば、それで一生懸命に仕事をしてゐると此の家の人々は思つてゐるのに、こんなことをしてゐては、どうも申譯がないやうな氣もする。おれにも表裏があると思ふと、本當に耻かしい。こんなことを考へずに済まして行く人達は實に幸福だ。おれの勉強の仕方は下手だ。しかしおれは、あの爲に頭が粗雑になつてしまつたのだ。おれはあれの害毒を能く知つてゐる。しかも断然あれを止められないとは、お

れはまあ何たる人間だらう。おれは、こんな人間には早く結婚させてやればいゝのだらうと考へる。そして早く異性を知らせてやればいゝのだらうと考へる。おれは、こんな人間には、早く異性でもあてがつて、田舎に閉ぢ籠めておくに限ると思ふ。勉強させればさせるだけ益々悪いのぢやないかと思ふ。全く小さい時から田舎で育つて來た人間だ。都會なんかに住む人間ぢやない。おれはそれを知つてゐて、どうとも出來ない。おれは自滅でも構はない。おれはそれらの前に服従することが出來ない。少しでも都會の空氣を吸収し、多少でも自分自身を考へ、且つ自分自身を熱愛するおれには、出來ない。おれは今それらを通り越さなければいけない。おれはそれを實行するために、總てのものと戦つてゐる。戦つてその準備を整へてゐる。しかし愚かなおれには、それが仲々容易なことではない。おれはどうしてもおれ自身を、天才だとか偉人だとか思ふことが出來ない。それだけおれは不安だ、年中不安だ。おれはこの不安な生涯をいつまで続けることだらう。おれにはさつぱり分らない。おれは何にしろ、おれ自身を大人物だとか大偉人だとかと自分で思ひ、又人に向つて公言することが出來ない。しかしおれは、おれの技術は立派に天才の素質があることを自覺してゐる。おれは彫刻家として成功し得ると云ひ切ることが出来る。

が、おれは其の他に於いては何一つ取り所がないと思つてゐる。おれはおれの周囲の人間が、自分ほど偉い人物はないと考へたり、又公言したりしてゐるのを見聞して、常に感心させられるのである。

しかし、おれが持つてゐる天才の素質も、今のままでは到底成長しない。おれの生活、及びおれ自身を改めなければ駄目だ。革命を實行しなければ駄目だ。その實行する時期は近づいて来た。その爲にはおれの周囲からして變へないと駄目だ。中々容易なことではない。おれにはおれの意志がある。おれは藝術的意志は持つてゐるが、人間としての世俗的の意志は非常に弱い。おれはおれの意志を發達成長せしめる爲に、喜んで兵營生活に服従するのだ。おれは今本當のおれを見出すことに苦んでゐる。おれは一切のものとの交渉を斷つて、靜におれを考へてゐたいと思つてゐる。しかしそれは出来ない話であるかも知れない。

おれは又此處でおれの矛盾を痛感しない譯には行かない。おれは一切の者との交渉を斷ちたいと思つて努力してゐる。又さう云つてゐる。それにおれはおれの周囲の者と妥協しようとしてゐる。おれの今まで不満を感じてゐた奴等と、少くとも世間普通の交際をして行かうとしてゐる。

おれはその矛盾を感じつゝ、今まで意氣投合してゐた今井やその他の奴等とは遠のいて、そして犬猿も音ならなかつた兄嫁の實家なんかと交渉を結ばうと思つてゐる。——それはおれの思想が變つて、利害關係から來るのであるが。——そしてその利害關係といふのは、勿論S子の問題に關聯してゐるのである。——しかしおれは、此の問題の提出されない以前から既にこの傾向があつたのだ。これは確かだ。多少その傾向のあるところへ、此の問題が出たのだから、なほ一層その方へ近寄つて行つたのだ。おれはどうしてS子のことを——この事件を成立させたいと思つてゐるのだらう。おれの利己心を満足させるためだ。

おれは實際悪い男だ。單におれの自己満足を得んが爲に、S子を利用しようと思ふとは！おれはこれを決しておれ自身だけの幸福であり、おれ自身のためばかりだと考へない。おれは物質的に弱い人間だ。このまゝでは、おれの天才的素質を現はせないで死んでしまふのだ。それを發揮させる喜びをS子は持つて呉れるだらう。おれはそれにおれの性質が、丁度仙臺邊が適してゐると考へるのだ。……しかし、こんな繰言は皆自己辯護なのかも知ない。本當のところは——S子といふ女性を自由にして、地位と財産とを得る爲なのかも知れない。おれにもよく分らないの

だ。おれにもよく判断がつかないのだ。浅薄な人間だなあ、若しそれだけでおれがこの話に乗氣になつてゐるとしたら。——もうおれは考へたくなくなつた。おれは到頭あれでおれの頭腦をすつかり壊してしまつた。(八月十七日午前九時記す。)

頭が痛い、頭が痛い。おれは今朝お寺へ参つた。今日はこの家の瓦子さんの命日で、又おれの父の命日だ。頭が痛くつて仕方がない。今朝は實際眠くつて起きにくかつた。無理に起きて水を浴びたが、身體はやつぱり變であつた。二階へ上つて部屋の掃除に取掛つたが、どうも身體の工合が宜しくない。それで朝食後お墓詣をしたのであるが、行く途中からまた一層頭が痛み出した。おれは今日はずんと仕事をする積りであるのだが、豫定がすつかり崩れてしまつた。頭が痛い、頭が痛い。(八月十八日午前十一時)

晝飯を食つてから漸く頭の痛みが止まつた。しかし仕事に取掛りたくはない。何か讀みたい。そして何か外のことを書いて見たい。おれは昨日急に東京へ歸りたくなつたので、質問があるか

らと云つて午後うちへ歸つた。おれにも矢張り親身に對する情愛はある。一週間も會はないとうちへ歸りたくなる。どういふ譯だか自分にも分らない。この家にゐたつて少しも變つたことがない。矢張り自分のうちが一番いゝやうだ。

おれほど喜怒哀樂や好悪憎愛の念の極端なものなからう。人の心はこんなに早く、又人の思想はこんなに速かに、變化するものだらうか。おれはおれ自身が分らない。おれは餘りに自己省察が過ぎるのか知らん。嘗て何かの雑誌からおれの参考の爲に抄録しておいた備忘録中の一節がまた新たに思ひ出される。

——自己省察は修道者を苦しめて漸次に眞劍ならしめる。しかもその行動に現はるゝや、時々變態を演出させる。理知の省察には種々の危険性が加はつてゐる。一時的解決には常に魔性の法悦と肉の墮落が伴ふ。「自分が分らない」のも「正體が掴めない」のも、正しいいゝことであるが、このいゝことから偷安に逃れ、肉に墮してはならない。

——怠慢の冥想主義は修道者をして徒らに内を凝視せしめ、ために自ら停滞し、萎縮し凝結する。我慢の律法主義は自由を束縛して却つて變態の墮落を醸す。疑域胎宮の刑罰がこれだ。

——修道者が自己の力も、自覚も、愛も、宗教も皆盡く否定して、遂に靈的生命まで否定し終る時、初めて新らしい自我が確立される。見苦しい自我の確立、これは宗教ならぬ宗教である。自分から觀て我慢剛情に氣付く時、弱い蠢愚の自覚が起る時、初めて他に對して眞の自己が確立する。眞の自覚は絶對惡觀まで徹底せねばならない。

おれは昨日、勞働問題で何か書いて見たいと思つて、「友愛新報」を整理して、一讀する積りで持つて歸つた。今井に與ふ手紙を公開狀として書く積りだ。群衆心理も讀む積りで持つて歸つた。歌もやりたい。おれは餘りに氣が多過ぎる。「二兎を追ふものは一兎をも得ず」だ。お蔭で仕事も進まない。おれは今の仕事を三十一日までに仕上げねばならない、おれは、おれにも意志があるぞと示してやらねばならない。おれはいつも心に計劃だけはあつたが、一つとして出来上つたことはない。もつと負嫌ひにならなけりや……おれだつて決して負好きぢやない。おれは今まで人を馬鹿にしてゐた。それで少しも勝つてやらうとは思はなかつた。あたまからあんな奴が……とけなしてゐたのだ。それが矢つぱり無理で且つ不利益であつた。

おれは近頃になつて二三の醫書を読んだ。それはおれに色々の新智識を與へて呉れた。しかしおれが以前から想像してゐたことと、そんなに變らなかつた。——おれは人並以上にあの慾情が強いのか知らん。考へて見ても恐ろしいことだ。あの慾情が最初におれの心を囚へてから、そしておれが遂にあの耻づべき行爲をやつてから、もう七八年になる。その間に費したおれの精力はどれほどだつたらう。おれはこのことについて、他に強要し得るだけ大膽ではなかつた。おれは他のものゝやうに、勇敢にはとても振舞へなかつた。しかしおれがもつと金持の息子で、すべての行動がもつと自由になれたら、おれはよかつたらうか。おれがもつと大膽で、否もつと放埒でもつと早く異性に對してこの慾情を満足させ得たら、おれはよかつたらうか。おれがこの通り貧乏で小膽であつたのが、おれの爲には却つて幸福でなかつたらうか。——今のおれには分らない。まだ正當な判断が下せない。おれは不思議で堪らなかつた。おれの周囲の人間が、皆あの慾情とは何等の交渉も關係もないかのやうに、眞面目な顔をして澄ましてゐるのが、おれには不思議で堪らなかつた。おれは始終、憧憬と不安な心持とで、おれの周囲の人間を見廻してゐた。おれの

周囲の人が、平氣で異性に對してこの慾情を満足させておきながら、人前では君子らしい顔をしてゐるのが、實に不思議で堪らなかつた。おれは時々かう考へた。おれも一つ皆がやるやうな手段で目的を達して見ようかと。しかしおれには名譽心があつた。おれには若しそれに失敗したらといふ懸念があつた。失敗した時にはどうだらう。かう考へるとどうしても手がつけられなかつた。又たとへ成功したとしても、おれにはその結果が恐ろしかつた。しかしおれの燃える慾情はどうすることも出来ない。おれは止むを得ず自瀆行爲でその慾情を満足させるより外はなかつた。

おれはこんな調子で僧院生活もした。東京へ来て再び學生生活に入つた。おれは僧院生活の間に、様々の淫猥なる事實を見た。おれはこの神聖なるべき僧院生活にいかん淫靡の風が吹き荒んでゐるかを見て實に驚いた。男僧といひ、尼僧といひ、——おれはこの事實を見聞する毎に云ひ知れぬ不快を感じた。おれは形式的道德家だつたのかも知れない。が何しろ、得々として話す彼等の猥談には、不快を感じない譯には行かなかつた。おれはこの慾情を自瀆で満足さしておけば、他人の道德を破ることもなく、他人から後指をさされる心配もないと考へてゐた。けれども

おれはこの惡習慣を抑制しようと努めてゐた。おれはこの行爲が不快で不快で堪らなかつた。おれは實際幾日もこの行爲に反抗しようと努力したが、いつも失敗に終つた。おれは自分の行爲が既に不快でならなかつたから、他人がかういふ事件に關して得々して語り、少しも悔いてゐない状態を見るのも不快で堪らなかつた。——法衣を身に着けた僧侶が、しかも葬儀の式場で、平氣で淫猥な話をしてゐるのだから。——甚だしいのになると、葬列に並びながら會葬者の中を物色して、自分の關係した女がゐるとかゝるのか、誰某の右隣りだとか、その向うだなどと互に囁き合つてゐるのもある。おれは又その僧侶に一度び貞操を破られた女が、他の男と關係して夫婦になつて、以前の情夫に平氣な顔して和尚さん／＼などと話しかけてゐるのが、いかにも不思議で、また不愉快でならなかつた。

おれは他人の話や自分の行爲に不満不快を感じ、出来るだけ強い反抗を試みながら、いつもその劣情に打勝つことが出来ず、敗北に敗北を重ねてゐた。そしてはいつも堪へられない後悔の念に惱まされてゐた。こんな調子で今日に至つた。おれはこの最近二年前から、その害の非常に大きいことを發見し、又醫書を読んでその影響の非常に恐ろしいことを知つた。と同時におれは、

おれの頭が非常に悪くなつてゐることも知つた。おれはなほ一層強、反抗し出した。しかしこの何^どすることも出来なくなつてゐる悪習慣は、おれが抑制しようとするだけ、一層強烈にこれの劣情を挑發するのであつた。おれは只悶えに悶えた。おれのあらゆる缺點や短所は、すべてこのものと關聯してゐるやうに思はれた。おれはこの劣情の抑制手段として基督教信者となつた。しかしおれは失敗した。おれは聖書を読んで行くにつれ、只管おれの罪惡觀念を強くした。おれは實際おれの周圍の人——牧師、傳道師、その他青年男女の信者の心理状態を疑はない譯には行かなかつた。わけても彼等がこの慾情をどう支配してゐるのだらうかと考へた、否疑つた。おれは教會内に於ける彼等の生活だけしか知らないから——おれは彼等の日常生活を知らないのだから、——彼等が一向そんな問題なんかに苦しんでゐないやうな態度をしてゐるのを見て驚いた。おれは、この人達はもうこんな問題を解決してゐるのか知らんと考へても見た。しかし疑問は今なほ解けないでゐる。

おれが實際無念無想になり得る時は、只彫刻の製作をしてゐる時だけだ。たとへお面を作つて

ゐるにしても。あんなものでも、おれが油土を取扱つてゐる時だけは無念無想になれる。——眞實のおれを打ち込んで、自分の手も頭もその一事に集中させることが出来る。おれは、篋を取つて油土の匂ひを嗅いでゐる時だけが眞實のおれだ。その他のことで、おれが無念無想に働いたもの、また無念無想に働けるものは、何一つない。——おれがいつでも疑つてゐるものは、皆がこの性の問題をどう考へてゐるだらうかと云ふことである。殊に異性に對した時、——どんな高貴な方に對しても、亦その反對に乞食に對しても、先づ第一に胸に浮ぶものはこの問題だ。おれは種々の方面から、異性に對してこの問題を當てはめようとする。種々な方面から、異性がいかにこの問題を取扱つてゐるかを觀破しようとする。おれがこれを考へるに最も都合のいいのは電車の中だ。おれは皆ながこの問題について、少しの苦痛をも煩悶をも感じてゐないやうなのが不思議でならない。

他の人達は二重に考へてゐるからだらう。おれは馬鹿だから二重に考へることが出来ないのだらう。おれはこの問題を解決する爲にどういふ手段を取ればよいだらうかと考へた。おれは次のやうなことを考へた。

一番手取り早い手段は、それを實行すればよいといふこと。

おれはその結果として、屹度この慾情は薄らぐだらうと思つてゐる。おれのやうな殺風景な生活、戀に陥るやうな女の知人もなし、又たとへあつても綺麗な戀をしてゐたい人である。肉の戀などする相手がない。おれは今絶望の淵に瞰んでゐる。すべての望みが絶え切れてしまつた。

(八月十八日午後四時)

おれは今日こんないたづら書きで一日潰してしまつた。しかしおれは今から、この問題に關しても少しおれの考へを書いて見たいと思ふ。おれはまだ頭が痛い。おれにはそれを實行するだけの勇氣がない。おれにはその裏面に何か知ら不安があつた。おれには、何か知らない或る陰影が恐ろしかつた。おれは幸福だつたのか不幸だつたのか知らないが、今まで異性に對して戀文を出したこともなければ、又それ以上の交際を結んだこともない。異性に對しては至極潔白であつた。第一おれの周囲には、そんな異性が一人もなかつた。これが缺點であつたのかも知れない。それは兎に角、おれは他にどうしてこの慾情を満足させて來たか。おれは不快な自瀆に依つて、

一時的の快樂を食つてゐたのだ。

おれは最初にその害毒を聞かされた時、不思議だつた。何故に異性間の關係には害がなくして、自瀆にだけ獨り害毒があるのかと。ところが段々にその害毒は自覺されて來た。

おれがあゝの害毒に氣付いてからは、斷然その不快な行爲を中止しようと決心した。しかしどうしても出來なかつた。おれはそれから種々の醫書を読み出した。しかしそれは半分は好奇心に驅られてゐたのだ。おれはその害毒を充分に知り盡してゐて、まだ止められなかつた。どうしても止められないので、終にはおれは、中毒で死ぬなら死んでもいいと全く自棄的になつてしまつた。そしてこの方が厄介な結果を來さないでいゝ位に考へてゐた。おれはどういふものか思想を轉ずることが出來ないのだつた。今でもさういふ傾向がある。おれはその害毒を直接感ずるやうになつた。おれはこの行爲のことを、他人から云はれると非常に不快を感じる。——自分が直接に云はれてゐないでも。——しかし斷然これを中止することはどうしても出來ない。おれはその後は只その度數が少くなつたといふだけで、矢張りこの不愉快な快樂を食つてゐた。若しおれに異性の方から言ひ寄るものがあつたら、おれは屹度承知してゐたに相違ない。おれは眞實をいふと、

いつでも何か心待ちに待つてゐるやうな気がしてゐた。その心持は、平生は壓へつけられて、隠されてゐるやうでも、何かの拍子には出て來ずにはゐなかつた。

おれは危険だから、すべての異性から遠ざかつてゐながら、心の中では近づいて行きたいやうな気がしてゐる。若しおれが少し大膽であるとか、もう少し自分や周囲のことに無頓着であるとか、——要するにも少しおれが眞の利那主義者、實行主義者であつたら！ おれにも確かに二度や三度、機會は與へられてゐたのだつた。しかしおれは女中などとそんなことはしたくない。下女風情（こんな言葉を使ふと、おれの平素の平民主義に反するが）などと情を通じたとは云はれたくない。他人に云はれるよりも、おれの良心に云はれるのが辛いのだ。第一がたかだ。あいつがおれに言ひ寄らうとしやがつたのだ。しかしおれはその時分はまだ恐がつてゐる時分だつた。やつはおれの床の中（丁度夏のことだつたので蚊帳を釣つてゐた）に入らうとして來やがつた。おれは驚いて、やつが入ることを許さなかつた。おれはその時からやつに敵討をされたのだ。おれとやつとの喧嘩も、おれが後で考へると、それが原因になつてゐたのだ。奴は自分の目的が遂げられず、耻を搔いたのでその意趣返しをしやがつたのだ。

おれはかう云ふ調子で、平常、心竊かに望んでゐることが、いざ實現されさうな場合になつて來ると、すつかり裏返つてしまふのだ。第二はとくだ。やつにおれは、その情夫や親達に出す手紙を屢々書かせられた。その後情夫とは手が切れたので、親達や親戚に出す手紙を書かせられた。そんな關係からして、奴から變な素振りを見せられたことは二度や三度ではなかつた。この時だつて、おれが何とか云へば直ぐ出來たのだ。しかしおれは玩弄物にされなくなかつたので、またおれは奴なんかにおれを知られなくなかつたので、おれの方ではそんな素振りも見せず済ましてゐた。第三はふでだ。奴は大塚にゐる時分だつたが、やつぱり寄るとさはると、そんな素振りを見せやがつた。それは隣りの白屋の書生が女中と關係してゐたので、自分もそんな氣になつたんだらう。おれはこのやうに皆なをはねつけてゐた時でも、やつぱり劣情は盛んに燃えて、不快な思ひをしつゝ自瀆を續けてゐた。

おれは近頃非常に頭が疲れ易くなつて、心臓も弱くなつてゐる。おれは確かにあの結果だと思つてゐる。それに時に遺精もやる。おれは愈々あの害毒にあてられたことを自覺した。おれはこれを矯正したいと思ひ立つた。丁度その時仙臺のS子の話が出た。おれはS子に對して、こんな

悪癖ある種を残させたくはない。おれはS子と本當の喜びを分かちたいので、おれはS子の爲にもこの悪癖を全然なほしてしまはねばならぬと考へ出した。おれは實際にS子とは理想的な満足な生活をしたと思つてゐる。

おれはS子の話が出てから、おれの態度なり思想なりに、多少の變化を受けたことを自ら認める。おれは初めて、人間には希望がなければならぬといふことを知つた。おれのやうな夢の如き希望——まだ海のものとも山のものとも知れない微かな希望ですら、これだけの影響を與へるものとしたら、確固たる希望を持つてゐる奴等が、全身の筋肉にしまりのあるのは當然のことだ。

おれは今までも、この習慣の絶對禁止を幾度も日記に書いて心に誓つたが、どうしても止められなかつた。しかし今度こそはその無藥療法を實行して、着々とその効果を擧げて行きたいと思つてゐる。なほ思ひ出すに従つて書くこととする。おれの思想が又どう變遷するか分らない。かう言つてゐても亦逆進するかも知れない。なんしろおれは、世の多くの青年がこの問題をどう解決してゐるか考へると、不思議でならない。幸ひにおれの希望が達せられ、又S子との話の實

現せんことを祈りたい。S子よ、健在なれ。御身のリウマチスはその後どうなつたか……

(八月十八日午後九時半記)

餘程おれの精神も落ちついて來た。昨日はとうとう日記を書かなかつた。昨日は至極平穩に過ぎた。朝半日は眞面目に仕事が出来た。午後からはいろいろの書物を読んだ。おれは仕事を持つてゐるんだ。それに自分の智囊を肥したい爲に、讀書はどうしても思ひ切れないのだ。おれは仕事一方に固まれない男か？ おれのこの頃は餘りに考へ過ぎる傾向がある。おれは突込んで書いてゐる——おれ自身といふ者を、おれは一昨日ひよつとしたらおれも自殺するんぢやないかと思つた。スタンリ・ホルの「青年期の研究」にあつたやうに、おれは餘りに罪惡觀念が強過ぎる。おれの此の傾向が一層進むと、おれは遂に自殺するだらう。おれはかう思つて戦慄した。

おれは大變に悪いことをしてゐた。この十七日に東京に歸つた時、母や兄から頼まれたことを、おれはすつかり忘れてしまつてゐた。おれは何といふ無責任な人間なんだらう。おれは昨晚まで

すつかり忘れてゐた。おれが氣のついた時分には、自宅でもその話が出てゐたのかも知れない。一度それに氣がつくと、おれはもう堪らなくなつてしまつた。おれの良心は酷くおれを責めやがる。おれは電話のかゝる度に、人の來る度に、その事でないかと、非常に不安になつて來た。おれの神経は非常に鋭くなつて來た。おれは不安の中に寢入つてしまつた。おれは夜中にその夢を見た。おれが召集令を受けたのだ。おれはまだ入營もしないのにどうして召集されるのだらうかと不思議に思ひながら、體格検査を受けてゐる。軍醫はいゝ身體だと云ふ。おれはこんなに心臓の動悸が激しいではありませんかといふ。軍醫は、なんでもないといふ。おれはそれを聞いて、それではおれはあの習癖があるため、何でもないので自分一人だけで心臓が悪いと決めてゐるのではないかと思つた。兎に角おれは、仕方がない、召集されるのも面白からうと思ひながら自宅に歸つて來た。すると母が、一時に兄弟共呼出されるのだと心配してゐる。おれは初めて、兄や母から頼まれてゐたことを、まだ果してゐないのに氣がついた。おれはどう云つて此の場を逃れようか、いや有體に云つてあやまらうかと、四苦八苦の思ひで悶えてゐる所で夢が破れた。朝の五時半だつた。

おれは今これから電話で自宅に問合せ積りだ。旨く行つて呉れゝばいいかと願つてゐる。おれは苦しくて堪らない。おれはこれで親身に對する情愛がないと云はれても仕方がない。實際おれは、本當に親身の情愛を體驗したことがない。それは母や兄はおれに對して親身の情愛を見せてゐて呉れるのだらう。しかしおれは、おれ自身が本當にこれが親身の情愛だとしみじみ自覺するやうな情緒を経験したことがない。なぜおれの心は、こんなに兄や母の心から隔つてゐるのだらうか。おれは實に苦しい。堪へられない。(八月二十日朝八時半)

おれは本當になぜこんなに責任感が薄いのだらう、おれはあの晩直ぐ尋ねる積りだつたのに。おれは、今長距離電話をかけておいたのだが、——良心の呵責と苦悶とに、頭腦が非常に混亂してゐるので何も書けない。(八月二十日朝九時十分)

今日は八月二十日である。あと十一日で八月はなくなるのだ。おれは、おれにも意志がある、おれにも男の意地はある、と何度もこの日記につけておいた。おれは三十一日頃には、今の仕事

は完成されてゐると、兄にも母にも誓つておいた。おれは何故あんなことを誓つたらう。おれはまだく人間ぢやない。これをやり通せば人間になれるだらう。おれは男の意地を示す爲に、あと十日餘りで七百頁を書かねばならない。おれは毎日二十枚位しか書いてゐない。それも連続しては書いてゐない。それより少い時が多い。

おれは毎日殆ど讀書に過してゐる。自分の仕事を捨てよおいて。「おれにも男の意地はある」おれは此の言葉に對してでも、今の仕事をやり遂げねばならない。しかし日中はとても駄目だ。朝と晩だけだ。夜間にしつかりと働かねばならない。おれの意地をも見せなければならぬ。

(八月二十日午後三時半)

今朝は濃霧だ。もう秋だ。虫の聲はまだ弱い、しみんと秋の氣が満ちて來た。おれの入營も近づいた。おれの入營生活。軍隊生活の一年間。おれの生涯を支配する此の一年間。おれは今過渡期だ。進むも退くも、これからのおれの生活に依つて分るのだ。おれは入營を喜んでゐる。おれは軍人を呪ひ、軍隊生活を呪ひ、軍隊教育を呪咀した。今までのおれは斯うだつた。しかしこれから新生活に入らうとするおれは、今さうぢやない。おれは軍隊生活に依つて、今までの病的性質を除去しようとするのだ。おれは軍隊教育を利用するのだ。利用してやるのだ。おれの名譽を得るため、おれの地位を作るため、おれの信用を博するため、おれの意志を強固にするため、おれを活潑な人間にするため、おれに新らしき精力を養成するため、おれのサンデイカリズムの運動をする時のため。おれはおれの爲に軍隊教育を望み、おれはおれの爲に入營を喜ぶのである。

おれはこの家の子供達の動作に依つて、おれ自身の幼年時代を考へさせられる。おれは時々子供達の所作や言語に不満を感じさせられる。しかしおれ自身の幼年時代を考へる時、おれの不満に燃えた心は、泣きたいばかりに消え失せてしまふ。おれはまだく駄目だ。おれは子供を御することを知らない。おれは二年ほど前までは、皆がおれのやうな性質だと見做してゐた。おれは人を愛する。しかしおれの愛は偏頗な愛だ。おれの愛は熱がある。しかしその熱は無鐵砲である。おれの愛は本當の愛かどうかは知らない。おれには全く分らない。しかし、おれの愛は力強い燃えた愛だ。おれの愛は活きた愛なんだ。そのため偏愛になるんだ。おれの愛は只一つにしか

働かない。おれは、それを短所だとも長所だとも考へない。おれは、おれの愛は燃えつゝある愛だといふことだけを知つてゐる。

おれは子供の清いところが美しい。おれはおれの過去二十二年間の生活状態に考へ至る時、親たる者の一寸した不注意が、どれだけ子供に悪影響を及ぼすか分らないことを思はずにはゐられない。おれの性質は父親のために悪い傳統を受けたのだ。しかしおれは怨むこともない。おれはおれの父親がどんな男で、どんな性質の人間であつたかを知らない。おれは母や兄から、その容貌なり性質なりを聞き知つた。寫眞でも見た。しかしおれの頭脳には、實際に父親の印象は何にも残つてゐない。只おれの頭の中で見出す父は、大酒家であつたといふだけのことだ。おれに斯う思はせたのは、母の罪だ。おれの心に、父に對する敬意も何にも持たせなくしたのは、母の罪だ。おれは大酒家の父を持つたため、こんなに頭が悪いだらう。おれは年を取るに従つて、又その悪影響の大なるを知るに従つて、父に對する敬意の念が益々薄らいで行くばかりだ。そしておれは決して酒飲みにはなるまいと決心した。おれのこの元來悪い頭を益々悪くしたのは、おれだ。全くおれの罪だつた。

おれは二三日前に蟋蟀を二三匹捕まへて、それを密閉した箱の中に入れて、今日まで捨てておいた。おれはその虫が毎日その箱の中で動いてゐる音を聞いて、まだ生きてゐる、まだ生きてゐると思ひながら放つておいた。今日開けて見ると一匹は既に死に、一匹は半ば死に、一番大きい奴だけがまた生きてゐた。おれは何といふ人間だらう。おれは好奇心に驅られて無意識の中に、こんな罪惡を犯してゐたのだ。おれの惨忍性が働いてゐるのだ。おれはおれの惨忍性が、無意識の中にも働いたかと思ふと悲しい。おれはおれを思つて、悲しい。(八月廿一日朝七時記す。)

おれは昨日東京に歸つた。おれは今井を大きな鐵筋コンクリの新築工事に訪ねた。おれは又おれを苦める種を作つた。おれは彼を訪ねた時、おれ自身が彼よりも非常に愚かしく思はれた。彼は惻巧だ。彼のやうな奴が我が日本の現代に適するのだらう。おれも學校のいふ通りにして居れば、月に三十圓は泣いても笑つても入るのだつた。おれも亦彼れのやうに、勝手な熱も吹けた

のだ。しかし今のおれにはそれが出来ない。おれは残念で仕方がない。おれはおれの才を現はし得ずして死ぬのだらうか。おれの才を現はす時はいつ来るか分らない。おれの才能を犬死させるのは残念だ。おれはおれの性質を能く知つた後援者が欲しい。おれをして、おれの才能を自由に發揮さして呉れる人、束縛しないで、精神的物質的の苦しみを離れて、おれの才能を充分發揮させて呉れる人が欲しい。おれは今井如き人間よりは、確かに一段上だ。おれは藝術的には彼よりも屹度遙かに高く成長することが出来ると自信してゐる。しかし他と調和する力は缺けてゐる。おれは生活のことなどを考へずに、一向専念に彫刻の製作に向つて見たい。

おれは新築工事を一通り見て歩いた。しかしあれくらゐの彫刻は屹度やるだけの力はあると思ふ。おれは、どうしても彫刻家になりたいといふ希望の爲めに、おれの就職口を振り捨てたのだ。おれは實地をやりたい爲に、すべての就職口を捨てたのだ。そして今だに生活の安定が得られず、全く反對の筆で。——最も六かしい筆で小使錢を稼いでゐるのだ。おれは學校とも別れ、同窓とも別れて、孤立してゐるのだ。おれはどうしても、藝術を捨てる譯には行かない。

おれは藝術を捨てる譯には行かない。おれは弱い。おれは無一文である。これからの世に、無一文ではどうしても後の世に残るやうな藝術品は得られない。生活に餘裕のないものは哀れだ。現代の人々を見よ。

おれは痛切に感ずる。おれは今おれの同窓の誰彼にも負けてゐる。金の點でも、その他の點でも。彼等は今すべて勝誇つてゐる。おれは彼等より以上に出なければならぬ。おれは彼等を驚かすだけの製作品を残さなければならぬ。

おれは其の手段として、仙臺の話をも是非取りきめたいと思つてゐる。かう云ふと、随分おれは利己的の人間のやうだ。しかしおれには此の話は最もよい配合だと思ふ。おれはこの結婚に依つて、おれの才能を充分に發揮することが出来るのだ。S子は五黄の寅だ。——おれの數へた處によれば。彼女は勝氣の性質だらう。彼女は家事を一人で切り廻すことが出来るであらう。屹度それだけの力はあらう。おれには最早や生活の苦しみもなからう。おれは家事のことなどは少しも

考へずに、専心製作に従事することが出来よう。おれに取つては誠に都合のよい良縁なのだ。

おれは昨日遅く歸つて來た。おれは女といふものは、幾歳になつても子供を一つ満足に養育することすら出来ないものだと思ふ。しかしおれの知つてゐる女といふのは、この家の細君と兄嫁とだけだ。たつた二人のことだから、おれの觀察の狭い爲かも知れないが、彼等はどうすれば子供が喜ぶか、どうすれば母親自身の意中をわが兒に傳へられるかといふことなどは、少しも考へたことがないらしい。只漫然と母親といふ名前だけで、わが兒に乳房を含ませるだけで、子供を理解してやらうなどいふ氣は、少しもないのだ。實際三十三にもなる女が、一人の子供をどうすることも出来ないとは、哀れといふの外はない。彼等はその爲に、どれだけ他人に迷惑をかけてゐるといふことなどは考へたことがないらしい。

おれは昨晚階下の座敷で寝ることになつた。おれは十時過に床に入つて、朝の六時まで三度起された。それが實際大きな聲で長く泣かれるので閉口した。泣く兒よりもおれの方が参りさうになつた。細君は寝てゐるのか、醒めてゐるのか、平氣の平左だ。おれは不平不満で眠られず、

ますます神経が高ぶつて來る。おれはほと／＼女の駄目なことを知つた。おれはS子は——彼女だけは例外だと思ふ。随分勝手な考へのやうだが。おれは、彼女の勝氣な性質では、そんなだらしないことをすまいと思ふ。この家の細君などは、もう神経が麻痺してゐるのだらう。おれはこんなことぐらゐにやきもきするやうでは、とても偉い者にはなれまいと思ふが、仕方がない。こんな性質に生みつけられたのだから。おれは努めてのんきにならうと思つてゐるが、どうも中々旨く行かない。

おれは此の頃、おれの輕卒をひどく悔いてゐる。これもその後悔の一つだが、おれが輕卒にもこの家の留守居を承諾したのは悪いことであつた。もう仕方がない、おれは金で縛られたのだ。おれは今朝或る用事を兼ねて東京へ歸らうとした。しかし金のために妨止された。おれが行けば三十錢だ。子供が行けば半額で濟む。たつた十五錢でおれの意志も豫定も破壊されてしまつた。おれは只おれの輕卒を悲しむより外はない。(八月廿二日午後一時半)

今日は何といふ波瀾の多い日なんだろう。

おれが悪いのだ。おれが頑としておれの意志通りにすればよかつたのだ。おれの心も知らずして、傍からいろんなことを云ふものだから。儉約せねばならない、おれが行くのと子供が行くのとで十五錢も違ふ、なんて云ひ出すものだから、おれは癪に障つてしまつた。その後のことでもだ。おれは其のまま送らうと思つたが、それもおれの思ふ通りにはならなかつた。しかし皆なおれが悪いのだ。おれが輕卒にこの家の留守居など引受けたからだ。おれの思ふ通りにすればよかつたのだ、おれも二十二歳だ。おれの輕卒は今に始まつたことではないが、今日ほど残念に思つたことがない。お蔭で今日は一日遊んでしまつた。實に愚なる日だつた。おれの爲に記しておく。(八月廿二日午後八時半)

午前中勉強。午後から自宅に歸る。要件は召集のことに就いて。夕方兄と共に散歩する。近來珍しいことだ。愉快に遊ぶ。久し振りで肉體の運動を盛んにやつた。頭が非常に爽快である。遊びほうけて何にも浮ばない。しかし親身の愛は特別なものだと感じた。やつぱり親だ、兄だ、姉

だ。おれも人並になつたものかな。おれも剛巧になつたものかな。

おれは消極的の人間だ。おれにも發表慾はある。勝負事もやりたい。しかしおれ自身を反省する時、その力は何處かへ潜んでしまふ。勝負事は面白い。しかし得意でないものはしたくない。これも利己的か。負惜みの度を越したものか。おれには分らない。おれはこれでは因循だ。老成だ。おれはもつと廣く大きくならなければならぬ。おれは未成品だ。この未成品を完成しなければならぬ。刺戟も受けねばならぬ。——今夜は歌を十首ばかり作るのだ。そして明日「天體」に投稿するのだ。——仙臺のS子健在なれ。(八月廿三日夜八時半)

おれは到頭送つてしまつた。三行にして十首。送つてからあゝもかうもと考へたが、もう駄目だ。おれの價値が定まるのだ。おれは拙い。もつと想も詞も練らねばならない。どうなることかと心配だ。(八月廿四日午前十一時半)

今日は非常に頭が痛い。おれは仕事をすると直ぐ頭が痛くなる。何の原因か分らない。おれは

そんなことの起る原因を作らなかつたのに、すぐ頭が疲れてしまふのだ。

今日は廿五日だ。まだ一冊も出来てゐない。おれは罪を作つた。この月中には出来るなどと約束して置いたぢやないか。おれは心では少しも休まずに仕事をする積りなのだが、しかし腦の方ではおれの意のままに働いて呉れないのだ。心苦しくて仕方がない。他の人はさほど思つてゐないかも知れない。しかしおれはおれ自身に對して心苦しい。

おれは此の頃將棋をやり出した。以前よりも本氣だ。それで少しは上手になつた。卓郎君にも又郎君にも、秀郎君にも勝つやうになつた。中にも又郎君が最も手強い。今日午後秀郎君とやつて、彼がおれの手を疑つたので、おれは腹を立てた。思つて見れば大人げがない。おれは後でおれの心が淺ましくてならなかつた。(八月廿五日午後三時過)

朝早くから、隣りの九官鳥はのんきに口笛を吹いたり、お早うと云つたり、鶯の鳴く聲を眞似たりして、秋風に吹かれてゐる。おれは全く九官鳥を知らない。そして彼れの本來の鳴聲を聞いたことはない。只朝から晩まで、人の口眞似ばかりを時も頓着もなしに根氣よく繰返してゐるばかりだ。彼は自分で轉る言葉の意味を知らない。彼は勿論時間の觀念などない。——おれは毎日殆んど機械的に机に向ふ。そして手を動かしてゐるが、原稿紙五枚分も書かないうちに、頭が痛くなつて来る。それから駄目だ。雜念が湧いて来て腦が混亂してしまふ。おれは今月中に出来るといつた。おれは心ばかり苛立つて、濟まなかつたとか、又出来ないことを知りつゝ出来るなどと云つた。——しかしおれは實際やり遂げる積りであつた。おれは今月中に書き上げて、それから清書にかゝれば先づ九月五日頃には完全に出來上げる積りであつた。ところが此の一週間といふものは、頭が痛み通して直ぐ根氣がつかけてしまつて、まるで遊んでるやうな日ばかりである。これではいけない、これではいけないと思つて、ペンを取つても直ぐ疲れてしまふ。そして苛々して來てどうすることも出来ない。おれはいつでも不安な、落着かない氣持で、そして何も出來ずに机に向つてゐる。——机に向つてゐなければならぬ。座敷牢に入つたも同様だ。眠ることも出来ない。——おれが明らかに理由を話せばよいのだらうが、おれは話したくない。おれが頭が痛くて階下へ降りてゐると、この家の人は怠けてゐるものと思つてゐる。おれが朝でも掃除してゐると、そんなことは女中がするからしなくつてもいふ。仕方がないから轉がつ

55

てゐると、今度は勉強もしないでと来る。おれは實際どうしていゝか分らない。それに子供が又厄介だ。どうかすると直ぐやつて来やがる。おれは、おれの信用に關するやうなことを、子供にも見せたくない。今までのおれなら、なに自分一人をどうかすればいゝのだから構はない。今度の仕事でもこんな頭痛を痛める必要はない。おれはおれで通せばよいのだ。しかし今のおれは以前のおれとは違ふ。おれは漸く芽の吹き出かかつたおれの將來を、此のまゝ無碍に流したくない。それも誰の爲でもない、おれ自身の爲に。おれはおれの將來を壊したくない。

おれは今おれの周囲の人々から試験されてゐる。おれが落第するか及第するか、——未來の鍵を握むか逃すかの今は瀬戸際だと思ふ。殊に兄から試験されてゐるのだ。其處へ持つて来て、おれが今度の仕事をやり損つたといふことは、大なる打撃だ。おれの信用に大打撃を與へるのだ。おれは心ばかり苛立つてゐるが、仕事は一向に出来ないのだ。

おれは頭の痛む原因を調べて見た。しかし近來はこれといふ原因もない。睡眠不足か。だが夜の十時から朝の五時前後まで、七時間も寝てゐるのだからこれでもない。ではあの行爲か、否近來はそれどころでない。では何だらう。——矢張り以前のあの弊害が今に及ぼしてゐるとしか思

へない。若しそれであるならおれは何とも云へない。

抑もおれが此の家へ来るやうな運命になつたことが、おれの此の病を出した近因だ。おれはそんなこととは知らないから、變化があつて仕事が出来ると喜んでゐたのだ。家に居れば自由に寝て、自由に起きて、自分の自由な時に仕事が出来る。飾ることはいらぬ。——矢張り自分の家に限る。親身の處よりよい處はない。おれは近頃しみじみ親身の愛といふことを考へさせられる。おれは今まで全く親身——肉親といふことを考へなかつた。おれはおれの親兄弟にも反感を持つてゐた。反感どころか、寧ろ憎惡の念を持つてゐた。そして却つて他人に比較的好意を持つてゐた。——それは全く間違つてゐた。

おれは學校時代に最も親しかつた今井が、今おれと次第に遠ざかつて行くのを感じる。おれは惜しいやうにも思ふが、これも仕方がない。おれは考へ違ひをしてゐるのかも知れない。しかしおれと彼との生活は今全く變つてしまつてゐる。さういふ點で思想にも變化を來したのは無理もないことだ。おれは彼と離れたくない。しかし斯うなるのもいゝのかも知れない。今までの彼と

おれとの親密は、本當の親密でなかつたのかも知れない。——この是非は今おれには分らない。おれは此の事を明らさまに彼に話して見ようとも考へたが、しかし今暫く待つことにしよう。

(八月廿八日午後二時記)

おれは此の頃將棋に夢中になつてゐる。一日に五六度は必ずやる。そんな見苦しい負けはしない。眞劍だ。おれの悪い頭が將棋と歌に夢中なつて腦を使ふために、仕事の方がなほお留守になる。——しかしこれも頭が痛くて仕事が出来ないからだ。

おれは昨日から今日にかけて、夏目漱石さんの『心』を読んだ。その主人公とおれとの性格が餘りよく似てゐるので、おれは非常に懐しく思つた。あの主人公が友人のKに對する態度なんか、まるでおれだ。しかしおれは彼ほど強くはない。若しおれが彼のやうな立場にあつたら、——寧ろKのやうに自滅を圖るだらう。おれと今井との關係のやうだ。おれはいつもKの立場にゐる。今井はいつも主人公の立場にゐる。彼が發展すればするほど、おれは萎縮してしまふ。——反抗し

て、反抗して、そしておれがまだ彼に負けてゐるのだから、おれは萎縮せざるを得ない。おれはおれを反省することのみ頭を痛めてゐる。痛めてゐた。彼は早くその模倣に依つておれより上になつた。おれは全然模倣を否定して、おれ自身のタイプを作らうとした。又してゐる、それがため、おれは他人より非常な不利な地位にゐた。おれは今井から模倣を勧められた。しかしおれは用ひなかつた。おれは益々不利な地位になつて、彼は益々上になつて行つた。おれは學校の成績よりも其れが辛かつた。おれは煩悶せずにはゐられなくなつた。彼とおれとは段々疎遠になつて來た。おれが萎縮し、煩悶し、苦悶してゐる間に、彼は益々鰻上りに發展して行つた。

(八月廿九日午前十時記)

おれは今日もしみ／＼と悲しくなつた。いくら悔いても及ばぬことであるが、おれは何故たとへ三十圓(今から見れば、それも大金だ)の俸給でも、あの會社へ入つておかなかつたのだらう。それは金が少いからではない、ブラスターマンとして暮すのが厭だつたのだ。それよりも假令どんな小さな所でも、自分の好きなことをしたかつたのだ。いくら後悔しても駄目なことだが、どうしておれは馬鹿だつたらう。あの會社へさへ行つて居れば、皆に迷惑をかけずとも濟ん

だのだ。泣いたつて仕方がない、何といふことだらう。あんなに先の見えなかつたおれが悲しくつて仕方がない。

今日は秋雨が降つて陰氣な日だ。じめ／＼と寒くつていやな日だ。おれは今又、おれの上京以來のことを考へてゐる。机に向つて仕事もせず、一心に雨の音を聞きながら。——おれはあの事を思ひ出して泣いてゐる。一九一×年九月十六日。おれはもうあのビルディングの三階にも永久に昇れない。あの部屋も、あの机も、あの椅子も、あの卓上電話器も、——もう見ることが出来ない。二度と見る事が出来ない。あの建物は、あの窓は、今もあの通りに見えるけれど、部屋はどうなつてゐるか分らない。誰が入つてゐるか、それともあのままか。おれはあの下を能く通つた。そして定まつてあの角から斜に見た。いつ見ても、窓にはカーキ色の窓掛が垂れてゐた。——これはおれが一生忘れられない重大な事件である。過去二十二年間の中の最後まで残る強い色彩のエピソードである。忘れることの出来ないエピソードである。

基督教信者であるおれが「天路歷程」を書いてゐるのだから、随分身に泌みる。おれは實際基督教信者たる態度を持してゐるであらうか。おれは純朴な基督教信者にならうとしてゐる。おれは教會には行かないが、決して没却してゐるのぢやない。しかしおれはいま少し離れてゐたいのだ。おれの行く時機もすぐに來る、今年の暮になつたら。——教會に行かなくなつたつて同じことだ。けれども行くことは少しも悪くない。おれにも別に差支はないのであるが。……（八月廿九日午後二時肥）

おれは近來飯が食へなくつて困つてゐる。この家の人々も心配してゐると云つて呉れてゐる。おれは少しも食ひたくない。おやつも欲しくない。全く食欲が減つてしまつた。頭が頻りに痛む。仕事が出来ない。

おれは随分此の日記で、おれの劣情に對する告白をやつた。これで見ると、おれは餘程の變態性慾者であるやうに思はれる。しかしおれ自身はさうと考へない。おれは只細かいことまで詳細

に書いた爲だと思ふ。おれは實際、この日記の巻頭から、随分すべてのことを大膽に、詳細に、率直に書いて来たことを愉快に思つてゐる。おれの蔭には今大變調がある。それはおれの思想の矛盾を知り、おれの性質の委曲を知る唯一の材料だ。これはおれの陰影だと考へてゐる。おれには大切な品物だ。又おれがこんな頭の痛いのは、一つは將棋の爲かとも思ふ。おれは非常に強くなつた。子供は負けるやうになつたら、しようとは云はない。正直なものだ。

今夜は雨漏りの爲に又座敷で寝るのだ。また此間のやうに、赤ん坊に泣かれて眠られないのかと心配してゐる。實際この家の細君は、神経が麻痺してゐるのだから。——おれは家へ歸りたい。兄の處へ。來月一日に歸るのだ。まだ三日ある。仕事は出来ないけれども歸りたいのだ。雨は止まない……(八月廿九日午後九時半記)

今日はどうしたのか、起きぬけから頭が痛んで仕様がな。おれは早朝からかうして休養してゐる。おれが餘り元氣がないので、この家の人々は皆心配してゐるさうだ。おれもこれでは皆に

不快な感じを與へるだらうと思つてゐるのだが、どうしても陽氣になれないのだ。おれは今朝「家庭衛生講話」を讀んで見た。おれの病氣はどうも神経衰弱か何か分らない。おれはヒポコンデルらしい。おれは實際馬鹿だ。おれは餘りに神經過敏になり過ぎてゐる。おれの此の病氣もやがては癒える時が来るだらう。——實は内々どうなることかと思つて非常に心配した。仕事はどうとしても取返すことが出来る。本當の精神病になつたら取返しがつかない。今日は一日休養することにする。今は比較的おれの頭も落着いてゐる。全然休んでゐると又仕事が見たい氣にもなる。それに期日が切迫してゐるのだから。しかし後の爲に今日は休むことにす。一日には東京へ歸りたいと思つてゐる。(八月卅日午後二時記)

あゝ、おれの頭はヒポコンデルか、神経衰弱か、但しは本當の精神病か。おれには分らない。全く分らない。(八月三十日夜十時記)

青年の日記は此處で終つてゐる。

八月三十一日、彼は突然に熱發した。その熱は數日間に亙つて少しも下らなかつた。醫者は病名を附けるのに迷つた。遂に彼は東京に連れ歸られて、或る病院に入院した。其處に彼は二週間程ゐて、ある朝死んだ。病死ではない、病院の三階の窓から街上に身を投げて死んだのである。或る新聞は六號活字で欄外に、「青年の厭世自殺」と題して、彼が哲學書に讀み耽つた結果だと報道し、又ある新聞には、多分痴情の果だらうと報ぜられてあつた。——しかし彼の死は遂に彼自身にも永遠の謎であつた。

田舎教師

一

兄嫁の來たのは正司が十九の暮であつた。其の翌年の春、彼はとう／＼兄の勸告に従つて、縣の師範學校に入ることになつた。

正司は兄嫁の來るまで内なるようとは夢にも思つてゐなかつた。彼が隣村のさる舊家へ養子に行くことに話の定まつたのは、兄の縁談がまだ持上らない以前のことであつた。其家には彼と同じ年頃の娘が一人あつた。仲人が度々双方の玄關口を往復して、興入の日までほど定まると、それが、いつも先方から道理らしい理由を附けて延期を申込んで來た。最初の一二度は此方も素直に其の要求に應じてゐたが、餘りに同一の申出が度重なるので、密かに人を遣つて探らして見ると、相手の娘には、以前から既に村の或る若い男が密通してゐると云ふことが分つた。其處で兄

の忠男は大いに腹を立てて、即座に其の縁談を断つてしまつた。

村の古い、豪家に生れて、幼少な時分に両親に別れて、何ほども年の違つてゐない、お人好しの兄と二人で、朝夕大勢の召使にちやほやされながら大きくなつて来た正司は、殆ど完全なる一個の小暴君に出来上つてゐた。小供の折から學校が嫌ひで喧嘩が好きで、近所の遊び仲間を窘めてばかりゐた。崖から衝落されたものもある。鎌で額を切られたと云ふものもある。其れでも彼の家柄を恐れて、誰も何とも云つて来ない。其れを好いことにして正司は益々亂暴を振舞つた。彼の姿がちらとでも見える時は、村の小供等は決して彼の門前を通らなかつた。酒は十五六の時分から味を知つた。さうして丁度魚が水を飲むやうに其れを飲んだ。力の強いことゝ云つたら、村の若者も舌を巻いてゐる。十八の時に而も高足駄穿きで、五斗俵石を擔ぎ上げたと云ふことが、今も彼等の一つ話になつてゐるほどである。養子の縁談がふいになつてからの正司は、毎晩村の遊蕩友達と伴れ立つて、あちこちの小料理屋を歩き廻つては、強い地酒と小汚ない女とに親んだ。そしては至る所で喧嘩をした。

「あゝ自棄やになつても困る」と、流石の忠男も眉を擡めた。

其頃は徴兵令が初めて世に布かれてからまだ間もない時のことであつたので、人民は非常に其れを恐れた。さうして様々の苦策を講じては、どうかして徴兵を免れようと試みた。弟思ひの忠男も絶えず其れが氣がよりになつてゐた。彼が自分の家からは大分下目の家柄にも拘らず、仲人口だけを軽々しく信じて弟を養子にやることに同意したのも、豫てから正司を早く一家の戸主にしておきたいとの腹があつたからである。其の頃は戸主にさへなれば兵役の義務は免ぜられることになつてゐた。

「どうだね、師範學校へでも入つて教師になつて見ては。さう毎日ごろ／＼してゐても仕方があるまい。」忠男は時々正司に云つた。けれども生來學問の嫌ひな弟は、いつも生返事をするばかりで埒が明かなかつた。

「其れにお前も來年は愈々徴兵検査だ。お前のやうな好い體格をしてゐては、取られることは極まつてゐる。——だが、師範學校さへ卒業しておけば、取られても六週間現役で済むんだからな——」

「私は生れつき眼が悪いから、徴兵は大丈夫ですよ」と、正司は云つた。

「其れが宛になるものか。隣村の興三を見い。あんなしよほしよほの爛眼でさへ、とう／＼取られて行つたぢやないか。」

「しかし私のは近眼だから——」

けれど正司もさう／＼生返事ばかりしてゐる譯には行かなかつた。彼でも眞面目に自分の將來を考へて見る時はあつた。さうして自分の今日までの経歴——殊に昨今のだらしな生活を振返つて、兄貴が心配するのも無理のない事だと考へる時はあつた。勉強などしたいと思ふ氣は更に無いが、此のまゝゐるたのでは詰らないとは自分にも切實に感じられる。其れに毎日兄と兄嫁との中の好い所を見せられるのも餘り愉快ではなかつた。

「ぢや四月から行つて見ようかな。」

正司はしぶり／＼決心した。

二

けれども今まで放縱な生活をして來た正司に、窮屈な學校生活は到底堪へられなかつた。彼は屢々校則を破つた。そしては屢々處罰を受けた。さうして一年級の編入試験には、首尾能く落第

して戻つて來た。

「もう懲り懲りしたから、學校は止めにしようと思ふ——」

正司は兄に相談した。けれども忠男は其れを聞かなかつた。

「そんなことして今年の検査は受ける積りであるのかい？」

彼は弟の氣の進まないのを無理に、又正司を隣縣の師範學校に送つた。さうして取敢へず徴兵猶豫の手續を了した。けれども一年後に於ける正司の成績は、再び以前と異るところはなかつた。

「もう私はかゝつたつて構はないから、今度は検査を受けて見よう。」正司の言葉には半ば捨鉢の氣味が見えてゐた。

「馬鹿を云へ！折角これまで猶豫して來て、そんな自棄を起してどうなるものか！」

其頃丁度同じ縣下ではあるが、此村から二十五六里も隔てた或る山村に初めて小學校が開設されて、教師を募集してゐることがあつた。けれども其處は餘りに僻遠の地になつてゐるので、應募者が容易に出て來なかつた。忠男は戸籍役場に關係があつたので、此の話を耳にするや否や、

直ちに正司を其れに志願させてしまつた。かうして兎も角教師にさへしてしまへば、徴兵の方も亦何とか都合がつくだらうと考へたからである。正司は殆ど強制的に其れに同意させられた。程なく彼は其の小學校の臨時雇に採用される旨の辭令を受取つた。彼の俸給は小學教員の最下級俸で、辭令書には、「月俸金四圓を支給す云々」と業々しく書いてあつた。

其處は随分と山奥であつた。正司は途中から草鞋脚絆になつて、村を出てから四日目に漸く任地に着いた。小學校と云つても山寺の薄暗い本堂を其のまゝ教室に使用してゐるに過ぎなかつた。生徒は僅に十四五名で、大抵は二三里の山坂を越えて通つてゐた。時間など正確に登校するものは一人もないので、止を得ず早く來たものから順々に個人教授をやつて返さねばならなかつた。まるで昔の寺子屋と少しも異らなかつた。冬は非常に雪が降るさうだから、とても授業など出來さうには思へなかつた。正司は學校の近くの材木問屋の離室を借りて、兎も角其處に尻を落ちつけた。

杉材の産地として名を知られた其のあたり一帯の村々は、殆ど米などの取れない山の中であつた。正司の下宿してゐる材木屋では、彼に三度の食事を調理するため、わざ／＼八里の山坂を越

えて米を買ひに行つた。さうして若い男が漸く一斗の米を背負梯に背負つて、それで汗みづくにならねば歸れないほど峻しい山路であつた。村の人は悉く稗や山薯を常食としてゐた。女も男と同じやうに頭をぐる／＼巻きにして、筒袖を着て、手には始中終手甲を穿めてゐた。十七八の娘ですら、食事の給仕をするのに立膝でやつてゐた。さうして「もう澤山だからお茶を——」と云つても、「なあに！」と云つて茶碗を引手操つて、更に山盛に盛りつけると云ふ蠻的なところであつた。此處へ着いた翌々日、正司は兄へ手紙を出さうと思つて、郵便箱の在所を尋ねると、小一里ほどの峠を越えて、隣村まで行かねば無いとのことであつた。而も其の峠は狼の名所だから、氣を付けて行かねば危険だと聞いたので、尙更驚いた。

「狼が出たら直ぐ横へ外れさつしやいませ。あれは眞直に走る獸物だから、横へさへ外れれば逃けられます。」宿の主婦は斯う云つて正司に教へて呉れた。正司はまるで異國へでも來たやうな感じであつた。

これほどまでにした苦策も、然し、全く無効であつた。正司は此處へ來てからまだ二月と経たないうちに、徴兵検査で突然村へ呼返された。

けれども愈々検査を受けた結果は、此の兄弟が長い間心配してゐたほどのものは少しもなかつた。正司の近眼は見かけよりは大分度が強かつたので、彼は直ちに國民兵に廻されてしまつた。

兵役が免除されると、最早再びあのやうな山奥へ戻る必要もなかつた。正司はまた二三ヶ月の間、内でごろ／＼してゐたが、幸ひ村の小學校に教師の缺員が一人出來たので、遊んでゐるよりはと其れへ出る事になつた。勿論忠男の骨折りであつた。

其の學校には教師は正司とも總て四人であつたが、校長初め眞面目に兒童教育など考へてゐる者は一人も無くして、大抵は正司と同様、兵役を免れたいとか、或は村人に威張つて見たいとか云ふ者ばかりであつた。従つて何れもまだ年の若い、生意氣盛りの青二才ばかりであつた。彼等は皆な學校の宿直都屋にごろ／＼してゐて、夜になると酒を買つて來て飲んだり、或ひはこそ／＼出歩いたりしてゐた。正司も喜んで其の仲間に加はつた。

其の頃學校の近所に、二三年前城下から流れて來たと云ふ或る士族の寡婦が住んでゐた。表向は村の娘達に裁縫や遊藝を教へるのを渡世と見せかけてゐたが、實は此村で幅利のさる請負師の

妾となつて、其處に圍はれてゐるのであつた。其の寡婦に一人の娘があつた。出るところへ出たら、さほどの容色といふほどでも無かつたが、何しろ色の眞黒な百姓娘の揃つた中では際立つて見返られた。學校の教師達が夜こそ／＼と抜けて出るのは、大抵は此の娘の家へ遊びに行くのであつた。

其れでも彼等は内心流石に自分等の職業を憚つてゐたので、持つて來た酒を飲むだけ飲んで、愚にも付かぬ氣焰を吐くだけ吐いたら、好い加減に引上げるのが常であつたが、飲むと酔潰れるまで止めないのが癖の正司一人は、いつも取残されて、夜中頃まで其處で寝てゐることも珍らしくなかつた。請負師は其れを非常に憎んだ。さうして何とかして正司に意趣返しをしたいと考へた。けれども日頃から正司の家柄を恐れてゐた彼は、直接正司に衝突することは爲し得なかつた。終にある夜、彼は近所の若い者等に酒を振舞つて、正司の歸り路を要撃させた。

そんな運命とは夢にも知らなかつた正司は、其夜も一人だけ遅くなつて、其家を出たのはもう十一時を過ぎてゐた。何心なく四五間行くと、突然空にひうと鳴つて、耳の傍を掠めて飛んで行くものがあつた。怪んで立止まると、又一つひうと鳴つて通つた。振返る途端に蝶蝶の殻のやう

な礫が額に中つて、忽ち彼の眉間を割つた。血がだら／＼と頬に流れた。

「卑怯な奴原だ！ 喧嘩なら尋常に出て来て勝負せい！」平素から腕力に自信のあつた正司は、額の傷口を抑へながら大地に立開かつて斯う叫んだ。けれども誰一人影さへ見せるものもなかつた。代りに又一つひうと飛んで来て正司の上唇を切つた。彼は止むを得ず女の家まで取つて返した。ところが此處にも既に打合せがしてあつたものと見えて、女はどうしても戸を開けなかつた。正司は再び往來へ飛び出した。此の間にも石はなほ激しくひう／＼と飛んで来て、忽ち彼の後頭部に又二三箇所の傷を負はせた。彼は一目散に傍路へ外れて、深い藪の中を走つた。さうしてとある家の門を叩いた。其處は彼が平素から親しくしてゐる大きな酒屋で、門から玄關口まで大分離れた構へであつた。正司は力の限り呼んだり叩いたりした。門の扉が正司の血に塗れた手で痕だらけになつた。其れでも家の人は誰も起きて来る氣勢がなかつた。其の中に礫は又ひう／＼と追つかけて來た。正司は羽織の裾を裏返して頭に冠つて、又一生懸命に其處を逃けた。さうして更に數ヶ所の傷を受けて漸くのことで學校まで落ち延びた。

學校からの急使で、忠男が二時頃に叩き起されて、新宅の主人と一緒に現場に駆けつけた時は、

正司は學校の隣りの漢法醫の玄關で、血膨れになつた鬼のやうな顔をして寝てゐた。翌朝忠男は其の字の總代を呼びつけて、手厳しい談判に及んだ。さうして其の夜の暴行に加はつた若者一同と、これを教唆した請負師とから、一札の詫狀を取つた。けれども正司は最早其の學校に顔出しすることは出来なかつた。

四

數ヶ月の後、正司は又兄の肝煎で、五里ほど隔てた或る村の小學校の雇ひとなつた。月給は相變らずの最下級俸であつた。

此の村の學校もさる大きな空寺の本堂を校舎に宛てゝゐた。教師は正司の外にまだ三四人ゐたが、何れも自宅から通つてゐる近在の人々ばかりなので、正司は只一人本堂の横の宿直部屋に陣を取つて、授業が済むと毎日其處でごろ／＼としてゐた。さうして三度三度、小使が炊いて呉れる貧い飯を食つてゐた。時には小使に晚酌を振舞つて、遅くまで一緒に面白くもない談話をしてゐることもあつた。

此の村には三代ほど以前に正司の家と嫁の取り遣りをしたとか云ふ古い親戚があつた。學校か

らは小半里ほど離れてゐた。正司は學校へ來てから一週間ほど後に、初めて其の家へ挨拶に出掛けた。

其處には正司の從祖母いとこばばに當るとか云ふ、六十餘りの、でつぷり肥つた丈夫さうなお婆さんがゐた。

「まあ能く訪ねて來てお呉れだつたね。お前さんが此方の學校へ來たと云ふことを聞いたもんだから、もう今日は來て呉れるか、明日は來て呉れるかと毎日心待ちに待つてゐたのだよ。——まあお上り、まあ昔のお祖父さんにそつくりな顔立だね。」

お婆さんは、自分の孫にでも會つたやうに、正司を歓迎して呉れた。

「まだお嫁さんはないのかね。——今に私が屹度いいのを世話して上げるよ。」

自分にも大分酒の行けるお婆さんは、離家の一室で正司と差向ひに盃を交しながら、こんな話までした。籬根の外にはもう菜の花がちらほらと咲いて、白い蝶々が縁先まで飛んで來たりした。

其れから正司は學校が済むと、殆ど毎日のやうに此のお婆さんの家へ遊びに行つた。

或日正司は例の如く其家を訪ねると、いつもはお婆さんが取次に出る代りに（彼はいつも母家へは行かずに直ぐ離家の方へ行く習慣になつてゐた。）十七八のまだ見たことのない娘が取次に出た。ぱつちりとした眼、ふつくらとした額おこげ、田舎には珍らしい容色であつた。お婆さんは其女を自分の姪だと云つて正司に紹介させた。さうしてお茶から、お茶菓子から、すべて其の娘に取持させた。

「美代ちゃん、何か正司さんに彈いて聞かせてお上げよ。」

やがてお定まりの酒が出ると、お婆さんは始終俯向きがちに坐つてゐる娘に命じた。

お美代は素直に座を立つて、次の部屋から琴を抱へて戻つて來た。さうして四季の曲といふのを彈いた。生田流の細かい合の曲が長く續いて、武骨な正司もしんみりとさせられた。彼は盃を手にしたまゝ、絶えず絃の上を軽く走る白い手に目を注いでゐた。

「まあ能くこんなに肥つたものだね。——美代ちゃん、ちよつと觸つて御覽。まあ此の力瘤の固いこと！」

酔ふとお婆さんは、正司の手を取つてぐつと腕を撫で上げながら、羞かしがるお美代に其れを

握らせたりした。

其日正司は餘り酒も飲まず、いつもよりは少し早く學校に戻つた。

翌日も行くとお美代は嬬むすとして彼を迎へた。さうして又前夜のとは別の曲物などを弾いて聞かして呉れた。

正司の足は益々お婆さんの離家に繁くなつた。其間に、野を一面の黄に彩つてゐた菜の花も、いつか闕れて、季節は既に麥の秋に入つてゐた。

六月十日は此村の祭禮で、學校も臨時休業であつた。正司は早朝からお婆さんの家に招待を受けてゐた。客は外にもまだ四五人あつた。お婆さんは、正司やお美代や、母家の多勢の孫達を伴れて、お宮に詣つた。さうして神輿の渡御や様々の見世物に半日を費して、日の暮近く内に戻つた。夜は母家で來客一同に酒盛があつた。正司は酔潰れて席に倒れた。

お婆さんは、お美代や女中に手傳はせて、正體もなく寢入つてゐる正司の大きな身體を離家に運んだ。さうして豫て其處に用意させておいた褥に彼を横へた。さうして酔醒の水とお美代とを彼の枕許に残しておいて、自分は又母家へ引きかへした。

三

其の翌晩も正司はお婆さんの離家に泊つた。さうして又其の翌晩も。——彼は學校へは只授業に顔を出すばかりで、宿直部屋に寝ることは殆ど無くなつた。夕方にさへなると、小使は意味ありけな變な笑ひ方をして、「今晚も亦お出掛けですか」と諷するやうになつた。

「長く此の學校に居るやうにおしよ。校長さんにも氣に入るやうに充分骨を折つてね。さうして此村で一軒、家をお持ち。お美代にもあれの家から出来るだけのことはさせるから、お前さんも兄さんから相當なものを分けて貰つてね、——さうして持寄新宅のやうなことをしたらいいぢやないかね。」

お婆さんは時々お美代に座を外させて、こんなことをしんみりと話すこともあつた。

正司の外泊が度重なるにつれて、彼とお美代との評判は、いつの間にか教員仲間の大問題になつてゐた。彼等は寄ると觸ると其の風評で持切つた。あの女なら僕も一度見たことはあるが、恐ろしく無愛想な女だと云ふのもあれば、いやあれは何處とやらの出戻りだと云ふのもある。校長を初め、誰も彼も、そんな話の出た最後には何れも「怪しからぬ」と云つて、苦い顔をし合つた。

其のくせ内心では、正司の艶福を羨まないものはなかつた。正司は獨り得々としてゐた。

「新米の癖に生意氣な奴だ！」

「しかも末席の雇ひでゐながら——」

「一つ、ぶちこわしをやつてやらうぢやないか。」

こんなひそ／＼話が交されることもあつた。

氣早の誰彼は、正司の訪問してゐる頃を見計らつて、わざと其家に押しかけたりした。

「まあ／＼能く入らしつて下さいました。どうぞ此後とも御心安くお願い致します。」

人を外らさないお婆さんは、厭な顔などは少しも見せず、斯う云つて彼等にも酒を出して、わざと派手に款待した。其の酒を目的に、彼等は益々足を繁くした。仕舞には校長まで押しかけて行くやうになつた。

無作法は田舎者の持前であつた。酔ふと彼等は勝手な熱を吹いてお美代にからかつたり、正司に厭がらせを云つたりした。

自分の花鳥を、散々野良犬に荒らされたやうな心地した正司は、憤々して一人で先へ歸つた。

其の後に酔ひしれた仲間、一齊に手を叩いて勝鬨の笑ひを擧げた。

こんなことが立續けに二三度も續いた。其の度に正司は腹を立て、仲間を嬉しがらせた。彼はお婆さんの餘りなお人好しが、張り曲けても足りないほど心に忌々しかつた。

やがて夏休で歸省する頃には、正司はもうお婆さんの家に對して大分厭氣がさしてゐた。彼は暇乞に出かけた時も、わざと上りもせず其處／＼に出てしまつた。

お美代は青い顔をして門の外まで見送つた。彼女は何か正司に訴へたいやうな様子であつた。けれども遂に一言も云ひ得なかつた。正司も強いて其れを聞かうともしなかつた。

部屋へ戻ると、お美代は顔に袖をあて、泣きじやくつた。お婆さんは暫く黙つて其れを見てゐたが、やがて女の背を撫でてやりながら云つた。——

「なに心配しなくつても善いよ。あの人はほんのちよつと拗ねてゐるだけなんだから。九月に戻つて來たら、又會つて委しく話をすれば善いんだからね。」

——若い者の中は、一緒にさへしてしまへば、もう其れでいいのさ。なんの／＼此のまゝで離れられるものかねえ。——

お婆さんは、長い間の経験で斯う心に考へてゐた。さうして其以上は別に考へもしなかつた。

六

内へ歸ると、思ひがけない養子の口が正司を待つてゐた。兄の忠男は、非常に乘氣になつてゐた。彼は弟の夏休みで歸るのを頻りに待つてゐたのであつた。

養子の口と云ふのは、此村から七八里を隔てた大きな都會の醫者の家であつた。其家は此の兄弟の家とは遠い縁續きになつてゐた。養母になるべき人は、忠男や正司には母系の方から再從姉弟同士に當るとか云ふことであつた。夫婦の中に、今年十九になる娘が一人あるばかりで、其れも母親の伯母に當る人の末子を養女にしたのだと云ふことだから、矢張り忠男や正司からは再從兄妹同士になる譯である。父親と云ふのは、極めて好人物の而も手腕家で、小兒科の醫師としては其の都會でも可なりに名前を知られてゐた。此の數年來大分資産を作り上げて、大きな邸宅まで新築したが、自分では醫者と云ふ職業を寧ろ呪つてゐて、こんな煩い厄介な家業は自分一代で全然廢めてしまふのだと常に云つてゐる。だから今搜してゐる養子にしても、醫學の心得の有無などは少しも條件に入つてゐないとのことであつた。

「何しろ此の前のは仲人口を信用し過ぎて失敗つたのだが、今度の話は湯本の叔父から口がかゝつて來たのだから、此のくらゐ確かなことはない！」と、忠男は特に湯本と云ふ叔父の名前に力を入れて云つた。其の叔父と云ふのは、此の兄弟の母親の兄に當る人で、二人は兩親に別れてから後、永らく此の叔父の家と一緒に預けられてゐたのであつた。

「どうだね、行くことに決心しては。——こんな善い話は又と容易にはあるまいぜ。」

正司の返事の抄々しくないのに、忠男はもどかしがつて斯う促した。それでも正司は、まあ考へさせて下さいと答へるのみであつた。

「事によつたら、好きな女でも出來たのぢやないか知らん。」忠男もちよいと小首を傾けた。

娘の寫真だと云ふのも來てゐた。眉の鮮かな、髪の毛の濃い女で、目元のぼつちりとした處が、何處やらお美代の面影に似てゐた。正司は其寫真だけ貰つておいた。

「大變に善い話だと云ふぢやありませんか。入らつしやることにお定めなすつたら如何です。」兄嫁も斯う云つて、正司に勧めて見るものがあつた。

「全く不思議だと思ひますよ、姉さん。」正司は懷中から娘の寫真を出して見せた。

「此の邊りが其れはそつくりなんです」と云つて、彼は薄ら笑ひをした。

兄嫁は遠廻しにほじくつて見た。さうして遂にお美代の話を白状させた。

「そんなにお氣に召したのがあるなら、何故早く兄さんに仰やらないんです。」兄嫁も笑ひながら云つた。

「いや、僕も場合によつたら、話して見ようと思つてゐたんです。處が歸ると直ぐ兄貴の方から、養子の口を先駈けられたものだから、云ひそびれてしまつたんです。」

「今からでも遅くはないから仰やいよ。」

「いや止ませう。今になつて云ふと、如何にも兄貴の方を斷る口實に作り出したやうだから。」

「そんなに云ひにくければ、私から云つて上げませうか。」

「いや止して下さい。僕は何も、其の女を妻にしようとはまで考へたことはまだ無いんですから。」

——其れに其の娘に附いてゐるお婆さんと云ふのが、随分と變り者なんですからね。」

彼は自分の楽しい安息所を學校の教員仲間に踏み荒らされた後の不愉快を思ひ出してゐた。

其れでも正司は、長い一月の夏休みの間、毎日ごろ／＼と晝寝などしながら、心私にお美代

からの音信を待焦れてゐた。けれども終に一回の手紙も來なかつた。彼は徒らに、訣別の時の涙ぐんだ女の面影に惱された。

七

夏休が済んで初めて學校のあつた日は、まだ残暑の強さが盛夏のそれにも劣らないほどであつた。其日はほんの始業式だけなので、校長の訓辭と、首席訓導の新學期に際しての注意があつて、生徒は十時頃に悉く歸つた。其の後に教員連中は、小使に酒と牛肉とを買ひにやつて、窓を開放しの宿直部屋で、久し振りに小さな酒宴を開いた。

晝の暑さを避ける爲めに、前夜夜通しで學校に戻つて來た正司は、疲勞と睡眠不足とに、酒が平素よりも早く廻つて、寧ろ苦しい位になつたので、やがて一人だけ食卓を離れて、部屋の一角の壁に倚りかゝつてゐると、

「おい小牧君、どうしたんだね。ひどく鬱ぎ込んでゐるぢやないか」と、ゆがたこ 茹韋魚のやうに赤くなつた一人が、食卓の向側から聲をかけた。

「そりや鬱ぎ込みもしようぜ。大事の女に背を向けられてはね。はゝゝゝゝ」と、これは又飲め

は飲むほど青くなる癖の一准訓導が相槌を打つた。

正司は何だかぎつくりとして、覺えず目附が屹となる。

「女といふと直ぐ目の色まで變へてしまふから堪らないよ」と又前の茹章魚が冷かした。

「あの眼付をしてゐて見損ふから可笑しいね。」

正司は頭が急にぐらくとして來た。

「君達の云ふことは何の事だか僕には少しも分らない。」と、わざと空呆けた。

「分らなければ説明してやらうか。——君のあの女はね、君が考へてゐるほど貞操な女ぢやないと云ふことさ」と、准訓導が又云つた。

「殊に校長があの老婆さんのお氣に入りでね——」と云つて茹章魚は急に氣が付いたやうに周圍を見廻した。けれども其時はもう校長は席に居なかつた。

「校長さへ行くと、娘に琴を弾かせたり、酒を持つて來させたり、あれではどんなお相手をさせて居るかも知れやしない、ねえ君」と今一人の同僚の肩を叩いた。

正司はもう嚇となつて其場に居堪まれないほどであつた。彼はやがて同僚の去るのを待兼ね

て、直ちにお婆さんの家に走つた。さうして急用が出來たから、直ぐお美代に會はせて呉れと申込んだ。

お婆さんは、久し振に訪ねて來た正司の容子の只ならぬのに不審を抱きながら、お美代は十日程前から實家の方へ戻つてゐて、まだ返つて居ない旨を答へた。

「さうでせう。僕には逆も會はされますまい」と、正司は息卷いた。

「實家へ戻つて居るものが、どうして校長の酒の相手なんか出来るんです。僕は夏休中に起つたことを、もうすつかり聞いて知つてゐますよ」と彼は更に喘ぎながら附加へた。

お婆さんは正司の醜しい血相に恐れを抱いた。さうして夏休の初め頃に、校長と教員の二三人が二度ばかり遊びに來たが、其れ以來誰も來たことがないと云ふ事實を委しく物語つた。

「お前さんは擔がれてゐるんだよ。——其れに私があゝして校長さんや教員さんにお愛想をするのも、みんなお前さんがあの學校に長く居られるやうにと願ふからのことではないかね。畢竟はお前さんとお美代の爲めぢやないか。其處を能く考へてお呉れでないと、私も埋まらないと云ふもんだよ——」

「餘計なお世話です」と、正司は皆まで聞いてゐなかつた。

「兎に角、僕はもうこれ限りでお宅へは伺ひませんから。」

相手の餘りな没分曉さに、お婆さんも負けてはゐなかつた。

「そんな無理なことを云つて、お前さんこそ外に好い女でも出来たんだらう。——宜しい。此の私がどうして、も其の女を喫ぎ出して見せて上げるから。」

「兎に角、僕はもうこれ限りで参りませんから」と云つて、正司は其のまゝ戶外へ出た。

八

其の夜學校へ歸ると、正司は腹立ちまぎれに直ぐさま兄の處へ手紙を書いた。さうして愈々例の處へ養子に行くことに決心したから、其の旨先方へも通知して萬事宜しく頼むと書いた。投函は明日の事と考へて、一旦床に入つたが、目が冴えてどうしても眠られない。頭の中が何かなしにむしゃくしゃで一杯になつてゐる。「さうだ、氣の變らない中に」と獨語を云つて、彼は又床からはね起きた。そして又浴衣を引つけて戶外へ出た。

學校の門を出る時、星明りにちらと人の姿を見たやうな氣がしたので、正司は振返ると誰も見

えなかつた。二三四行くと駄菓子屋の軒先に郵便箱が掛けてある。彼は先刻書いた兄への手紙を其れへ入れた。直ぐ引返す氣にならなかつたので、正司は又二三四先へ歩いた。川向ふの小料理屋にまだ灯火が付いてゐる。彼は立ちながら洋杯酒でも一杯引つかける積りで其處へ入つたが、入ると直ぐ顔馴染の主婦さんに掴まつて、無理に引上げられた。さうして貧い養染で徳利を一二本空けた後、漸く引返して床に就いた。

翌日學校が濟むと、彼は又夕方まで其處らを散歩した後、昨夜の小料理屋に入つて行つた。さうして薄汚い女を相手に一二時間酒を飲んで歸つて來たが、其の翌日も亦同じことを繰返さずには居られなかつた。善い心持に酔つてふら／＼歸つて來ると、學校の門の入り口でばつたりと彼に衝突つたものがある。見ると思ひがけないお婆さんである。お婆さんはいきなり正司の袖を掴まへて、「學校の先生ともあらう者が、毎晩あんな小料理屋へ入つて善いものか」と云つて詰責した。夜のことだから顔付は無論明瞭には見えなかつたが、其の聲は凄いほど鋭かつた。正司は思はぬ山の中で、丑の時詣りでも行會つたやうな全身の寒慄を覺えたので、何にも云はずに直ぐさまお婆さんの手を振り放して宿直部屋へ駈込んだ。暫くすると小使がやつて來て、先刻久保田さ

ん（お婆さんの家の姓）から使の者が来て、これを置いて行つたと云つて、鬨斗形に結んだ一枚の紙片を彼に渡した。解いて見ると、お美代が今朝實家から戻つたから、是非遊びに来て呉れと書いてあつた。

「其れほど俺を待つてゐるのなら、何故校長に見替へさせたり又俺の行動を監視したりなどするのだ。はゝあ、これは俺の缺點を充分に調べ出して、早く此の土地から追拂はうと云ふ腹だな。」正司は斯う考へながら床に就いた。彼は益々久保田へは行く氣になれなかつた。

其の翌日、正司は少し方角を變へて、學校が濟むと直ぐ小一里ほど隔てたS T町の方へ散歩を試みた。其の町で有名な椿の宮と云ふのに參拜して、其宮前の通りをぶら／＼やつて來ると、彼は自分の十間ほど先きに、又お婆さんの後姿をちらと認めた。厭な氣がしたので直ぐ横丁へ折れて、とある床屋に入つた。さうして其處で一人分を待合はして頭を刈らせた。外へ出るともう夕飯時に近かつたので、又四五間先の蕎麥屋へ入つて、其處で例のちびり／＼とやつてゐると、急に階子段を上つて來た一人の客が、正司の顔をぢろ／＼と見ながら隣りの部屋に入つた。そして彼と同じやうに、笹と酒とを女中に命じた。其男の顔が何處かで見たとあるやうな氣がした

ので、正司はちびり／＼やりながら考へると、此の六月の祭禮の日に、お婆さんの家で會つた客の中の一人であることが漸く思ひ出された。正司はこれもお婆さんの廻し者ではないかと氣が付くと、又氣味悪くなつて來た。其處で、わざと先方を面喰はせてやる積りで、急に勘定を済まして蕎麥屋を出た。

九

翌日は雨が降つたので、正司は終日本堂の横手の薄暗い宿直部屋に閉籠つて、小使と將棋など差してゐると、小使はびつしやりと王手飛車を喰はせながら、「近頃は一向久保田さんへはお出掛けになりませんね」と意味ありげに云つた。正司はこれもお婆さんのお先に使はれてゐるのかと考へると、急に厭な氣になつたので、其處／＼に勝負をつけて床に入つた。

けれども「お先に使はれてゐる」のは小使ばかりでないやうであつた。同僚もをり／＼變な笑顔をしながら「君、矢張り久保田へは日參かね」と尋ねる。或る日の如きは、校長までがわざわざ正司を廊下へ呼出して、「君、時には久保田へも遊びに行つて上げるがよからう。御隠居が大變心配して居られるから」と云つた。正司は自分の周圍の人間が、悉く自分を愚弄し且つ自分の

行爲を監視してゐるやうに思はれて、忌々しくもあり又氣味悪くもあつた。

氣味の悪いのはまだ之に止まらなかつた。彼が只一人宿直部屋で寝てゐると、時々本堂の方でみし／＼と云ふ音が聞える。やがてじわ／＼と人の忍びよる足音が廊下に響いて、宿直部屋の戸口の前まで来てびたりと留まる。此時彼が黙つてゐると、足音は何時までも留まつたまゝで、凝と中の容子を窺つてゐるけれども「えへん」と咳拂ひするか、若しくは「誰だ」と聲をかけるかすると、足音は又忍び音に本堂の方へ消えるのが常であつた。彼は幾たび學校を辭めて、兄の家へ歸らうとしたか知れない。けれども女を校長に横取りされて、逃げて歸つたとあつては如何にも意氣地がないやうにも思はれたので、矢張り我慢して毎日授業に出てゐた。

すると一月ばかり経つた或る日、それは土曜日の午過であつた。突然久保田のお婆さんから使の者が来て、一封の書狀を渡して行つた。其の中にはお婆さんの手蹟で、次のやうなことが書いてあつた。

「最早お前さまの決心は、巖のやうに固く、とても私達女風情の力にて動かすことの出来ないものと承知いたし候。實を申せば私も今日までは、若しやと思ふ念に欺かれ、毎日毎日泣き明

かし泣き暮らし居るお美代を勞はり慰さめながらも、御前さまの影のみ待ち焦がれ、或時は御前様の御朋輩にお願い申し、又或時は學校の校長様にもお頼り致し、どうかして御前さまの心の軟ぐやう、今日は明日はと毎日念じ過し居り候へども、其れも今は年寄りの愚かなる空頼みでありしこと愈々分明仕り候。最早此の上は致方もこれなく、お美代にも宿世の因果を云ひ含めて、諦めさせるより外なきことかと存じまゐらせ候。さりながら此のまゝ相分れ申し候ては、如何にもお互に喧嘩面にて分れたるやうにて、私も何とやら寢覺心地が悪く、此後の行く／＼も思ひ出す度に、定めし／＼心残りの事も數々あるべくと存ぜられ候。同じ別れるに致し候うても、今一度お目もじの上、双方の思ひ違ひや胸の蟠りをすつかりとお話し申上げ、お互に笑ひて快く打興じ、綺麗さつぱりとお別れ致し候らひなば、如何ばかり後の思ひ出も心地善かるべく、さ候へば同じ苦しき別れにしても、お美代もいさゝかは心落ちつき、又あきらめもつき易くはあるまじくやと存ぜられ候。就いては御前さまの御迷惑は重々お察し申候へども、何卒今日夕刻より私宅まで御足勞下さること相協ひ申すまじく候や。何卒／＼これを最後と御思召下され、まげて一夜の御都合を幾重にも神かけ念じまゐらせ候。何も取急ぎ、あら／＼かし

「双方の思ひ違ひや、胸の蟠りもすつかりお話し申上げ……今になつてどんな話があるんだらう？」正司はちつと其の手紙を見つめて、行かうか行くまいかと暫く迷つてゐるが、とう／＼行くことに決心した。

+

其夜は二人とも變な工合であつた。流石のお婆様もいつものやうに馴々しい態度は一向に見せず、いやに取濟ました顔をして、わざと丁寧な言葉を使つたりした。正司の方はなほのこと打解けられなかつた。彼は殆ど初対面の人と差向つてゐるやうな窮屈さを感じた。さうして二人とも成りたけ今度の創口へは觸らないやうに、まるでかけ離れた世間話をしてゐた。お美代は顔さへ見せなかつた。

其れでも例の通り酒の持出される頃には、お婆さんも段々平素の調子に返りかけてゐた。正司が「今晚は頂きませんから」と云つて、盃を手にしようともしないのを見ると、お婆さんは、

「まあ今晚はお別れの酒宴だから、快く一杯だけ受けて下さい」と云つて、二三杯立續けに正司

に強いた。さうして自分も一二杯を傾けた。

やがて二人の顔がほんのりと色づく頃になると、お婆さんはもう全く平素のお婆さんに戻つてゐた。

「本當にお前さんは憎らしいくらい強情な人だね。これで今晚、私の方から呼びに行かなかつたら、もう此のまゝ私の家へは寄りつかない積りでゐるんだもの」と云つて、一寸正司の頬を突つた。さうして機嫌のいい笑ひを漏らした。それが其の夜初めて聞かれた快い笑ひであつた。

正司はお婆さんの態度の急激な變化が全く意表外であつた。彼はすんでのことで、今の今まで此のお婆さんの心を疑つてゐた自分を悔いようと思つた。けれどもこんな策略を施して、自分を元の轍へ引戻さうとしてゐるのかと考へると、彼はお婆さんの所作が一層憎らしくなつて來た。

正司は益々固くならざるを得なかつた。

「勿論僕はもう今夜限り御伺ひしない積りです」と、きつぱりと云ひ放つた。

お婆さんは一寸厭な顔をした。けれども直ぐ又其の色を引込めた。

「まだそんな強情を張り通さうと思つてゐるんだもの。(暫く繼ぐべき言葉に迷つた後) お前さ

ん、それは本気で云つてるのかえ。」

「勿論本氣です」と、正司の答へは相變らずぶつきら棒であつた。

お婆さんは暫く悵然としてゐた。やがてしんみりと云ひ出した。――

「ねえ正司さん。私は酒の上でこんなことを云ふのぢやありませんよ。でもまあ能く考へて見て御覽なさい。私はこれまでお前さんの爲めにどのくらの骨を折つたと思ひますか。それはお前さんのやうな薄情な人に云はせると、私のしたことは皆な自分勝手のやうに見えるかも知れません。然しまあこれだけでも考へて見て下さい。私はお美代の父親や母親に納得させて、あの娘の身體を私の自由に貰ひ受けるだけでも、どのくらの人知れない苦勞をしたか知れやしないんだよ。それを今になつて別れてしまふなんて――お前さんも少しは前後を考へて呉れたら、そんな蟲のいいことは嘘にも云はれた義理ぢやないと思ふ。第一私はいとしても、それではお美代が可愛想とは思はないかえ？」

正司には「お前さんのやうな薄情な人」と云はれたのがぐつと癩に觸つてゐた。言葉も従つて荒かつた。

「だが、お美代さんには、僕のやうなものもう不必要なんぢやありませんか。」

お婆さんは呆れた顔をした。

「お前さんはまだあれを疑つてゐるんだね。それなら宜しい。私の方でもお前さんのことに就いては、大分探索したり聞込んだりしたことが澤山あるんだから。」

正司は、もう養子の話も何もかも、お婆さんには悉皆知れ渡つてゐるものと思つた。

「僕の方でもお美代さんについては、色々のことを聞込んだから、それで養子の話も取極めたんです。僕は夏休から此方へ戻る時には、まだ養子などに行く氣は少しもなかつたんです。」

「え、何です、養子の話だつて！」お婆さんは急に血相を變へて叫んだ。彼女の唇はぶる／＼と顫へて來た。「まあ、そんな話が出来たから、お前さんはお美代を捨てる氣になつたんでせう。そんな薄情なことをしておいて、それでお前さんは行末が立派に立つて行けると思つてゐるんですか。男は馬鹿だね！ そんな薄情な心でゐるなら、私の一念だけでも、お前さんの一生は黒闇にして見せるから！」

正司も何かこれに負けない惡態を吐いて、相手に打撃を與へてやらうと考へてゐるうちに、お婆

さんは大きな聲を出して、「お美代、お美代！」と隣りの部屋に叫んだ。

十一

程なく隔ての襖子が開いて、手巾を顔にあてたお美代の姿が座に現はれた。彼女は俯向いまま、叔母の蔭まで歩み寄つたが、やがて崩折れるやうに其處に身を投げると、忽ち畳に泣伏してしまふ。其の傷はしい様子を見ると、流石の正司も急に胸が塞がった。

むつくりとして女の肩の微かに顫へてゐるのが見られる。

「お美代、お前もお聞きだらう」と、お婆さんは娘を尻目にかけてながら嚴肅な口調で云つた。「正司さんは結構な御養子の口がお有りになつて、其方へ行くことにお定めになつたんだとさ。お前も散々玩弄にされたが、もう今夜限りお目にはかゝれないんだから、ようくお禮を申したがようござんせう！」

お美代は益々泣きじやくつた。ふつくらとした彼女の肩が、其の度にますます波を打つた。

「さあ早くお禮を申さないかえ」と云つて、お婆さんは又正司の方に向直つた。

「正司さん、お別れに何か差上げたいんですが、私からは何にも上げるものがありません。就て

はこれは誠にお粗末ですがね、今日までのお馴染甲斐にお美代から差上げたいさうですから、どうぞ此娘の形見だと思つて、養子にいらつしやる時も一緒に持つて行つてやつて下さいまし。」

斯う云ふかと思ふとお婆さんは、何處に隠し持つてゐたものか、磨澄ました一挺の剃刀を取出した。さうしてきらりと燈火に其れを閃かしたかを見ると、忽ちお美代の頭に載つかつてゐた房房とした高島田が宙を飛んで、正司の膝に衝突かつて、目の前の畳にころ／＼と轉がつた。同時に破れるやうな女の悲鳴が正司の耳を劈いた。

正司は頭がくらく／＼として覺えず飛上つた。彼はお美代の首が胴を離れて、自分の膝頭に喰付いたかと思つた。さうして其の切取られた首の根元からは、どく／＼と黒血の流れて出るのを見たかのやうに思はれた。

彼は、高慢ではあつたが極めて小膽であつた。鼻つばしこそ強いやうだが、根は甘やかされて育つた大家の坊ちやまに過ぎなかつた。彼はぞつと戦慄した。顔の色が眞青になつた。

「覺えておいで。私の一念だけでも、お前さんの一生は暗闇にして見せるから！」

逃げるやうに座を立つて、小走りに馳せ歸る正司の後から、お婆さんは鐵槩の黒々と光る齒を

むき出しながら、なほ毒吐いてゐるのが聞かれた。

其晩正司は身内がぞく／＼として眠られなかつた。身體中が熱でもあるやうな、又寒氣さむけでもするやうな、何とも名狀しがたい心持であつた。眠らうと焦れば焦るほど、精神はますます／＼冴え返つた。それでゐて全身は綿のやうに疲れてゐる。一寸寝返り打つにしても、節々がだるくて容易に曲けることが出来ない。頭から蒲團をかぶつて見たが矢張り駄目である。漸くのことどうとうとしかゝると、急に誰かゞ首でも絞めるやうに胸が苦しくなつて来る。起きようと思ふが中々に起きられない。やつとのことで眼だけ開くと、宿直部屋の窓が薄明るく見えてゐながら、其處に怒氣を含んだお婆さんの顔があり／＼と浮出てゐる。首のないお美代の姿も並んで立つてゐる。其の首の附根からは黒血がどく／＼と流れてゐる。お婆さんは其の血をせつせと拭いてやりながら、「薄情者！」と云つて正司を罵つてゐる。「お美代がこんなになつたのも、みんなお前さんのしたことぢやないか。私の一念だけで、お前さんの一生は暗闇にして見せる！」と云つて息巻いてゐる。正司は恐ろしさに聲を立てようとしたが、聲が出ない。目を閉ぢてもなほあり／＼幻影が見える。耳を抑へれば抑へるほど、ますます／＼其の悪口が聞えて来る。彼は一晚中を悶え明かした。

翌朝正司はどうしても頭が上らなかつた。小使が来て度々授業時間の近づいたことを知らせたが、彼は矢張り起きることが出来なかつた。さうして其の翌日も、又其の翌日も、正司は授業を休んで寝てばかりゐたが、四日目の朝、彼は突然飛び起きて、辭表を書いて、其のまゝ兄の家へ戻つて來た。

十二

歸つて見ると、自家では養子の話がぐん／＼進行してゐた。仲人には新宅の主人を頼むことになつて、其れが殆ど毎日のやうに、先方と此方との間を往復してゐた。「善は急げだ」と云ふので、先方からは話の纏まると同時に、直ぐ結納として、正司が式當日の晴着を送つて寄越した。さうして今年は双方共年廻りが悪いから、輿入は年が明けて節分が済んでから、吉日を選んで行ふと云ふ段取にまで事が遅んでゐた。忠男は正司の顔さへ見ると、「お前も其れまでには今一度湯本の叔父貴の家に行つて、生花や茶の湯を一通り教はつておく必要があらう」など云ひ云ひした。けれども肝腎の正司は、そんな話には一向氣も留めない様子で、毎日自分の居間にしてゐる

る六疊の中座敷で、蒲團を冠つてごろ／＼と寝てばかりゐた。

「此頃正司さんは、何處かお悪いんぢやないでせうか。なんだか元氣がなくなつて、寝てばかりいらつしやるぢやありませんか。」或る時兄嫁は見兼ねて夫に斯う私語ひそかごといた。

「あいつは子供の時分から寝坊だからな」と、忠男は氣にも留めてゐない。

「それに御養子の話だつて、貴方がそれほどお骨を折つていらつしやるのに、ちつとも身を入れてお聞きにならないぢやありませんか。」

「あいつはいつでも、あんな冷淡な氣性の奴さ」と、忠男は矢張り鼻の先きで笑つてゐる。

「でもね、此頃は始中終頭がしびれる／＼つて仰やつてゐるんですよ。」

「又酒でも飲過ぎて來たんだらう。それにあいつは子供の時、頭に大きな怪我をしよつたから、其れが身體の工合で痛むんだよ。あの頃も能く頭がしびれる／＼つて云つて居つたから。」

其話は斯うである。——彼がまだ七八歳の腕白盛りの頃であつた。ある秋の日、兄の忠男と一緒に屋敷裏の廣い空地に行つて、其處に立つてゐる高い柿の木に登つて、頬に赤い實を食つてゐた。すると正司はどうした機會か、枝を踏み外して、一丈あまりの高さから眞倒さまに地面に落ちた。

折悪しく其處に鉢があつたので、彼は其の刃先でしたゝか頭に傷を受けた。忠男が驚いて木から降りて見ると、傷口から／＼と血が吹き出てる。二人は家へ歸つて伯母さんに叱られるのが何よりも恐かつた。其處で忠男は泥を弟の傷口へ塗りつけて、血を止めようと言出した。腕白者の正司は一も二もなく其れに同意した。其處で忠男は柿の木の根元から溝に踞んで、汚ない眞黒な泥を掘ひ上げた。さうして其れを弟の頭にぬたくり付けた。此の亂暴な手療治は、ます／＼傷口の疼痛を高めて、正司はとう／＼大きな聲して泣き出した。伯母が飛んで來て、此の有様を見て非常に驚き、洗つても洗つても泥が落ち切らない。其れから正司は二月餘りも漢法醫の許に通つて、漸く傷口の癒着を見た。癒つてからも、彼は時々どうかすると、頭が痺れる、頭が痺れると云つて訴へてゐたさうである。

兄嫁は、これまでも一二度聞かされたことある同じ話を又持出されて、張合拔がして其のまゝ黙つてしまつた。けれども彼女の胸の奥には、夏休中に正司からちよいと仄めかされたことある娘の話がまだ氣が／＼りになつてゐた。

ある日、兄嫁は正司の顔色の好い時を考へて、其れとなく其後の様子を聞いて見た。すると正

司は急に顔の色を變へて、

「いや、あの婆さんは實に恐ろしい女ですよ。僕はすんでのことで取殺されるところでした。今でも見え隠れに僕に附纏つてゐて困ります。——僕はあの婆さんが恐ろしいので、あの話はまづぱりと断つてしまひました。」

斯う云つて、彼は物を捜すやうに四邊を見廻した。さうして二三度激しく頭を振つた後、又蒲團をかぶつて寝てしまつた。

十三

然し日の經つに従つて、正司も寝てばかりはゐなかつた。朝起きると元氣よく井戸端で手水を使つて、食事も例の如くに進んで、軽い冗談口を利いては下女を笑はせたり、お寺の和尚を呼んで來ては兄の忠男と三人で夜遅くまで碁を圍んだり、終日晴々した心持で暮すやうになつた。兄嫁も初めて愁眉を開いた。

「矢張り何でもなかつたんですね。」

「さうよ。彼奴は昔からあんな奴さ！」

けれども其後も正司の舉動には、折々變な處がないではなかつた。兄嫁と女中とが、何か臺所で食事の仕度の話をしてゐると、突然正司が書齋から飛んで出て來て、「そんなことはありませぬ。そんな馬鹿な話はお止しなさい」と云つて、恐い顔をして其のまま奥へ引込んでしまふこともあつた。門口へ誰か訪ねて來ると、あれは久保田からの使ではないかと、顔色を變へて下女に詰問してゐることもあつた。又衣裳倉と奥座敷の間に細い廂合があつたが、正司は其處に誰かと隠れてゐると云つて、二三度も立つて見に行くこともあつた。

ある晩兄嫁は、奥座敷からの戻りに一寸正司の部屋を覗いて見たら、正司は部屋の真中に床を取つて、自分も寢巻に着替へてもう寝るばかりの姿になつたまゝ、大きな腰刀で頬に部屋の四隅を切つてゐた。「まあ」と兄嫁が覺えず聲を出すと、「やあ、これは大變な處を見付かりましたね。これは僕の魔除です」と云つて、正司は聲高く笑つてゐた。

其頃から彼は又、日に幾度となく井戸端へ出て、顔を洗ふのが癖になつてゐた。「まあ、御養子にいらつしやるので若旦那さまの近頃艶飾しなさいますこと」と、女中達は其度に斯う云つて互に袖を引合つた。可笑しいのは正司が屢々鏡を叩土に落して壊すことである。「姉さま、又鏡

を落しましたから貸して下さい」と云つて、彼はいつも兄嫁の鏡を持出しては直に又壊してしまつた。「艶飾に夢中だから、手に持つてゐるものが分らないんですよ」と云つて、女中達は又蔭でくすくすと笑ひ合つた。

彼は此頃酒の健康に害あることを熱々悟つて、飲酒はふつつり止めてゐるが、其代り煙草は以前より一層激しく飲むやうになつた。其れが火鉢に凭れてすばくやつてゐるうちに、どうかすると銀煙管の吸口をぎゆうくと噛みしめてゐることがあつた。下女などが目付けて其れを咎めることがあると、「これは憎い婆さんの頭だから」と正司は眞面目に答へて、益々固く噛みしめた。終には家中の煙管で吸口の歪まないものは一本もないやうになつた。けれども正司は元來が道化者であつた。だから大抵の事は、「又若旦那の御冗談」として見脱がされてしまつた。

其のうち年は暮れて季は再び春となつた。正司が鞆入の日も段々近いて來た。彼は子供の時に厭々習つた茶の湯や生花の智識を再び新たにするため、忠男の勧めによつて暫く湯本の叔父の家に行くこととなつた。

處が一週間も経つか経たないに、彼は不意に戻つて來た。追つかけて叔父から忠男に宛てて來

た手紙で見ると、彼は叔父の家を内所で逃げて歸つたのであつた。——どうも正司の變つたのは驚いてしまつた。私の云ふことは何一つ聞かずに、口小言ばかり云つて、毎日家内と口論ばかりしてゐる。子供の時から彼奴は腕白者ではあつたが、今度のやうに持餘したことはない。さうしてまるきり正司には無關係な、他人の話をしてゐるのに、自分の悪評をしてゐると云つて突掛つて來る。世間で云ふ精神に異狀があるとは、あんなのを云ふのぢやないか知らん。能く用心して養生させるがよからう。……叔父の手紙にはこんなことが書いてあつた。

「叔父貴も叔父貴だ。云ふに事を缺いて、正司を狂人扱ひにするなんて、あんまり失敬な話しぢやないか。縁起でもない！」と、忠男は舌打して、其の手紙を寸断に引裂いてしまつた。

十四

鞆入は愈々四月一日に目出度く濟んだ。荷は簞笥、長持、釣臺を合せて、すべて七個荷。花婿の附添としては、忠男と、仲人役の新宅の主人、其他四五人。先方の來客は二十人餘りもあつた。養家は思つたよりも裕福な暮しをしてゐるやうであつた。花嫁は、披露の席上で琴を弾じたり舞を舞つたりした。其の夜は夜中過ぐるまで一同が騒いだ。

「中々大したものゝやうだね。あれでは此方達の娘も、少しは遊藝を仕込んでおかないと、何かの時には耻かしくて傍へも寄せられないね。」

新宅の主人は、其の翌朝歸る途上で、こんなことを忠男に話した。忠男も此時は既に二人の女の兒の父であつた。

「萬事が大變都合よく行つた。先方は兩親共非常に氣の練れた人達だから、あれなら正司にも辛抱が出来る。それに松井（忠男の姉婿）が近所で、何彼に世話を焼いて呉れるから、これほど都合のいいことはない。」忠男は妻にも斯う話して安心した。

處が十日と経たないうちに、其の松井から、至急相談したいことがあるから來て呉れと云ふ使が到着した。忠男は取るものも取敢へず出掛けた。相談と云ふのは、又々正司の精神異常に就いてであつた。

松井の話に據ると、正司は婿に行つた其の翌日、もう義兄の家に飛んで來て、僕はどうしてもあんな内に落着いてはゐられないと云つたさうである。——第一に養父と養母が二人寄ると、直ぐひそ／＼と自分の蔭口を利いてゐる。床屋が來ると、其の床屋と自分の批評を始める。其れが

ため、出入の床屋まで自分を輕蔑して、出しなに門口へ甚か^た啖を吐きかけた——と云ふ。

松井は「其れはお前の氣の僻見だ」と云つて其日は返した。

すると二三日経つて又やつて來た。そして云ふには、昨夜嫁と二人で夜店を素見に出たら、自分も勤めて居た或る小學校の校長が雑沓の中に加はつて、自分に見えつ隠れつして従いて來る。氣味が悪いので直ぐ内へ引返すと、自分の不在中に兩親が、押入の中の荷物を悉く引繰返して取調べた形跡が判然とあつた。思ふに兩親と校長とが申し合せて、自分の行爲を監視してゐるに相違ないと云つた。其日も松井は、兎角云ひ慰めて無事に返した。

すると其翌日、又顔色を變へて入つて來た。——今自分が一寸散歩に戸外へ出たら、一人の警官が窺に自分に尾行してゐるのに氣が付いた。其處で自分は路傍の便所に入つて彼をやり過ぎさうとすると、警官も同じく入つて來る。仕方がないので便所を飛出して横路に外れると、警官も亦横道へ曲つて來る。餘り氣味が悪いので此處に駈け込んだ。どうか暫く自分を隠まつて呉れと歎願する。是等の事實から綜合して見て、正司の精神には確かに異常を認めると云ふのであつた。

忠男は、突然急用があつて此の町へ出て來たやうな顔をして、直ちに弟の養家を訪ねた。さう

して正司の容子やら、両親の意中を其れとなく窺つた。弟の言葉にも舉動にも、何等の疑ふべき點がなかつた。又養父母も別段其れを氣にしてゐるらしい氣色が見えなかつた。忠男は安心して戻つて來た。

「なに、行つて見れば何のこともないのよ。松井の義兄も大分湯本の叔父の話にかぶれたと見えるわ。」忠男は斯う妻に話してへゝら笑ひした。

すると又一週間ほど経つて、今度は養家から使が來た。使の者は、忠男に宛てたる至急親展書を持つてゐた。其れに據ると、正司は前日の朝、床を出ると其のまま姿を隠した。何處へ行つたのかと家内中恠んでゐると、近所の湯屋から呼びに來た。養父が行つて見ると、正司は朝湯に行つてゐたのであるが、雨も降つてゐないのに蝙蝠傘を持出して、其れを湯槽の中でせつせと洗つてゐるのであつた。前後の事情から察すると、どうも少しく精神に異狀があるやうに思はれる。至急一度來て呉れと書いてあつた。

「今度は藤田(養家の姓)の親爺までが、又湯本の叔父や、松井の兄貴にかぶれ出したな。」斯う云つて、忠男はゆつたりと立上つた。

二 狂 女

一

看護婦部屋の時計が寒さに顫へながら一時を打つた。

ひとしきり止んでゐた狂躁患者の悲鳴の聲が、しん／＼と更け行く冬の夜の寂寞を破つて、遠くの隔離室からまた聞えて來る。

此處は××精神病院の女子部の一室。影薄暗い電燈の下に、顔が水腫れに青くふくれて、殆ど死人のやうに横はつてゐる一人の病女がある。その枕許で立つたり座つたり、或ひは病人の寝顔に垂れかゝる髪を撫でてやつたり、或ひは病人の裾に廻つて蒲團の端を叩いてやつたり、小まめにちよ／＼と看病してゐるのは、見たところ六十ばかりの丈の低い老女。髪は半白で薄く、顔は衰れて皺だらけになつてはゐるが、頗るきかぬ氣な表情をしてゐる。背には、糞ぎはぎした小

さな座蒲團のやうなものを掛けて、肩から腋の下へ紐でとちつけ、もひとつ念入りにそれを胸のところへ紐で結び付けてゐる。臀にも同様のものが巻きつけてある。そして手提袋のやうな包を大きいのやら、小さいのやら、三つも四つもごろ／＼と腰の周圍にぶら下けてゐるところは、誰が目にも少しく變だと云ふことが直ぐ認められる。此の老女は、病院へ來てから今年で足かけ十九年にもなる妄想患者である。

此の老女に、連日連夜殆んど片時はなれず介抱されてゐる病人は、年の頃三十歳ばかりで、これも入院以來足かけ七年になるが、此の頃尿毒症のために急に昏睡状態に陥つて、屢々痙攣發作を起すのである。

二

此の老女は、入院以來ある妄想を抱いて居つて、その云ふことには一向取留めがないから、委しいことは固より分らないのであるが、何かの場合にはよく亢奮した口調でこんなことを云ふ。

「私は此の病院の地主だ。私のいい着物はみんな質屋に預けてある。お金は伊豆のお役所から幾らでも送つて來ます。迎への者は毎日玄關へ詰めかけてゐる。此處は稻葉さんのお屋敷で、隣室

へ狂人が這入つてゐるんだ。私は何處へでも歸る家は八方にあります。九段下のお屋敷が私の立退場です。」

此の女は、いつでも自分のことを「稻葉さん、稻葉さん」とさん付けにして呼んでゐる。そして醫者の顔さへ見ると、昂然として退院を請求する。

「稻葉さんを出して下さい。早く稻葉さんを出して下さい。九段下にお屋敷がある。おもとも伴れて參る。あれを伴れて行くために今まで待つてゐた」と果ては獨りごとのやうに繰返す。おもとと云ふのは、先刻の水腫れの患者のことである。

「稻葉さんはいつ此處へ來ましたか。」廻診の醫者から時々こんな問を出されると、稻葉さんは例の通り昂然として、

「此處へ來てから丁度二萬日経つた。其の前にも何萬日経つたか知れやしない。」

「では、稻葉さんは今年で幾つになりますか。」

「年は三十九、此處へ來た時も三十九、それでいい。——年は此處へ來た時のまゝになつてゐるから、いつもおんなじさ。こんな處で年は取れないから。——此處へ來て十八年にもなると云ふ

けれども、私は三千年も居る思ひだ。此處の家は、私が此處へ来る前に何遍も焼かれた。」

醫者がポケットから聴診器を取り出して診察しにかゝると、稲葉さんはくろりと向うを向いてしまつて、

「大きに御苦勞！」と空嘯いてゐる。

「さあ稲葉さん、おとなしく御診察を受けるんですよ。」看護婦が斯う云つて手を出しかけると、
「いゝえ宜しい、宜しい」と、ますく病室の隅の方へいざりよつて、面壁正座の達磨をきめこみ、無上に首を振つてどうしても診に應じない。

醫者も持てあまして出て行くと、

「稲葉さんはいつでも診なくともいいよ。お顔色は此の通りいいんだから」と捨臺白^{すてたいはく}まで云ふ。

時には素直に診察を受けることもある。しかしそんな時でも他の患者のやうに、心配さうに醫者の顔を見守つたり、又はあとで自分の容態を醫者に尋ねたりするやうなことは決してない。のみならず、診察を受けてゐる間も、彼女はどうかすると絶えず口の中で、

「三百三十三萬歳……惜いかな大道の智識……」などと、禪坊主の云ひさうな、譯の分らぬことを呟いてゐるのである。

時には獨りで壁に向つて、高聲でしゃべくつてゐることもある。――

「さあ然う云つたらう。九月十五日は朝戸を明けて待つてゐると云つたらう。少しも待たせないで……さう云ふ別悉な間柄だからさ……」

「誰と何を話していらつしやるんですか。」看護婦がからかひ半分に斯う尋ねると、

「私は氣狂ひだから、打捨つといて下さい。」例の傲然とした調子で云ひ放つて、なほも獨語を止めないのである。

此の女には又被害妄想と云つて、他人からいろいろの危害を自分の身體に加へられてゐるやうな氣がするものと見えて、時々、

「私が靜かに寝てゐるところへ、頭にはシヤチを巻き付け、頸にはヤチを巻き付けるものがあつて困る。だから毎日、頸筋が重くて堪らない」など云つてこぼしてゐる。

「稲葉さん、シヤチとは一體何ですか。」これもからかひ半分に、他の患者から問はれることでもあると、彼女は一段と聲を尖らして、

「シャチとはシャチのことだ。シャチが分らないやうではどうするか」と云つて、一言の下に相手を凹ましてしまふ。さうかと思ふと、直ぐまた其の後から、

「私には三百年前から絶えず身體に熱がある。血のやんまひで熱の差引がひどい」など、續ける。ある時角膜炎をやつて、見ても痛さうになつてゐたのを、どうしても醫者に診て貰はうとはしない。

「此の眼は九十日ぐらゐすれば癒る。此の頃少しは快くなつた。おもとさんが手を出せば見えるやうになり、おもとさんが手を引けば見えないやうになる。三百圓で上等の眞珠またまを入れてあるから、さはつてはいけない」など、云つて、診察を拒むのである。

此の女はまた總ての人を決して普通には見ない。みんな何か自分に關係があるものゝやうに思つてゐるのである。醫者でも、看護婦でも、他の患者でも、みんな自分でいい加減な名前を付けて、或ひは自分の家來と云ひ、或ひは自分の親戚と云ひ、或ひは自分の仇敵と呼んでゐる。で、院長のことを「古賀衛門」と云ひ、副院長のことを「宇賀衛門」と云ひ、醫員の一人を「あれは下駄番が醫者に化けて來て居るんだ。あの男は元は連太郎と云つてゐた」など、云つてゐる。

入院の當時は、兎角廊下でばかり寝て看護婦に世話を焼かせたが、其の習慣は次第に癒つて、いつとはなく病室になじむやうになつた。其の代り、いつでも同じ病室の同じ隅のところ、坐る場所までがちやんと一定してゐた。彼女は其處で、折々布團を擴げては虱を取つたり、或ひは自分の所持品の點檢をしたりした。彼女は自分の身の周圍のものを、いつでも大小幾つかの風呂敷包や袋に束ねて、目方にすれば何貫目かにもならうと云ふものを、小さいものは腰にぶら下げ、大きいものは背に負つたり、手に抱へたりして、一寸廊下に出るにも、便所に入るにも、片時と云へども身をはなしたことがない。これは何でも、他人から盜まれるのを氣遣つての上のことである。

此の女は、最初入院してから十一二年目ぐらゐまでは、ついぞ運動と云ふものをしたことがない。いつも病室の中か、たかゞ廊下へ出るくらゐなもので、其れより外へは一步も出たことがない。看護婦が強いて散歩でもさせようとすると、すぐ癩癩を起してぶり／＼と怒つて、今にも打擲しさうな振を見せたり、時には足蹴にする眞似までしたりする。總じて言語も動作も共に粗暴で、且つ尊大で、稍もすると罵詈惡口を浴せかけるのが常であつた。それがおもとさんが入院

して来て以来、不思議にもいつとはなしに次第に穏やかになつて来た。

三

おもとさんと云ふ若い女は、入院以来今年で足かけ七年、いつも同じだらしない姿恰好をしてゐる。髪は蓬蓬と振り亂し、着物の前ははだけていつも肌がまる見え、帯は解けかゝつて腰のあたりまで擦れさがり、一日と云へども此の姿容を改めたことがない。或時はわけもなく廊下をあちこちと徘徊し、或時は額に手をあてゝ病室の隅に一日跼まり、また或時は終日窓際に立ちつゝけて、それがために足が水腫れになつたこともある。特に此の女の珍らしい癖としては、他の患者の捨てた鼻紙でも糸屑でも、何でも構はず手當り次第に拾ひ上げては、懐の中へ詰め込んでおくことである。それがため彼女の懐はいつも膨れて、丁度臨月のやうな恰好をしてゐる。時には夜中に起き出して、他の患者の枕さがしをすることもある。時には又食事の後の残り物や、肴の骨までも掻浚つて、一寸周囲の人が油断をしてゐると、直ぐ懐の中へねぢ込むので、其等が懐の中で腐敗して、その不潔な事つたら云ひやうがない。で、入浴の時など看護婦が、そつと其の不潔物を取り上げて、女の知らぬ間に打捨てゝしまふと、おもとさんは全く子供のやうに大聲を上げて、おい〜と泣き叫んで、

「あゝなさけない〜。折角十日も二十日もかゝつて拾ひ溜めたものを、——金の十圓や廿圓では買戻されないものを、あゝなさけない、なさけない」と云つて、涙と鼻水を一緒にして、顔一杯に塗りたくつて、殆ど號泣して不平を鳴らすのである。

彼女の話には少しも取留めがない。また他人の云ふことや問ふことにはてんで耳を貸したことがない。只自分一人で自分の勝手なことをぶつ〜と呟いてゐるのである。けれども時には、

「おもとさんはどうして此處へ来たか」と云ふ醫者や他の患者の問に對して、

「臍貧血で此處へ来た。二十四の時、九月二十七日に来た。今は二十六七になる」など稀には答へることもある。時にはまた、

「私は何にも知りませんよ。角の交番へでも行つて聞いて来て下さい」など、皮肉なことを云ふ時もあるから、これで見ると存外に物が分つてゐるらしい。

おもとさんの話し振は、いつも下手な役者のわざとらしい假聲こゝろのやうな、また子供の甘つたれた口調のやうな、一種の單調な節をつけて、さも哀れげな聲できれ〜に訴へるのである。——

「どうか歸してお呉んなさい……ひと様を離れてうちへ歸りたい。……公園の土を踏んで見たいな。」
「わたし戸外に行きたいわ。」
「わたしだつて、辛いですよ。」
「あゝあゝ口惜しい口惜しい。草葉の蔭にでも行きたうござんす」など、氣味の悪い薄笑ひを顔に湛へて、こんなことを繰返しく云ふのである。時をりは譯もなく馬鹿笑ひをしたり、また出し抜けに泣いたりすることもある。診察の時には、いつも稻葉さんに強いられて、

「あゝあゝ情なやゝ。ほんに稻葉の婆あには懲々だ」と、號泣しながら脈を取らせたり胸を開けたりする。或時には又、廊下、室内、所嫌はず大小便を垂れ流して、平氣で済ましてゐることもある。こんな工合で、入院以來七年間、随分と看護婦の手に餘つた、厄介な患者であつたのである。

四

おもとさんの入院後稻葉さんは、いつとはなしにおもとさんを我が子だと云ひ出して、おもとさんと親しげに呼びかけ、それまでは決して看護婦の云ふことも聞かず、運動などにも出たことのなかつた者が、おもとさんの運動に出る時には、自分も一緒に室外へ出るやうになり、しよつ

ちう我が子の傍に伴いて、何くれとなく世話を焼いてやるやうになつた。或時は自分で島田髷を作つて髪を結つてやり、その外朝夕の起臥から、食事から、使用のことまで、すべて自分の手一つで看護の任に當つた。おもとさんが強情で云ふことを聞かぬ時は、まるで子供でもあやすやうにして、叱つて見たり、なだめて見たり。時には、

「今に薩摩へお供をするから、大人しくしなければいけないよ」など云つて、着物の前を掻合せてやつたりする。

ところがおもとさんの方では、此の稻葉さんの親切に對していつも悪口雑言を逞しうし、「稻葉の婆あ」だの、「おせつかい婆あ」だのと毒づくのであるが、齋癪持の稻葉さんは、ついぞそれに對して怒つたことがない。

「外の悪い奴がいろゝのをおもとに智慧付けて、云ふことを聞かぬやうにするから仕方がない。しかし今によくならだらう。」など云つて、矢張りおせつかいを止めないのである。

おもとさんはいつちも自分では便所へ行かず、屢々床の中へ垂れ流しにするのを、稻葉さんは、「此の子はおしつこに行かないから誠に困る」とぶつゝ云ひながら、毎晩幾度となく便所へ伴

れて行くのを常としてゐる。それでもおもとさんがなほ時に廊下に便を漏らすことがあると、

「みんなが落すく」と云ふから、なほおとすやうになる。誰れも怒つてはいけない」など云つて、却つて看護婦や外の患者にあたり散らし、時にはこれを豫防するためだと云つて、おもとさんの厭がるのを無理に引捕へ、例の「あゝ情なやく」と大業に泣き叫ぶのを、指で大便をほじくり出さうとすることさへある。

いつもおもとさんの食事が済むと、稲葉さんは病室の窓から外に向つて、有りつたけの大きな聲を出して、「飯三杯！ 香のもの七つ！」など、恰も何人かに報告するやうに云ふ。どうしてそんなことをするのかと問はれると、

「看護婦の方でも附けて置くけれど、わたしの方でも別に書いておく。病人のことだから一々附けて置くん」など、尊大に云つてゐる。また衣類なども、自分で小さな切片を集めて、綿入の襦袢など拵へてやり、たとへ自分は着ずにも、おもとさんには屹度暖かに着せてゐる。

稲葉さんは又おもとさんの病氣のことも、皆他から危害を受けてゐるためだと解釋してゐる。それで水氣が起れば、「これは當り前だ。子供の時に魔がさしたからだ」と云ひ、齶齒で澤山齒の

缺けてゐるのを見ては、「これは悪い奴に齒を打たれたからだ」と云ひ、また様々の不潔物を集めて蓄へる癖を、「これは皆なが色々のものを持たせるからだ」と云ひ、また結膜炎を起したのを見ては、「これはロツポンを掛けられたり、まじなひをされたからだ」と云つて辯解してゐる。

おもとさんの家族が面會に來ると、稲葉さんはいつても、「あれは皆な元は私の家の奉公人だった」と云ふ。そして其の人達に向つて、

「おもとは今は氣狂ひにしてあるけれど眞實の氣狂ひぢやない。立派な稲葉の娘です。御息女の上の御息女だ。おもとはは婿もある。醫者で役人だ。總領だから嫁にはやりません」など云つて傲然とする。

かくの如くにして稲葉さんは、此の六七年の間、眞からの母親の愛情を以て、一日もおろそかにすることなく、おもとさんを世話して來たのである。

五

おもとさんが重症になつてから死に至るまで二週間あまり、時々覺醒して僅に口の利けることもあつたが、多くは昏睡状態で、屢々痙攣發作を起した。

「今度はおもとも大分あぶないから、若しもおもとが死んだら私も一緒に死んで行くんだ」と云つて、さすがに元氣のいい稲葉さんもしよけこんでゐた。稀におもとさんの容體が少しでもいいと、病人の足の方からそつと身體をさし入れて、同じ床の中でうとくとまどろむこともあつたが、其他は殆んど居眠りさへせず、全く晝夜詰切りで看病してゐた。痙攣發作の起ることがあると、大慌てに慌て、身體を撫でさすり、「おもとよ、しつかりするんだよ」など、力をつける。おしめなどは、いつでも自分で綺麗に洗濯して乾かしておいて、時々病人の腰のところへ手を入れて見て、少しでも濕つほく感じた時には、すぐ取り替へてやる。一寸でも病人が目を醒ますと、必ず牛乳か藥劑かを少しづつ與へ、「今日は少しは飲んだ」とか、或ひは「まるきり飲まない」とか、一々看護婦部屋まで註進に來る。

醫者が診察に廻つて來ると、稲葉さんは惡丁寧に頭を下けて、

「お役目御苦勞さま。あなたはおもとの元の婿ではないでせうね」など、自問自答する。時々看護婦が稲葉さんの疲勞を慮つて、

「あなたもくたびれたでせう。少しはお休みなさい。私が代りに看護しますから」といたはると、

「あの看護婦になつてゐる山田といふ女があるでせう。あれがおもとに呼吸を吹きかけたからこんなことになつた。——私が世話をするから宜しい」と云つて、連日連夜殆んど目もはなさないで介抱した。

しかし此の哀れな母親の誠心からの看病にも拘らず、宵からの粉雪で病院の庭の面の眞白になつたその夜明け方頃、終に昏睡状態のおもとさんは、別に苦しげな様子もなく、其のまゝ呼吸を引取つたのである。看護婦たちは豫てから、若しもの時にはどんなに稲葉さんが悲しむことだらうと、非常に取越苦勞をしてゐたのであるが、當の本人は存外平然たるもので、たと會ふ人毎に、「おもとは死にました」と云つたくらゐであつた。そして其夜は、おもとさんの家族の人々と共に、死んだ「我が子」の枕頭で香を焚いて通夜をした。翌日愈々身寄りの者の引取りで納棺の時には、稲葉さんは一時巧みに他の病室へ伴れて行かれた。

「あなたのお寺は？」と突然醫員の一人は問うた。

「私のお寺は極樂寺だ」と、稲葉さんは例の尊大な身振りで答へた。

「では、あなたは表門の方から出るんですよ」と云つて、反對の出口の方へ誘つておいて、其の

間におもとさんの死體を引取らせた。

稻葉さんは、いつまで待つてゐても出口の扉が開かれないので、仕方なしにすごくと又元の病室に戻つて来た。それから、これまで自分で襦袢など縫ぎ合せて拵らへておいた褌袴や腰巻などを入れた大風呂敷包を抱へて、

「これをおもとの棺の中へ入れてやる筈であつたが」など、獨り言を云つてゐた。

二三日の後には、稻葉さんは、もういつもと變らず、けろりとして、再び同じ病室の同じ一隅を占領しつゝ、自分の所持品の點檢をしてゐた。人がおもとさんのことを聞くと、

「あれはもう九段の下のお屋敷へ歸りました」と云つて、更にその身分のことや他の悪人のことを、取りとめもなくべら／＼と饒舌るのである。

うたたねの後

宏一は何故だか此の二三日、無暗に頭が重くて氣がむしやくしやして仕様がな。見るもの聞くものに腹が立つ。わけでも細君の所作が一々氣に喰はない。第一、顔を見るのからしてが厭で厭で堪へられぬ。其の顔は、宏一の眼から見た時には、何處の隅をどうほじくつても、微塵も婦人らしい愛嬌や、人間らしい生氣を見出すことの出来ない顔であつた。まるで屋根の上の鬼瓦も同然である。それで彼は成るだけ細君と顔を合せるのを避けるために、毎日二階の書齋ばかりに閉籠つてゐた。

尤も斯うした心持は、殆ど宏一の常態と云ふに近かつた。まだ學生の時代から、絶えず胃弱に悩まされてゐる彼は、一年のうち一週間と愉快な日の連続したのを數へ得た例しが無い。いや其れどころか、たつた一日の中でさへも、極めて瑣細な出來事から、彼の氣分は直ぐ暗い方へと移

つて行つた。或る時は朝起きて湯殿へ顔を洗ひに行く際、縁側で飯粒を一つ踏付けたと云つて、終日細君に物を云はないことがあつた。或時は又食事に階下へ下りて来て、鐵瓶の湯がくらくくと煮立つて溢れてゐるのを見ると急に腹が立つて、散々細君を罵つた後、箸には手もつけずにぶいと出て行つたこともあつた。又或時は珍らしく家内中を淺草へ伴れて行つてやると云ひ出して、細君にも下女にも大騒ぎで支度をさせておきながら、門を出る矢先に空風が砂煙を卷いて過ぎ去るのを見ると忽ち氣が變つて、「お前達だけで行つて来い。俺は止めにするから」と云つて、驚いてゐる細君と下女を後に、洋服のまゝすたくと二階へ上つてしまつたこともあつた。こんな時に一番悲惨なのは細君で、「何處か氣分でもお悪いのですか」と、尋ねに行けば行つたとて、「お前達の知つた事ぢやない!」とか、「餘計なことを云ひに来るな、煩い!」とか云つて怒鳴られる。又構はずに黙つて打捨つておけば打捨つておいたとて、「もう何時だと思つてゐる。俺の二階に居るのが分らないか!」と、呼びつけられて頭から嚙付かれる。下女などは、主人の顔さへ見るとどぎまぎして、いつでも固く立縮んでしまふ。そしては物事を仕損じて、益々叱られるやうな種を拵へる。

今日も彼は朝のうちに、ふとしたことから氣分を悪くして、書齋に引取つたまゝ一時になつても二時になつても下りて来ない。散々細君に氣を揉ませた揚句、やつと三時頃に晝飯を食つた。其れからつい今の先まで長椅子の上で假寝をしてゐたが、眼が覺めて顔を洗つて来ると、自分にも大分氣分が立直つたやうに思へたので、此の勢ひでと、彼は再びやりかけた仕事の机に返つた。彼は此間から、自分の専門の或る經濟學の原書の翻譯をやつてゐるのであつたが、今日は午前のうちは只机に向つてゐたと云ふだけで、仕事は何ほど出来てゐなかつたのである。ところへ細君が紅茶を持つて來た。それが楮子段を上る際に躓きでもしたものと見えて、盆の上の小汚なくこぼれてゐた。それを見ると宏一の神經は又尖つて來た。「おい其の膝を見い!糸屑が一杯くつゝいてゐるぢやないか!」

細君は其れを摘みながら出て行かうとする。

「それくゝ足許へ一つ落ちた。拾つて行かなければ困るぢやないか!」

細君は落ちたのを拾ひながら黙つて下りて行く。

「折角氣乗りのしかゝつた處を、又厭な奴が來やがつて挫いぢまやがつた!」

宏一は細君の後から憎々しげに獨語を云つて、又落膽おちかぶしたやうに長椅子の上に倒れた。

北の窓から向うの高臺にS伯爵の邸内の一部が見える。温室の屋根硝子が初夏の夕日にきらきらと輝いてゐる。其の屋根の上に高く突出してゐる大きな給水用の風車の空に廻る音が、かたこと、かたことと此處までも聞えて来る。

宏一は長椅子の上で眼をつぶりながら、稍久しい間ほんやりと其の風車の音を聞いてゐた。やがて彼は、其の車が二廻りか三廻りする毎に、丁度車の輪が齒止めか何かに衝突するやうにぎつとこだわりの出来るのに氣が付いた。耳を澄まして聞いてみると、其のこだわりが益々明瞭に聞えて来る。其れに注意が引付けられるに従つて、彼の頭の中の癩癩が、硝子の息曇りの刺がれる如く次第に治まつて来る。と急に又「斯う愚圖愚圖してはゐられないんだ」と云ふ、仕事に對する焦躁の念がむらむらと頭を上げて來た。彼は長椅子の上から手を伸ばして、机の上の原書を取つた。さうしてこれから又翻譯に取掛るべき部分の下見を始めた。

物の二三十行も讀んだと思ふ頃、忽ち裏の二階家できい〜といふヴィオリンの音が鳴り始めた。其が聞えると、宏一は又書物を机の上に抛り出した。さうして激しい舌打をしながら、長椅子の上へ起直つた。

「ちえ！ 又例のを始めやがつたな、畜生！」口汚い罵詈が覺えず彼の唇頭を衝いて出る。

宏一は決して生來の音楽嫌ひと云ふ方ではなかつた。のみならず、若し時間と機會が許すならば、自分にも何か樂器の一つぐらゐは弄んで見たい位に平素から考へてゐる男であつた。けれども隣家のヴィオリンと來ては、我慢にも聞いてゐられたものではなかつた。其れが又僅に三尺ほどの露路一つを隔て、直ぐ二階から二階へ傳はつて來るのだから、なほのこと堪つたものではない。彈手はある私立大學の學生だと云ふことを下女から聞いた時、宏一は禮儀を辨へないにも程があると大いに腹を立て、嘗て激烈なる抗議を申込んだことがあつた。其の手紙があまりに猛烈を極めてゐたために、相手は却つて反抗的になつたものか、其以來先方ではわざ／＼宏一の勉強時間を考へてヴィオリンを弾き出すやうになつた。——少くとも宏一の苛々か／＼した頭には、さうとしか考へられなかつたのである。

彼は轉がるやうに長椅子から下りて、蒸暑いものにも拘らず、窓と云ふ窓の硝子戸を悉く閉ぢ

た。書齋は西洋室擬まがひになつてゐるので、斯うすればヴァイオリンの音も大分遠ざけることが出来る。さうして彼は再び机の前に戻つた。すると彼の窓硝子の落し方が餘りに手荒かつたためか、今まで下座敷の吊網ツツで熟睡してゐた赤坊が、急に眼を覺まして泣き立てる。細君の其れをあやす聲も頻りに聞えて来る。

其れでも宏一は、最初のうちは凝と堪へて筆を執つてゐたが、赤坊が容易に泣止む氣色がないので、遂に我慢が仕切れなくなつた。彼は座つたまゝ片足を突立てゝ、いつも斯う云ふ時にする非常手段の警告を細君に與へた。——即ち彼は其の突立てた足の踵を以て、二三度激しく床を蹴付けた。さうして暫く間をおいて、又前よりも一層荒々しく床を蹴付けたのである。

けれども赤坊はなほ少しも泣止む氣色がなかつた。宏一はもう坐つてゐることが出来なかつた。彼はいきなり階子段を駈下りて下座敷に突進した。

「おい、何とかしてやらないかい！ 馬鹿！ 煩くて仕事も何も出来ないぢやないか。」頭から細君を呀鳴りつけた。

「だつてどうにも仕方がないんですもの。」子供と云ふものを初めて持つて見たまだ年若い細君

は、意氣地なく赤坊を抱へたまゝ、自分も半分泣聲になつてゐた。

「黙つて坐り込んでゐて、それで赤坊が泣止むと思つてゐるのかい、馬鹿！ 立つて唄でも歌つてやれ！」

細君は澁々立上つて、鼻聲で赤坊をあやし初めたが、父親の大きな聲に脅かされた赤坊は益々泣頻るばかりであつた。

「どうかしたのぢやないか、えゝ。何處か痛めでもしてゐるのぢやないか。」

つか／＼と細君の傍へ寄つて見ながら、一層唸しい聲になつて、

「それ見ろ、馬鹿！ 赤坊の腕がお前の袖口の中へ入つて、こんなに振ぢくれてゐるぢやないか。

子供の抱き方一つ知らない！ 俺に貸せ！ お前のやうな意氣地なしも能くあつたもんだ！」

斯う云つて宏一は赤坊を細君の手から奪ひ取つた。

宏一は平素から子供は嫌ひだと云つてゐる。殊に赤坊と來ては、どうしても可愛がりやうのない、厄介な代物しちやだと云つてゐる。そんなに厄介な、厭な物ならば、泣かうが喚かうが一切構ひつ

けないことにおけばよさうなものを、彼は赤坊が泣くといつでも必ず手を出しに行く。何かに苛々し易い彼の神経は、黙つてその泣聲を聞いてゐるに堪へられないのである。さうして何事にも女のやうに微細なところまで能く氣の付く彼は、又これをあやすことが存外に旨い。火の付いた如くに泣いてゐる赤坊でも、宏一が抱いて暫く揺つてゐると、うそのやうに泣止んでしまふことがある。こんなことから考へると、彼が赤坊を嫌ひだと思つてゐるのは、矢張り自分で自分を欺いてゐるので、實は世間一般の父親と同じく、極めて子煩悩な性質に生れて來てゐるのに相違ない。

彼は大きな兩の腕に、生れてまだ七月ほどにしかならない赤坊を悠然と乗せて、靜に揺りながら縁側をあちこちと歩いた。さうして子供の時に母親の口から聞憶えてゐる「柴の折戸」を小さな聲で唄つてやつた。

不思議にも赤坊はだん／＼と泣止んで來た。そしてすや／＼と眠りに入りかけた。

宏一は又座敷に戻つて來た。

「これ見よ！ 揺ぶつて歩いてさへやれば、此の通り寢入つてしまふぢやないか。お前は何をするにも無器用でいけない！」

ほんやり其處に佇立つてゐる細君を見ると、宏一は斯う云つて怒鳴りつけた。すると折角眠りかけた赤坊が、其の聲に又元の如く泣き始める。

「あゝよし／＼、よし／＼……」

彼はたつた今細君に對したとは打つて變つた優しい聲になつて、又赤坊をあやししながら、一段一段、靜に階子段を二階へ上つて行つた。

柴の折戸の——賤が家に——

おきなと老女が——住まひけり——

赤坊は又すや／＼と眠りかける。

書齋から中仕切の扉を開けて次の居間に入ると、其處に先程下女が物干臺から取入れておいた蒲團が擴けたまゝになつてゐる。宏一は其の傍に膝をにぢらせて、揺ぶりながら赤坊を下さうとすると、まだ明るいのもう蚊が二三疋、乳臭い子供の顔に飛んで來る。

彼はふつ／＼と呼吸で蚊を追ひやりながら、そつと赤坊を蒲團に下した。

と忽ち物に襲はれたやうに、又赤坊がぎやあ〜と聲を張り上げる。

「有難うございました。もう私が寝させますから。」

いつの間にか細君が目には涙を一杯溜めながら、宏一の後立っている。

彼は細君には後目を呉れただけで返事もせず、又赤坊を揺ぶつて部屋の中を歩き始めた。けれども赤坊は中々泣き止まぬ。

「馬鹿！　ほんやりと佇立つてゐる奴があるか！」

彼は又其の苛々する塊を細君の頭上に吐きかけた。

「氣を利かせて、とつと蚊帳でも釣つて行け！」

細君の頬には涙が流れてゐた。彼女は其の涙を拭きもせず、押入から八六の蚊帳を引き出した。

「もつと高く釣らなければ、俺の頭がつかへるぢやないか、馬鹿！　子供を寝させることも出来ずに、泣いてゐる意氣地なしが何處にある！」

宏一はなほ罵詈の言葉を止めなかつた。

やがて蚊帳が釣れると、宏一は其の中に入つて細君を下へ追ひやつた。さうして又例の歌をうたひながら、徐に赤坊を揺ぶつた、

おきなは山に——薪取り——

おうなは川に——衣洗ひ——

その日くくの——生計も——

いと淺ましき——淺間山——

宏一は窮屈な蚊帳の中を幾度となく右に行き又左に返つた。夏の長い夕日はまだ其の餘熱を屋根瓦から部屋の中まで照返して、蚊帳の中の蒸暑さは一通りでなかつた。汗の身體に浴衣の裾やら袖口がべた〜と粘着く。宏一は肩が痛んで兩腕が痺れてしまふまで我慢してゐると、赤坊はやつとこのことで再び泣止んで来る。彼はなほも用心を取つて、もう大丈夫と思はれるまで寝入らせた後、靜に蒲團の上に下した。さうして項に廻した自分の片手をそつと抜かうとすると、忽ち又赤坊は物に脅かされたやうに泣き叫ぶ。

宏一はとう〜持ちあぐねて、赤坊を其處に打捨つたまま蚊帳を飛び出した。さうして階子段

を下りようとする、其處へ又青い顔の細君が心配さうな目をして上つて来る。

「打捨つておけ、打捨つておけ！」と、彼は忌々しさに細君を叱した。

「暫く打捨つておけば、最後には泣草臥れて眠つてしまふわい！」

抑へつけるやうにして細君と一緒に階下へ下りながら、

「病氣だ！ 確かに何處か悪いんだ！ お前達が又屹度どうかしたに相違ない！」

その言分があまりに憎々しいので、細君も黙つてはゐられなかつた。

「いえ、そんなことはございません。先刻まで機嫌よくしてゐたんですから——」と、無愛想な口調で辯解する。

「馬鹿を云へ！ 先刻まで機嫌よくしてゐたものなら、急にあんなに泣く譯があるか！」宏一は細君の言葉を引手繰つて、更に一段聲を高めた。

「高を呼べ！ 屹度戸外でどうかしたに違ひない！」

云ひながら、宏一はつか／＼と臺所へ歩いて行つた。

「高！ お前屹度戸外で坊ちやんの頭を打たせるかどうかしたんだらう。えー！」

下女はもう固く立縮んだまゝ口も利き得ない。宏一はなほ頻りに下女と細君に對して毒づいたが、そんなことをする中にも、咽喉を枯らしてぎやあく／＼泣きしきる二階の赤坊の泣聲が、灸り付くやうに聞えて来る。彼は又それが氣になつて再び二階へ上つて行つた。

今一度心を落着けて、赤坊を抱き上げて、又歌をうたつてぐる／＼と蚊帳の中を揺ぶつて歩いたが、泣きこぢらかされた赤坊は、小さな口を一杯に擴けて、繪具でも塗りたくつたやうな眞紅な顔をして、ふんぞり返つて泣足搔くので、宏一は殆んど手の付けやうがなかつた。

彼は又急にかつとなつて、赤坊を其處に見捨てたまゝ階子段を駈下りた。

「屹度お前達がどうかしたに相違ない。高を呼べ！ 高を！」

彼は殆んど亂心した人のやうに怒鳴り續けた。

「だから私が寝させますと云つてゐるぢやありませんか。——何もそんなに、大きな聲をなさないでもいいぢやありませんか。外聞の悪い——」

もう勘忍がし切れないと云つた風に、覺えず荒々しい口答へをしながら、二階へ上つて行く細君を見ると、宏一の憤怒は忽ち絶頂に達した。

「何だと、其の口の利きやうは！ 今一度云つて見よ、生意氣な！」

彼はいきなり細君の後方からその首筋を引摺んで、階子段を二三段引擦り下した。さうして向脛を擦剝いて其處に泣伏してゐる細君には見向きもせず、又とん／＼と階子段を駈上つた。

蚊帳の中に入ると、赤坊は矢張り絞殺されでもするやうに泣揉掻いてゐる。總身は汗で茹でられたやうである。宏一が再び其れを抱き起さうとすると、赤坊は恐ろしい敵の襲撃にでも會つたやうに、急に両手を擴げて宏一の頬を引摺み、兩足でばたく／＼と宏一の胸を蹴付け、殆んど彼を寄せまいとする。其の振舞はどうしても、生後六七ヶ月の子供の無意識な衝動とは思はれないほどの憎々しい効果を宏一の神経に與へた。今まで我慢に我慢をして他に向けてゐた彼の癩癩が、今はもう眞向に赤坊の頭上に爆發した。

「お前のやうにさう亂暴をしては、どうすることも出来ないぢやないか！」

彼は殆んど細君をでも叱責するやうな大きな聲で、まだ何の意識もない赤坊を叱り付けた。そして兎も角この蒸暑い苦しさから赤坊を救ふために、彼を眞裸體にしてやる算段を立てた。宏一

は汗と小便とでしつくりと腹に喰込んでゐる赤坊の襦袢の下紐を解いて、肌着を肩から脱がせようとした。けれども赤坊は例の如く泣き揉掻いて、身體をくる／＼振ぢらせるので、どうしても腕が袖口から抜けて來ない。

「あれほど度々云つておくのに、まだこんな細い袖口の襦袢を着せてゐやがる！」

彼は激しい舌打と共に、小さな肌着の袖口へ自分の兩手の太い拇指を突込んだ。さうして力任せにめり／＼と其れを引裂いてしまつた。

と急に、又赤坊の泣聲が音色を變へて激烈になつた。はつと思つて抱上げて見ると、赤坊の片腕がぶら／＼としてゐる。若しやと思つて其の腕の附根に觸つて見ると、赤坊は呼吸も絶えるやうに泣入るのであつた。

「しまつた！赤坊の腕を折つちまつた！」

忽ち宏一は背筋から氷の太い丸太棒か何かで撲されたやうな、冷たい、刺す如き疼痛を感じたが、それが一瞬間で全身を射て通り過ぎると、次の瞬間には彼の腦中に、刹那の前とはまるで正反對の、荒々しい殘忍な感情が簇がつてゐた。それは宛も子供の時分、大事に大事にしてゐた人形

か何かが、ふとした拍子で手とか足とかの一ヶ所に缺損が生じると、もうその人形を見てゐるのも不愉快になつて、急に、四肢は勿論、首も胴體も引千切つて、地面に叩き付けて、その上を足で粉微塵に蹂躪つた時の感情にほゞ髣髴たるものであつた。

「えゝ面倒だ！ もうどうなりともなつちまへ！」

彼は屹と口を歪めて齒を喰ひしぼると、行きなり其の大きな左手で赤坊の口を抑へた。さうして泣頻る聲に無理に蓋をしながら、右手で赤坊の小さな頭を引摺んだと思ふと、途端に全身の力を籠めて、二三度も其れを枕に擲きつけた。

忽ち赤坊の泣聲は止まつた。見ると今まで強い力の漲つてゐた四肢はだらりと垂れてゐる。さうして小さな胸から咽喉へかけて、波のやうな塊がぐいぐいとこみ上つて、嘔氣を催うすやうな唸りが微かに聞かれた。同時に顔の色が潮の引く時の如く赤味を失つて、唇が少し歪んだまゝひく／＼と顫へてゐる。眼は兩方とも鈍く開いてはゐるが、瞳は既に一ところに据わつたまゝで、何だか白い薄膜でも蔽はれたかのやうに光を失つて、赤坊の小さな呼吸はそのまゝ絶えてしまつた。

宏一は暫く失神したやうに、赤坊の青ざめた顔を見つめてゐたが、やがて細君の階子段を上つて來る足音を耳にすると、急に跳り上つた。

「馬鹿、又來やがつたか！ 序に貴様も一緒に片付けちまつてやらう！」

彼は殆んど無意識に斯う叫んで、蚊帳を飛び出したが、階子段の降口まで駈けて來ると、忽ち全身の力を失つて、どつと激しい音を立て、床に倒れた。

その日のうちに、一旦未決監に送られた宏一は、その後精神鑑定の結果、明かに精神に異状ある者と認められて、更に某精神病院に運び去られた。

盗 癖

高田は例の如く八時に出勤した。

夏休が済んで漸く半月。それでも最う秋らしい日がどんよりと黄ろく硝子窓に射して、小使室の横の狭苦しい菜園に、まだ朝顔の花が小さく咲残る薄曇りの朝であつた。溜室で二三の同僚と挨拶を交しながら、煙草一本を吹かした後、高田は直ぐ自分の椅子に就いた。抽斗を開けると、社長の命令で、二三日前から取掛つてゐる翻譯物が、一番上側に載つかつてゐる。今日はそれを片付けてしまふ積りで、熱心にペンを執り始めた。

二十分ばかりも経つた頃、給仕が電話だと知らせに來た。

高田は今行詰つてゐた Tabular Standard と云ふ字の譯語を考へながら電話室へ入つた。さうして受話器を耳に當てた。

「私は萬世橋驛前の警察ですがね、今貴方の甥が」と云つて、相手の聲が一寸斷れた。甥と云ふのは、去年の春田舎から逃出して來て、彼の家に厄介になつてゐる。そして毎日神田の或る私立學校へ通つてゐるのだ。高田はその甥が電車で怪我でもしたのではないかと動悸りしてゐると、直ぐ又後の言葉が聞えた。そして彼の豫想とは全く反對に、甥が今朝汽車の無賃乗車をやつて警察に引渡されてゐるから、即刻高田に出頭せよと云ふのであつた。

高田は更に新たなる心臓の衝動を感じた。彼はこの甥の惡癖に就いては、從來も薄々氣が付いてゐないことはなかつた。毎月月初めに與へる小遣錢は、いつも月半ばになくしてしまつて、後にはどうしてゐるのか分らなかつた。尤も高田自身がまだ哀れな腰辨なので、その甥に與へる小遣錢も固より餘裕のある方ではなかつたけれど、それでも無分別な費ひ方さへしなければ、一月間の電車賃や筆墨紙代には決して差闕へないものと高田は信じてゐる。その上彼は、若しこれだけで足りなかつたら、支出の書附さへ持つて見れば、又臨時に相當の追加はしてやるとさへ云ひ含めてある。それに甥はまだ一度もその書附を見せたことがない。そして高田が机の抽斗などに入れておく小錢を折々胡亂化する。黙つてゐると月謝の殘金など持つて來たことがない。まだその

外にも怪しいことは二三度もあつた。けれども元來が極めて温順しい、氣の弱さうな子供なので、まさかそんな大膽な行爲があらうとは思ひもかけなかつた。高田は頓には應答の言葉も出なかつた。受話器持つ手が微かに顫へた。

「警察署の方に参るのでせうか。」高田は辛うじて聲が出た。

「いゝや、交番の方に来て下さい。それから若し私が居らんかつたら、森村と云つて聞いて下さい。」

高田は電話室を出たが再び自分の机に歸る氣もしなかつた。彼は便所へでも行くやうな顔をして、急いで廊下に出た。其處の隅で一寸財布の中を調べて見た。それから會計へ行つて、今月の俸給の中から少しばかりの前借を申込んだ。更に又部長の部屋へ入つて行つて、急用のため今日は缺勤として貰ひたいと願つた。そして若し用事が早く片附いたら、正午迄には戻つて来る旨を附加へておいた。

「君どうしたんだ。いやに慌て込んでるぢやないか。」隣席の同僚が、高田の顔を見ながらにやにや笑つた。

「うん、一寸急用が——」

高田は強ひて落着きを見せようとしたが、どうしても平素の顔で答へることが出来なかつた。そして會社の前から直ぐ電車に飛乗つた。

交番はどの邊にあつたかと、電車の中でも考へ考へ來たのであつたが、停車場前の石段の横に直ぐ見付かつた。大道から眞面に吹付ける砂煙の中に、口髭のちよろりと生えた、際立つて色の黒い巡査が停立つてゐた。高田は丁寧にその巡査の前に頭を下けた。

「森村君は今構内の巡廻中です。」巡査はすべてを知つてゐると云つた目附で、高田に鋭い一瞥を投じた。高田は、この職業の人にしか見られない、ぎろりと輝くその視線の前に、一種の恐怖と屈辱とを感じずには居られなかつた。

森村巡査には待合室の前で出會つた。高田は出来るだけ謙遜して物を言つた。これは髯のない細そりとした體格で、腰の洋刀にも拘はらず、親しみ易けな人であつた。けれども高田の自尊心は、彼に名刺を出すことを肯んじなかつた。

「兎も角あらへお出で下さい。」 巡査の言葉も先刻の電話よりは丁寧であつた。

二人が交番へ戻つて來ると、先の色の黒い巡査が替つて出て行つた。斯うして巡査が氣を利かして呉れたことが、又高田の胸に、喜悅よりも寧ろ多くの耻辱を與へた。

「一旦告發されて罪名を負ひますと、もうその人間は自暴自棄になつて、それが爲に將來有爲の青年を益々深く墮落の淵に陥らせるといふ例は、世間に澤山あることですから、どうかしてさう云ふ危険から救ひ出して上げたいと思ひまして——」 森村巡査は、如何にも勿體ぶつた口調であつた。

高田が呼出されることになつてから、一旦交番の手に渡されてゐた甥は、再び驛の方へ戻されることになつた。甥は最初驛夫や巡査の訊問に對して、強情にも口を開かなかつた。さうして虚偽の名前を云つたり、身分や住所を欺いたりした。巡査も到頭もてあぐんで、

「罰せられるお前はそれでいいかも知れないが、お前にも親があらう。兄弟もあらう。その親や兄弟の迷惑を考へないか」と叱りつけた。すると甥はさめくと泣き出した。そして終に高田の甥であることを自白したのであつた。

「なに珍らしいことではありません、中學時代の學生には有りがちな、眞の一時の不心得です。」 巡査は急に捌けた物の云ひ方をして、

「で、驛の係の者とも相談しまして、兎に角貴方から乗車賃を辨償して貰つて、それで今度は放免することにしましたから。——處が驛の者の證言によると、どうも今日ばかりではないさうです。」

「いや幾度罪を犯しましたかは知りませんが、分つてゐる限りは私から辨償致します。」 と高田は云つた。

「それに此處は新聞記者が始終徘徊して居りますので、随分困りましたよ。一寸でも彼等の耳に入れますと、最う駄目ですからね。だから先刻の電話などは、わざと向うの自動電話から掛けたんです。」 斯う云つてにや／＼してゐる巡査の顔に、高田は何等かの謝禮を豫期してゐるやうな、卑しい筋肉の顫動を看取しない譯には行かなかつた。

やがて巡査は、驛の係の者を呼びに立つて行つた。

丈の鬮抜けて高い、づんぐりと肥つた驛吏が、間もなく巡査に伴れられて入つて來た。彼は高田の風采や、慇懃な態度を目撃すると、少しく意外の顔付をしてゐた。

「實は帽子の徽章も餘り見かけず、それに草履穿きなものですから、何處かの給仕か、職工だらうと思つてゐました。」

驛吏は斯う言つて氣の毒さうに笑つた。

「顔は此の三四ヶ月毎日見かける顔なのです。そして一寸手を舉げて改札口を出て行くところは、如何にも慣れてゐるんです。何ですか、これ迄に一度でも定期乗車で通學されたことがありますか。」

「市内電車では速廻りで遅くなるからと云つて、夏休前に暫く、千駄ヶ谷萬世橋間の定期で通つて居つたことは事實です。」と高田は答へた。

「然し今朝は代々木から乗つたと云ふことでしたが……」

それも電車ではない、汽車の方であつたと聞いて、高田は少しく返答にまごついた。

「それも亦例の虚偽を申立てたのではありますまいか。宅は千駄ヶ谷に住んで居るのですから、

代々木から乗る筈はありませんが——」やがて云つた。

結局今後を慎んでさへ貰へば、此の度は今日分だけ拂つて貰つてよいと云ふことに、驛吏の方から折れて出た。

高田は驛吏と巡査との後に付いて、構内の一室に導かれた。

部屋に入ると、横手の隅に一脚の机を据ゑて、黒の脊廣を着けた、髯の濃い、おのづから課長と云つた風格を備へた一人の立派な紳士が坐つてゐた。衝立の向うの大きな卓子の周圍には、四五人の驛夫が何れも中腰になつて、頻りに今受取つた切符を選び分けてゐた。その片隅の椅子に小さく坐り込んで、人から顔を隠す風に、凝と俯向いてゐる甥の姿が、直ぐ高田の眼に入つた。鼠色のしみつたれた夏服を着けて、脚氣の氣味とかで靴を穿かず、素足に薄織ない麻裏をつまかけてゐる様は、成程何處かの職工ぐらゐに間違へられさうな見すほらしさであつた。

高田は課長に挨拶をして、手短かに甥の不都合を謝した。課長は只にや／＼笑つてゐた。

この間に巡査は甥を高田の前に呼んで來た。

「何といふ不心得な了簡であるんだ。馬鹿！」

高田は甥が目の前に立つと、先づ鋭い聲で一喝を喰はせて、暫く甥の顔を睨め付けた。甥は涙含んで頭を垂れた。課長も巡査も只黙然としてゐた。

「此處で醜態を演ずるやうなことがあつては却つて御迷惑でせうから、何れ内に連れ歸りまして篤と説諭いたします。」やがて高田は又課長の方に向いて云つた。

「それがようございませう」と課長は矢張りによくしなから、

「では、先刻の列車は新宿發ですから、規定によつて新宿萬世橋間の賃銀を頂戴させよう。」

「叔父さんの今日の御想を忘れてはならんぞ。さうして大いに勉強しなければならんぞ。」巡査は例の職業的な口調で、懇々と甥の今後を説諭してゐた。高田は課長にも巡査にも丁寧に謝辭を述べた。そしてわざと五圓札を出して、釣を取つて、甥を伴れて停車場を出た。

「到頭お前はおれの顔に泥を塗つた！」

高田は甥が椅子に腰かけるのを待ちかねて言つた。彼は停車場から直ぐ、ついその近所の、日

頃親しくしてゐる何某商會の二階の一室へ、甥を伴れて來たのであつた。

甥は俯向いて只涙含んでゐた。

「一體お前と云ふものは、東京へ來た當座からしておれには疑問であつた。自分では只勉強がしたさに出て來たやうなことを言つてゐるが、國からの手紙ではお前はどうかやら國に居られないやうなことを仕出來して逃げて來たらしい。それでもお前は、お前の境遇には同情を持つてゐたから、苦しい中からでも學校へ入れてやることにした。その時お前は、これからは乾度苦學生の心掛で勉強すると誓つたぢやないか。お前は果して今日までその心掛を忘れずゐたと思ふか。」

高田は從來にも折々云つて聞かせたことのある甥の不行跡や悪癖を、又一々に數へ立てた。そして嘗て二人が同居してゐた逸見と云ふ家で、貯金箱の金が少し無くなつた時、終にその嫌疑が甥の身に掛つた時のことを引合に出した。

「あの時なんかさうだ。おれは眞逆と思つてゐるが、念の爲にお前の衣囊や机の中を調べて見た。するとおれがお前に買つてやつたこともない小刀や鉛筆などが出て來たぢやないか。それを見ておれはもう一言も出なかつた！」

甥は矢張り俯向いたまゝで黙つてゐた。

「お前はおれと同じやうに、小さい時に父親に死なれた。小學校を出ると直ぐ奉公にやられて色苦勞をした。おれは其處に引かされて今日までお前を世話して來たのだ。然し親子の關係なら知らないこと、叔父は必ずしもその甥を養育しなければならんと云ふ義務はない。おれは今日と云ふ今日、お前には愛想が盡きたから、今夜にも國へ歸つて呉れ！」高田は怒りに任せてこんなことまで云つた。

この言葉を聞くと、甥は忽ち激しく泣きじやくつた。

「叔父さん、それは餘りです。僕は今度こそは——今度こそは屹度改心しますから、どうぞ東京にだけ置いて下さい。」

高田は擬と甥の泣く様を見詰めてゐた。今この甥を自分が手離したら、甥はどういふ風になつて行くであらう。只暗い、恐ろしい墮落の淵が、彼を待つてゐることは目に見えてゐる。高田はその暗黒な未來を考へると、口には強いことを云つてゐても、この甥を見捨てる氣にはなれなかつた。

「お前は今日代々木から汽車に乗つたと云ふが本當か。」やがて高田は、甥の泣き止むのを待つて云つた。

「えゝ、本當です。」と甥は微かに答へた。

「何故又そんな處から乗つたんだ。」高田の聲はまだ鋭かつた。

甥の答辯によると、彼が今日家を出た時は懐中既に一錢もなかつた。これでは電車にも乗れないので、今日は學校を休む氣になつて、田圃路をあてもなくぶら／＼と歩いてゐるうち代々木へ出た。丁度其處へ新宿の方から汽車が來たので、夢中でそれに飛乗つたといふのであつた。

「全然夢遊病者のやうな所作ぢやないか。お前は近頃餘程頭腦を悪くしてゐると見える。」高田は呆れながら甥に云つた。

「何だか知らないが、僕はこの頃は、只泣きたくて仕方ありません。」甥は又涙をはらくと落した。

「俺は時々云つて聞かせてゐる。お前の年頃の神經衰弱は、大抵は自分の不攝生から來てゐるのだ。——人前では話も出來ないやうな耻かしい行爲をして、自分で自分の身體を傷つけてゐる結

果なのだ。過度の勉強の爲めなどと考へてゐるのは、皆世間の親達が馬鹿だからだ。それを全然
廢めなければ、頭腦は決して癒るものではない。」

甥は又黙つて俯向いてゐた。この時午砲の音が激しく聞えた。

「兎に角お前は充分反省して、今日までの生活と習癖とを一變ししなければならない。若し眞に改
心するならば、今日これから直ぐ家へ歸つておれに契約書を書いておけ。それから床屋へ行つて
頭を圓めて來い。今年今月今日から、お前と云ふものは生れ變つた心持にならねばいかん。今後
再びこんなことがあつたら、その時こそおれはもう用捨はしないぞ。乾度お前を國へ返すからさ
う思つてゐるがよい！」

高田はかう云つて甥を先に家に歸した。そして自分は再び會社へ引返して、先刻の仕事の續き
を熱心に片付けた。

夕方になつて歸つて見ると、信一といふ——これも高田の遠縁に當る中學生と共に、玄關に迎
へに出た甥の頭はてら／＼と光つてゐた。

夕飯を済まして書齋に引取つて、彼是二時間ばかりも書見した頃、甥は一通の封書を持つて來
た。高田は黙つてそれを受取つて、甥の去るのを待つて開けて見た。

嗚呼叔父さん、僕は到頭我から此の社會の生存競争場外へ放逐されました。

僕が去年の春に上京してから今日まで、叔父さんの名譽を毀損し、御迷惑をかけたことは幾
度あるか知れませんが、僕は叔父さんから注意を受けた時は、これでも必ず改心する積りで
るのですが、二三日もすると最う忘れて終ふのです。僕は折々我ながら我が心が忌々しく
ならないことがあります。

叔父さんのお言葉通り、僕は逸見さんの金を消費しました。その當時、僕が隣の部屋にさ
へ入つて行くと、A君もB君も、机の抽斗や本箱に注意してゐるのを氣附かない譯には行き
ませんでした。

又小刀や鉛筆挿、その他の物も、皆僕が學校で盗んだのです。金も五六度盗みましたが、
幸か不幸か誰にも知れませんでした。今から考へると實に不幸でした。一度いいわ、二度い
いわで、終に曲つた者になつてしまつたのです。これは僕がまだ田舎に居つて、叔父さんの

家の門長屋で、母と二人淋しく暮してゐる頃から、漸次に染付いた悪癖です。さうして到頭正しくならず、曲りなりに曲つて来た罪は實に底知れないほどです。

小學校に居た時、僕は同級生が、月謝を集めてゐるのを盗んだことがあります。一度知れかけたが其れも不幸にして知れませんでした。又高等二年の時、悪い友達二三人と諸方の果物屋や文房具屋で法外な借金を拵へて、すんでのこと試験に落第するところを、時の校長上田氏のお情で、漸く及第したことがあります。これは母もまだ知らないと思ひます。近くは去年の春國を飛出す時も、預けられてゐる先の店の金を大分費ひ込んで、それが知れさうになつて来たから、僕は叔父さんや皆を欺いて終に東京へ逃げて来たのです。こんなことを一調べて行くと、生れて十八年、僕は今日までどれほど不正な事をしたか知れませんが、叔父さん、許して下さい、僕は實に悪魔でした。

叔父さんから學校へやつて戴いて、僕は心を改めて大いに勉強する積りでゐたのです。處が自分で思つたほど成績がよくない。丙が多くて逸見さんでも笑はれました。次の試験には正に大いに奮發して、この耻を雪がねばならぬところを、心の曲つた僕は却つて捨鉢になつ

て、一層怠けるやうになりました。勉強さへすればどうか斯うか行けるところを、勉強すれば出来る、しなければ出来ないのが當然だと云ふやうな曲つた理屈を付けて自分で満足してゐたのです。實際僕は東京へ来てから死にたいと思つたことが二度ばかりあります。一度は逸見さんで金のこと知れた時、一度は又近く信一君の成績のよかつた時、何れも叔父さんに濟まないと感じたからです。で、この九月からは屹度心を入替へて、是非好成绩を收めようと思つてゐたのです。

叔父さん、僕でもこれで月初にお金を頂いた時は、この月こそは旨く經濟をやつて行かうと、ちやんと精算を立てて置くのです。處がそれがどうしても實行出来ないのです。さうして先で困ることは目に見えてゐるのに、ついむざむざと費つて終つて、月半ばになつていつも後悔するのですが、どうすることも出来ないのです。僕は實に金使ひが荒い。けれども叔父さんの云はれる如く、恥づべき不攝生の行爲で頭腦を悪くしたり、又は脚氣を出したりしてゐるのでは決してありません。これだけは誰の前でも公言することが出来ます。叔父さんのお言葉は餘りに酷だと思ひます。けれども僕の平生の心掛が心掛なので、何と思は

れても仕方がありません。僕は自分でも變物だと思ひます。そして人を使つたり養つたりすることが好かない性質ですから、一生獨身で行く積りでます。これは田舎にゐる頃からの決心です。これも事實とは思つて下さらないでせうが、思はれないでも仕方がありません。

實に九月十八日は僕に取つて一生忘れることの出来ない幸福な日です。若し今日僕の不正が見付からなかつたなら、今後も僕の腐敗した精神はロハ乗りをやつて、更に今日以上の悪事を重ねたかも知れません。然し幸ひにして見付かつた。今日によつて僕の腐敗した精神は一掃されました。實際です。僕は心底から悔悟致しました。僕は今朝見付かつた時は失神してゐたらしいのです。何を言つたか考へ出せません。然しその中でも、學校の放逐と現世の地獄行とは覺悟してゐました。最早や赤い衣を着るものと思ひ定めてゐました。處が警官、改札掛の親切により、尙又叔父さんのお蔭によつて助けられました。嗚呼紀念すべき九月十八日、萬世橋驛、S G 商會の二階、皆僕に取つて大恩のある處、僕をして正人に歸らしめた處、僕が一生紀念すべき處です。

嗚呼九月十八日、僕が最大幸福の日。誓ひます、僕は今後屹度正人に立歸つて成業致し、

叔父さんや母に安心して戴けるやうになります。眞人間に歸つた哲之助が、神佛の前に於いて誓ひます。どうぞ叔父さん、今日までのことはお許し下さい。屹度心を入替へます。誓ひます。

讀み終つて高田はじつと腕を組合せた。大方こんなことだらうと推察してはゐたものゝ、かう明らさまに自白されては、何だか今日までこの甥に旨々と欺かれてゐたやうな感じがして、今更甥が憎い心地になつた。高田は世間の親達や兄達が、いつもその放埒な息子や弟等から嘗めさせられてゐるやうな、一種の失望と馬鹿々々しさとを感じない譯には行かなかつた。

「然し其處に偷盜の心のない者が何處の世にあらう。」暫く經つて高田は急に頭を上げて獨言を云つた。

彼は自分も亦子供の時分に、能く近所の菓子屋や文房具屋で借金を拵へては、折々母の巾着の紐を密かに解いて見たことを思ひ出した。事に大小の差別はあらうけれども、百萬圓の金を盗むのも、或は會社や役所の用紙一枚、鉛筆一本を無断で私用に消費するのも、偷盜と云ふ點に於て

は變りはあるまい。世には判事だの検事だのと、恰も正義其物であるかの如き嚴しい名前の役人もあるけれども、神の大きな眼から見れば、其處に裁く者と裁かれる者との間に、果してどれだけの逕庭があらう。まだ世間の罪と云ふものから全く潔白であるべき清い子供の手で、戸棚の中から、そつと菓子的一片を取出す時、否ぎやつと生れるなり直ぐ母親の乳房からその乳汁を吸ひ取る時、其處に既に人間の偷盜の本心が發露されてゐるのではあるまいか。

「偷盜は人間の天性だ！」暫く經つて高田は又強く云ひ放つた。そして此の甥の今日までの經歷を土臺にして、一つ人間の盜心史と云ふやうなものを書いて見たら、多少興味ある記録が得られはすまいかと考へた。

そんなことを考へながらも、高田は矢張り今日の甥の事件が世間に知れ渡るのを恐ろしく思つた。彼は先刻電車の中で買つて來た夕刊を取出して、再び隅から隅まで目を通して見た。そして尙も翌朝の新聞を氣にしながら、十時が鳴ると床に就いた。

正心邪心

昨夜はお通夜が二つ重なつたので能く眠れなかつたのと、乾の家で無理に地酒を勤められたのとで、今朝は頭がづきづき痛んで、その上身體の節々がぶちのめされたやうにだるい。それでもう起きようと思ひながら、まだ床の中で愚圖愚圖してゐた。すると本堂裏から此の部屋へ續く廊下を、誰か歩いて來る足音が、ほんやりとしてゐる頭に入つて來た。私は額越しに入口の方を見詰めてゐると、下男が顔を挿し込んだまゝ、私の寢てゐるのを見て急いで障子を閉てゝ行つてしまつた。私は變なことをすると思ひながら、黙つて見送つてゐたが、ふと疊に眼を落した時、壁際に一通の手紙があつた。差出人の署名はないが、その手蹟から推して、三日前に突然分院を飛び出した了道からであることが直ぐに分つた。

彼は三四歳の頃この寺に貰はれて来た。彼れの家は此處から二里程南の城下にあつた。維新前は調馬師として相當に暮してゐたが、廢藩になつてからは色々不幸が續き、終に土地にも居られないほど零落してしまつた。そこで檀那寺である關係から、死んだ叔母さん（老僧の權妻を私達がかう呼んでゐた）が、子供のないのを幸ひに、彼を引取つたのであつた。母乳で充分に育てられなかつた彼は、随分身體が弱くて、世話が焼けた。で、時々老僧夫婦の間に衝突があつたけれど、いつも叔母さんが氣兼ねながら、蔭になり日向になつて彼をかばつてやつてゐた。殊に食物に就いては意地が汚くて、叔母さんもほと／＼困つてゐた。まだこの寺に貰はれて来て間もない頃、時々叔母さんが一寸目を放してゐる隙に、彼の姿の見えなくなることがあつた。大騒ぎして捜し廻つてゐると、臺所の戸棚の中から顔を飯だらけにして出て來たり、或る時は納屋の隅の薪の間に隠れて、生芋を土のまゝ嚙つてゐたこともあつた。

學校へ行くやうになつてからは、この意地汚い癖は餘程矯正されたが、それでもなほ飯時には無闇に急いで、食後それをいつも牛のやうに練返して食ふのが生來の習慣になつてゐた。この外にも一つ彼れの今だに癒らない惡癖は夜尿である。それにも拘はらず、彼は幼い時から随分才

はぢけてゐて、何かと細かいことまで能く氣がついた。それがため他の兄弟子達から非常に憎まれてゐた。けれども叔母さんの目には、小さい時から手鹽にかけて來た彼が一番可愛く見えて、彼れのいふことは随分無理でも通してやるといふ風なので、他の兄弟子達も段々不平を抱くやうになつた。

彼が中學の三年になつた時、不幸にも彼れの唯一の保護者であつた叔母さんが死んだ。その後の彼の身邊は、全く四面楚歌の有様で、今まで叔母さんの手前こらへにこらへてゐた他の弟子達の鬱憤が、一時に彼に向つて爆發した。老僧も彼の我儘を見兼ね、且つ又他の者を統御して行く關係から、見せしめの爲に遂に彼を休學させてしまつた。

僧院といつても他の宗旨と違つて、この寺には速夜詣りといふ仕事は殆んど稀で、すべては田畑や山林からの収入で生活してゐるのである。檀家は全部士族で昔は随分勢力があつたけれど、城主が變つてからは諸所に離散して、今に在住してゐる家は僅かしかない。私達の日常生活は、經文を習ふ以外に、少しも普通の農家と變りがない。毎朝東の白むまでに、谷間に散在してゐる堂ごとに勤行を濟ませ、それから後は山に畑に、各自受持の場所に働く。そして夜は二三時間禪

堂に入つて、修行を積むことになつてゐた。

了道に取つては、今までのんきにしてゐた學校生活から、この日毎の急轉した勞働生活が、身を切られるほど苦痛であつた。鎌を持つても、一畦耕すともう腕が折れさうになる。意地の悪い兄弟子達は、又それが面白いのでぐんぐんと彼を追ひ使つた。いかに勝氣な彼も、これだけは如何ともすることが出来ない。晝山に行けば、十五貫目内外の薪に腰の骨がぐきぐきとなつて、足が延びない。夜禪堂に入つては、晝の疲れに直ぐ居睡りが出る。はつと思ふ間に大きな笏が打下される。事ごとには彼は涙の種であつた。

この苦痛は遂に變じて、不平となり、不満となり、彼の體內で渦巻いてゐた。しかし唯一の味方であつた叔母さんは既にゐない。誰一人として彼のこの苦悶をしみぐきと聞いて呉れる者、慰めて呉れる者のゐない今日、彼は勢ひ外に向つて何等かの慰安を求めずにはゐられなかつた。けれども、峻しい山坂一里を越えなければ人里もない此の山奥の寺にゐては、彼の不平は到底思ふやうに満足が得られなかつた。

丁度その翌年の夏、此處から七八里も隔てたある大きな都會で、相當な造船所を持つてゐるN

家の一族が、法事のためにこの寺に暫く滞在することになつた。煩雜な都會生活に倦み果てた人人には、この人里離れた山谷の生活が好奇心をそよつて、又とない避暑地として深い仰象を與へた。殊に年若い主人公よりも、その母親である未亡人の心に悉く適つた。修行のために拵へられたある瀧壺には、檜造りの東屋が立つて、硬い筋立つた皮膚の代りに、柔かな肌が水に浸されたり、庫裡の續きに長廊下を隔て、いきな離家が新築されたり、萬事に派手な此の珍客の群に、寺内の空氣は忽ち攪亂されてしまつた。今までは男ばかりの殺風景な臺所に、甲高い女の笑聲が聞えて、立籠つた木の間に隠見するその優しい姿が、働く農夫の目に異様に映つた。

この騒擾に喜んだのは了道只一人であつた。他の者が依然として田畑の勞働に従事し、まだその上に新築の離家の拭掃除や、今までは十日置きぐらゐにしてゐた庭の掃除が、毎日の新しい日課となつて、忙しさに目を廻してゐる時、機を見るに敏い彼はすっかり未亡人に取入つて、易々とその一家の群に仲間入りしてゐた。そしてN家の用事は一切彼が引受けて、ある時は城下に、ある時は又N家の實家へと、外出の日が多かつた。それと同時に、彼の身中に潜んでゐた永い間の不平不満が、知らずくのうちには彼自身を墮落の淵に引擦り込んでゐた。使ひの度に過分に渡

される金は、いつも飲酒と遊興の資にその幾分かを消費されてゐた。かうして習慣づけられた彼の悪癖は、色々に發展し、變化し、瀰漫して行つた。

漫然と遊惰の中に夏を過してゐたN一家は、朝夕の冷氣がやゝ肌に迫る頃となると、山谷の風物の變轉の早いのに驚かされて、早々と又煩雜な都會に引上げてしまつた。再びその保護者を失つた了道は、一時途方に暮れたやうに見えた。しかし彼は表面頗る温順を装つてゐるので、彼の周圍のものは少しも彼の心中に潜んでゐる恐ろしい性情に氣附かなかつた。

N一家が居なくなつてからは、了道の小遣錢を融通する途は全く杜絶してしまつた。けれども一度びバクテリアのやうに身に泌み込んだ楽しい遊びの追憶は、彼の心をして益々狂的に向はしめた。彼は野良仕事に雇ふ男をそのかして、水車小屋から白米を盗ませ、また或る時は山に積んである薪を密賣して、その利得を以て飲食し、時には同輩の目を盗んで、夜半に山を下りることもあつた。

南國の秋は九月の聲を聞くと早や早稲の取入れに忙がしく、十月の末にはもう豊かに黄金色の波を漂はせてゐた稻は刈盡されてしまふ。挽臼の音が、吹き渡る風に乗せられて、其處からも此

處からも聞えるやうになつてから早や幾日か過ぎて、十一月の半ばには、諸處から納められる年貢米の俵が、この寺の庫裡の廣い土間にも幾十となく積み上げられた。

磨き上げたやうな新しい俵の山を眺めて、老僧は朝な夕なに満足の微笑を漏らしてゐたが、これを見て喜んでゐるものが外にまだ一人あつた。それは云ふまでもなく了道であつた。彼はその餓ゑに餓ゑた慾望を満足さすため、ある夜他の弟子達が寢靜まるのを待つて、窈かに床を出た。そしてかねて用意しておいた竹筒と木綿袋を取つて土間に降りた。その瞬間の彼の神経は、不意に頭から冷水を引つかけられた時のやうに鋭く顫へてゐた。その顫へと共に彼の精神は興奮し、聽覚は特に過敏になつて、僅かの音響をも聞逃さなかつた。彼は細心の注意を拂つて、第一の俵に竹筒の尖がつた先端を差しこんだ。その時、周圍からの壓迫にやつと堪へてゐた俵内の米は、一時にざあと音を立てて袋の中へ流れ込んだ。そして見る間に袋の底の部分を満たした。彼は老僧の鋭い目を晦まさんが爲に、幾つも俵を變へることを忘れなかつた。やがて一斗の袋は、その内容の充實に依つて、緊張して土間に横はつた。彼は手早く袋の口を縛つた。そして其れを引擦つて直ぐ床下にもぐつた。庫裡は在家の建物とは違つて、床が非常に高く出來てゐるので、らく

に人一人這つて歩くことが出来る。彼は暗中を手探りに模索しつゝ、漸くのこと外庭の壁際に辿りついた。そこには風通しの窓がある。此處まで米袋を運んで来た彼は、袋を壁際に密接させて引返した。そして再び土間に立つた時、家内の静かなのに安心して、今度は大びらに板の間を踏みながら、便所に入った。これは若し彼の朋輩が彼の居ないのに氣附いた時の用意にと演じた彼の芝居であつた。

翌日了道は庭掃除のついでに、そつと窓際を窺いて見て、米袋のないのに成功の微笑を漏らした。庫裡の勝手口を出ると、直ぐ下に半反ほどの畑がある。その傍に昔のままの鐘樓が立つてゐる。畑には竹の枝で霜除けをされた蓬蓮草が、よなくと間ばらに残つてゐる。その側にやつと一寸ばかり延びた豌豆が青く蹲つてゐる。三方が藪や雑木林に圍まれてゐるため、すべての作物の育ちが頗る悪い。老僧が若い頃、双手の力に任せて開墾したといふ因縁で、八十に近い今日も、なほ弟子共と一緒に季節季節の野菜物を此處で育てて喜んでゐる。この畑の袂から町へ行く間道が続いてゐる。本道は庫裡から谷を三四町も奥へ入つて、そこにある本堂の前から數十の石段を幾度も下りて行かなければならない。それで止むを得ない時の外は、私達は迂回を避けて此の間道を通ることにしてゐる。

畑と鐘樓との間をだら／＼と幾度か曲つて、坂を下りきると山門があつて、此處で間道は本道と合してゐる。その横には、山間に特有な水車が、ものうい音を立てて休み／＼廻つてゐる。小屋と相對して山門の向うに山番の家がある。山番の老爺は片手間に寺の田を借りて小作米を作つてゐる。しよつちう寺に出入りしてゐる關係から、寺の者と同様の取扱ひを受けてゐた。了道はこの老爺を味方に、常に色々の悪事を考へるのであつた。

朝の用事をあら方片附けてから、了道は素知らぬ顔でふごを肩にして、水車小屋へ下りて行つた。間道の兩側には雑木が生ひ茂つて、ともすると落葉に足を滑らすことがある。殊に二斗の米をかついで登り下りする時、この煩ひの爲に泣くことがある。彼は常に山番との會見をこの水車小屋の中で遂げるのであつた。丁度彼が小屋の入口に着いた時、山番の家からや／＼笑ひながら山番の嬢が走り寄つて來た。

「うまく行つたか」と了道は問うた。

「うまく行きましたよ。だけど、あんけに大きな袋ぢやもん、ちよつくらちよいと窓から出な

いんで弱つとりましたよ。そして直ぐ町へ出かけよりました。」

「それぢや、晩にわしが来ると云つといとくれ。」

「さう云つときまさあ。」

かう云つて、山番の老女は了道の肩を一つ叩きながら、野卑な笑ひを残して小屋の方へ歸つて行つた。彼はなんだか馬鹿にされたやうな、厭な氣になつて、空のふごをかついで坂を上つた。彼はかうしてその後も數回に、四五斗あまりの米を盗み取つた。その頃には又新しい仕事が必要が迫つてゐた。それは本堂の裏山の松林に、松茸が盛んに生えて、夜番の必要が迫つてゐたのである。松茸番は寺の弟子達の誰もが最も喜ぶ仕事の一つである。生木を柱に筵で圍つた小屋に、香りの高い取りたての松茸を煮食ひしながら、怪談や雑談に時を過すのが楽しいからである。月の夜などは遠く物凄^こい梟の聲が聞える。時に茂みの中で怪しい物音を聞きつけては、高い峰から大きな石を轉がす。それが一種異様な木魂^{こたま}を呼び起して、加速度の勢で谷間に轉がり落ちる有様は實に痛快である。これは松茸泥棒に對する警戒の一つであつた。

了道はその松茸番に當るのを特に喜んだ。老僧や兄弟子達の監視外に出られる嬉しさもある

が、一つには又大びらに自分の仕事が出来るからでもあつた。彼の當番の時は、山番の家から酒の運ばれることもあれば、町から密かに馴染の女が姿を見せることもある。その上、町の間屋が山番を通じて、若干の金を握らせ、新しい松茸をしこたま取つて行くこともあつた。かうして彼は、思はぬ小遣錢に有りつくのであつた。けれども盗みに對する一種の興味を覺えた彼は、それからそれへと、彼自身にも不思議なほど巧妙に犯罪の深みへと落ちて行つた。

彼は、この僧院の年中行事の一つになつてゐる寒行の托鉢に、谷間の隣村を巡つてゐた或る日、思ひがけない事件に遭遇した。彼はその日の夕方いつものやうに、衣を裾高にからけ、錫杖を片手に寺を出た。二里餘りある舊城下の町から歸途に就いたのは、夜も十一時に近かつた。胸にぶら下つた喜捨箱に一斗餘りの施米が満ちて、首の骨がそのためぐきぐきと痛む。生憎その日は午後から雪が降り出して、夜の更けるに従ひ益々激しく降り積り、鐵鉢を持つた左手は凍えて、鉢にいて着くかと思はれるほど冷氣が強かつた。しかしその苦みの中にも又、俗家の人々には到底経験することの出来ない、一種のヒロイックな、ヒューマニスティックな氣分が彼自身の心を陶酔させて、彼は云ひやうのない愉悅の情を感ずるのであつた。

了道が積雪の中を町外れにさしかかった時、横町から出て来た一人の女に出會つた。それは四十近い年増の女で、意氣な着物の着こなしから、直ぐ近くの料理屋か宿屋の女將であることが推知された。彼女は彼の托鉢姿に向つて、慇懃に合掌して禮拜した。そして黒繻子の帯から財布を取り出して、若干の銀貨を鐵鉢の中に入れた。彼は奇特な婦人の心を思ひながら寺に歸つた。するとその翌晩も彼女は例の横丁に立つて、彼の歸つて来るのを待つてゐた。彼は變に思ひながら行き過ぎようとした時、彼女は前夜と同じやうに禮拜して、又若干の金を施して呉れた。かうしたことが三四回續いた。ある夜彼女は彼を呼び止めて、今夜は亡父の命日に相當するから、一寸の間立寄つて、是非經文を上げて呉れと頼んだ。彼も毎晩布施を受けてゐることゆゑ無碍に斷る譯にも行かず、その家に行つて觀音經一卷を上げてやつた。彼は茶を勧められるままに暫く話してゐるうち、彼女が自分のことを餘りに多く知つてゐるのに驚かされた。それは彼女の同業者である、了道の馴染の或る料理屋の女から聞いて知つてゐるのであつた。彼女は了道に向つてこれを緣故に、今後時々話しに來て呉れと頼んでゐた。

その後了道は折々町へ出ることもあると、別に深い意味もなしに、彼女の家に立寄つて話し込

むこともあつた。これが彼の身に或る大きな事件の持上がる動機にならうとは、彼自身も全く豫想することが出来なかつた。立寄る度數が重なるうちに、彼女は了道を否應なしに虜にしてしまつた。彼もまた行く度に、金を呉れたり、響應されたりするので、進んで足繁く近づくやうになつた。かういふ經驗は、彼に取つては初めてであつたので、随分恐ろしい場面や苦しい立場に身を置かせられることもあつた。それは、この女に又他の情夫があつて、その男が絶えず了道に嫉妬の眼を投げてゐたからであつた。それに母親のやうな年を老つた女に強要せられるのも、あまりいい心持はしなかつた。

この僧院の宗旨には、そんなことは餘り聞かないが、他家では随分多くの醜聞を持つた住職がある。そして、そんな關係を手蔓として寺の格式を上げたり、又は廢れた本堂を再建して、信者から中興の名僧などと尊崇されてゐる生臭坊主もある。了道は良心の呵責に震へ慄きつゝ、而も自暴自棄的な辯解に自己を瞞着して、只その成行に引摺られて行くより外はなかつた。そして徒らに宿命的、因果的思想に囚はれてゐた。

その風評が僅少の檀家からちよい／＼朋輩の耳にも入るやうになつてから、彼は益々この宿命

的思想に固められて、佛前に参列しても、その腦裏には何等の進境をも開拓することが出来なかつた。彼のやうな小心で、而も色々の煩累を重ねて行く者の常として、たとへ自ら反省してもそれを打破るだけの活斷がなく、たま／＼他から忠告を受けた時には、却つてその人の缺點や弱點を先に見て、反抗の態度に出るのである。彼は心の一方には底知れぬ不安を抱きながら、他方には飽くまで罪跡隠蔽の手段を講じつゝ、いよ／＼深く本能の魔力に引擦られて行くのであつた。

彼と彼女との關係が、或る利慾問題によつて繼續されてゐる一方に、彼は又更に新しい關係を密かに彼女の姪に結びつけることになつた。それは總てに飽き易い彼の性格として、いつまでも他を人形扱ひにしてゐる年増女のしつこい抱擁に堪らない不満を感じ、青春の、燃えさかる戀の炎にあこがれた結果であつた。彼と姪との關係が餘程深くなつてから、女將の方では、やつきとなつて、益々その愛の執着を彼に現はして來た。しかし若い同士の強烈な戀の甘味に陶醉した彼は、最早や元のやうに彼女の自由にはならなかつた。

摺鉢の底のやうな田舎の氣候は、冬となると一際寒さが強い。その冬が過ぎて櫻の蕾が大分膨らみ、人の心に漸く長閑な氣分を漂はせて來た春の半ば、了道は突然この僧院の分院詰に廻されることになつた。

分院は一層山奥で、全く孤立した、とても普通では通れさうもない細い小徑が、僅に雜木の間を縫うて、漸く本院と連絡してゐるのであつた。その分院は今から百五十年前、初代の方丈が山城の宇治から諸國を遍歴した途次、此處に草菴を結んだ舊跡で、××藩が今の城下に居を占めてゐた時、藩主の信仰を得て現在の本院の伽藍堂を建立したものであつた。分院は修道場としては最適の聖地で、自然に出來上つた瀧は丈餘の懸崖を直下して、草菴の左に落ちてゐる。持佛は山の自然石に彫刻まれて、内陣に取込んであつた。平素は堂守と共に、お籠りをする病人二三人の外は住む人もなく、村の人も此處までは容易に上つて來ない。

老僧は寺内です道の風評を聞くと、一時は非常に立腹して破門とまで思ひ詰めたが、しかし何處まで落ちて行くか分らない彼の將來を考へてやると、彼を無慈悲に捨てる譯にも行かず、暫く離間してその悪夢を醒ませようと考へるに至つた。了道はその朝方丈と呼ばれた。そして峻烈ではあつたが、しかし情を含んだ老僧の言葉に、只管恐縮するの外はなかつた。そして數ヶ月間の絶對禁慾生活に依つて、再び眞人間に生れ變つて老僧に見ゆることを固く誓つて、彼は愁然と

本院を出た。

新春の太陽は、柔かな潤葉樹の葉を豊かに照らして、木蔭茂つた草の葉にきら／＼と露の玉を宿し、その玉は了道の近づくままにはら／＼と落ちた。彼の法衣は、僅か數丁の間にしつとりと濕つて、滴るほど露を含んでゐた。一三十町も登ると、少しく平坦な處に着く。此處からは谷々を越えて遠くに煙る緑の山や、本院の高い堂宇の屋根瓦などが、棚引く霞の中に見渡すことが出来る。彼は暫く其處に佇んで、一點の雲もない碧空を仰いで、始めて深く自己の心を反省した。

彼の足は、悔悟の涙に曇る心を載せて、遅々として進まなかつた。が、やがて踵々と落込む分院の瀧壺の響きに、彼は俄に我に返つた。彼は今日から此の山中の孤堂に、病人を相手として日を送らねばならぬ我が身を思つて、云ひ知れぬ哀愁に胸を閉ぢられた。しかし又自分の將來を豫想する時、既にわが物と決定してゐる隣村の草菴は、他の朋輩のそれに比較して、多くの特權が附せられてゐた。彼はその幸福な未來が自分を待ち付けてゐることを思つて、餘りに暗い影を残して來た自分の過去を今更に悔い且つ悲んだ。そして他の兄弟子達の愚鈍さが寧ろ美しかつた。彼はいかにして彼等がその本能を統御してゐるかを考へて見た。が、彼のやうに永い間自制的な

い、奔放な生活をして來たものには、まるで見當が付かなかつた。

了道は病人達と一緒に、夢のやうな最初の數日を其處で過した。讀經と、瀧に打たれることの外、何の仕事もない彼の現在に、過去の淫蕩な生活の疲れが一時に襲つて來て、彼は更に數日を半醒半眠の中に過した。かうして半月ばかりを経過した後、彼は漸く普通の意識状態に戻つた。すると忘れるともなく忘れてゐた異性に對する慾情が、又猛烈に頭を擡げて來た。彼は眠らうとしても眠れなかつた。野獸のやうな鋭い慾求は、彼の心の髓を噛み破らねば置かなかつた。彼は燃え盛る火焰のやうに亂れた頭を抱いて、瀧壺へ飛び込んだ。そしてすべての感覺の麻痺するまで、その中に浸つてゐた。終に彼は氷柱のやうに冷え切つた肉體を内陣に運んだ。そして黄色に光る蠟燭の灯に、本尊の御顔をすかし見るのが常であつた。その本尊の御顔はいつも從容として、微笑が口邊に漂つてゐた。しみ／＼と眺めてゐるうちに、どうかすると其の顔容の尊い光が次第に消えて、いつの間にか卑しい賣女の形相に變つて行くことがあつた。はつと思つて腰を浮かす途端に、彼の意識は朦朧となつて、その後の行爲は何一つ記憶に残つてゐない。

ある時は瀧壺の水口に坐つてゐる彼を見ることもあれば、ある時は又その瀧壺から數丁も離れ

た雑草の中に彼自身を見出すこともある。それが度重なるに従つて、彼は次第に夜を恐れ出した。しかし妄執は益々執念く彼に附纏つて、終には晝間他人と對座してゐる時ですら、彼は屢々悪夢に襲はれて昏倒するやうになつた。その苦痛はいやが上にも彼の心を鈍らせ、ますます彼を邪路に導いて行つた。それからの彼は、一日三界、只自分の取るべき道に迷つた。迷へば迷ふほど、愈々分らなくなつて、又、無意識の中に數日を送つた。

亘えた縁が黒みを帯びて、初夏の外氣に蒸返された陽炎は、茅葺の屋根にひらくと映じてゐた。了道は所在なさに草菴の庭に出て、久し振りにその衰弱した身體を日光に曝した。焼けつくやうな太陽の光は、彼れの腦髓を益々混亂させた。ぐらくする頭を漸く手で支へて、踞まつてゐる彼れの頭上に、何處からか飛んで來た一匹の四十雀が、ちい／＼と楽しさうに啼きながら、枝から枝へと飛び廻り跳ね廻り、終には又何處へともなく消えて行つたのを、彼は心底から羨しさうに見送つてゐた。どうかして制御しようとする不自然な努力に、日毎苦しみ惱んでゐる自分を、此の自由な小鳥の生活と引きくらべて、彼は一しほ淋しい思ひに涙ぐまれた。

了道が突然跳ね返されたやうに立上つた時、彼の表情には、或る強い決心が生々と現はれてゐた。彼は急いで部屋に歸ると、直ちに手許の持物を集めて、小さい包を二つ拵へた。それを彼は、有合せの紐でからんで、肩の前後に振分けた。そして細心の注意を拂つて、内陣に逃れた。何事にも衝動的な彼は、これまでも屢々一瞬時の間に、敏活に自分の目的を遂げて來た。その掌を返すやうな行動の變化には、彼自身も只驚くの外はなかつた。

やがて彼は城下にその姿を現はした。町は既に夕靄に包まれて、戸毎に輝く軒燈の光が、虹のやうに淡く浮んで見えた。丁度その時刻と前後して、分院の草堂では、堂守の老爺が永年虎の子のやうに大切に貯へて來た百圓近くの金が、厨子の裏に見えなくなつたと喚き立てて、殆んど發狂せんばかりに騒いでゐた。

見棄てられた魂

彼女が入院して来たのは、六月廿三日の朝であつた。

「年はもう十三にもなるのでございますが、此の通り一向に物が云へないので困つて居ります。はいくゝ生れてからまだ一言も云つたことはないのでございますよ。尤も四歳の時に、脳……膜……何とかいふ酷いひきつけをやりましたさうで、一時はお醫者様も六かしいと申しましたのが、不思議に癒つたと云ふことでございますが、矢張りそんなことが頭に障りましたものでございませうか。——まあ何分にも宜しくお願い致しますでございます。」

と、母親とも付かねば祖母さんとは尙更思へない、いやに腰の低い老女が附添つて来て、看護婦長にくどくどと依頼して行つた。それ以來既に百日の餘にもなるが、誰一人面會に来たものもない。

病床日誌を見ると、父親は健在、母親は二年前とかに肺病で死んだとある。三人の兄弟中、まづ無難なのは第二女ばかり、長男も四歳の時に同じ腦膜炎で死亡してゐる。父親の職業や其の他に就いては何にも分らん。

色の白い、鼻筋の通つた、何處やらに身分の卑しくないことを暗示するやうな顔容の上に、頭髮を、かつばにしてゐるせいもあるか、彼女は一寸見たところでは、どうしても男の兒としか受取れないのである。

「まあ、何て可愛いお兒さんでせう。」

彼女は入院の其の當日から、多勢の看護婦や他の二三の患者達に持て囃されたが、全然人見知りと云ふことのない彼女は、誰が手にでも平氣で抱かれる。花江ちゃんくと呼びかける聲が、忽ち病室内のはやり言葉になつてしまつた。

花江ちゃんには常に言葉がないのみならず、また希望や厭惡を現はすべき總ての表情も缺けてゐる。たゞ無言で病室や廊下をすばしこく走り廻るばかりである。——實際彼女には靜に歩くと云ふことがない。いつも鼠のやうにちよこくと馳せ廻つてゐる。そして鐵棒に搦まつては窓の

上に搔きあがつたり、細い板敷の上を駈け歩いたりする。其の敏捷さと云つたら！軽業師の兒も及ぶまい。あんまり煩く駈け廻つて厄介な時は、丁度犬か猫でももあるやうに、細紐で窓際に繋がれてゐることもある。それでもどうかすると巧みに其の紐を引きちぎつて、いつの間にかまた廊下を飛び廻つてゐる！

自分から物を欲しがると云ふことはないが、人が與へたら何でも喰べる。のみならず手當り次第に物を口を持つて行く癖がある。火鉢の中の灰、消炭、疊の上のごみ、絲屑。食べられるものと食べられないものとの見界は無論ない。ある時などは便所から大便を口の端に付けて出て來たこともある。稀には看護婦からビスケットなど貰ふ際に、見事に両手を重ねて「頂戴」をして見せることがある。けれども其れは決して他の子供等がするやうな有意的のものではなくして、只いつの頃からか自然に出て來た一種の反射運動のやうなものが、丁度時宜を得た場合に現はれたと云ふに過ぎないのである。

「さあ花江ちゃん、今一度頂戴するんですよ。そしたらこれを上げますから。」
看護婦などがどんなに骨を折つて見たところで、再び其の行爲の繰返されることはない。

總てに表情の缺けてゐることは前にも云つた。處が極めて稀にはさも嬉しさうに笑ひを漏らすことがある。殊に其れは人に抱かれたり負ぶさつたりした時に主として現はれる。其の嬉しさが高じて來ると、時には咽喉の奥で變な音聲を發しながら、抱かれてゐる人の顔に自分の頬や鼻先を擦りつけて來て、やゝもすると噛み付きさうにすることもある。犬猫が嬉しい時にする態度に頗る髣髴してゐる。

また彼女に固有な一種の表情法とも見られるのは、時々仔細らしく小首を傾けて、こつ／＼と咽喉を鳴らしながら、丁度目の前で扇子を翳す時のやうな妙な手附をしつゝ、五本の指を開いたり閉ぢたりすることである。何の意味でこんなことをするのかは固より分らん。

時にはまた何等外部からの刺戟や原因もなしに、急にひどい癇癢を起してあばれ出すことがある。齒を強く喰ひしばつてうん／＼と息をはづませながら、發作的に自分の手で自分の胸や頭をびしや／＼と叩くのである。それが次第に激しくなつて來ると、自ら自分の手に喰ひ付き、頬を搔きむしり、壁でも扉でも處きらはず引搔き廻るので、爪が剥がれて血をたら／＼と流すこともある。そんな時には、大人が二三人して取り押へようとしても、なか／＼容易には手におへない。

斯う云ふ極度の興奮が、内部の如何なる刺激に基いてゐるかは、これ又固より不明である。

すべての感覚は鈍つてゐるが、特に聴覚などは殆んど用をなしてゐるかわらないか、分らないほどである。あらゆる點から綜合して見て、彼女の精神状態は、丁度生後滿八ヶ月位の程度にしか發達してゐない。

此の少女が、生來の高度な白痴であるか、はた麻痺性痴呆と云ふ一種の精神病であるかは、容易に鑑定することが出来ない。それは此の子供の精神状態が、四歳で腦膜炎に罹る時までには、先づ普通に發達して來たのであるが、其の時から漸次に退化して、終に現在のやうな状態となり、今もなほ次第に退行しつゝあるのかも知れないからである。若しさうとすれば、これは明かに麻痺性痴呆の症状であつて、先づ遺傳梅毒が其の原因であらう。白痴は其の精神の發達が、一定所で停止してしまふか、若しくは極めて緩漫に發達するとも、決して退行することはない。——そして此の子供が、此の二者の何れに屬するかは、死後其の腦髓の解剖に據るの外は、どうしても明確な證明を與へることが出来ない。

何れにせよ、精神病院と云ふ別世界の中には、斯う云ふ哀れな子供もゐることを、忘れないでゐて貰ひたい。

上奏者 S 君

— 189 —

彼は久しい間勤勉な小學教員であつた。彼が其の生國 A 縣 K 郡の一小學校に、初めて二等横訓導を拜命したのは、明治十二年の十月、彼がまだ十八歳の時のことである。子供の時分から秀才の譽高かつた彼は、其の年の六月既に縣の師範學校を好成績で卒業してゐたのであつた。

それが三年後の明治十五年一月には四等訓導に昇進し、更に五年後の明治廿年五月には、一躍して隣縣 N 郡の某高等小學校に校長兼訓導を拜命するに至つた。同僚の中で彼れほど早く校長に出世したものは無かつた。

爾來彼は實に十有六箇所の小學校に校長を拜命した。其の間に縣廳から賞與を受けたことが前後十一度、村役場から賞與を受けたことが三度、郡役所から賞辭を受けたことが一度、教員組合會から表彰されたことが二度、——彼が如何に其の職務に勤勉で且つ忠實であつたかは、此の履

歴を一瞥しただけでも想像に餘りあるであらう。

しかし彼は決して一小學校長を以て満足してゐる人ではなかつた。彼は又熱心な中等教員の志願者であつた。彼は明治三十二年頃から四年間ばかり、夏季休暇には必ず東京へ出て、哲學館の漢文專修科の講習會に出席し、其の間に檢定試験を受けたことも二度ばかりあつた。試験の結果は可なり佳良な成績を收め得たが、どう云ふ譯か免狀はまだ下附されなかつた。それでも彼は決して撓まず、其後も毎年夏季には必ず何處かの講習會又は教育會に出席して、ひたすら檢定試験の準備に勵んでゐた。

此の勤勉な校長が、明治三十九年六月になつて俄然休職を命ぜられた。——しかしこれには大分こみ入つた事情が伏在してゐる。私が此の話の眼目はこれからである。

彼の名は杉野鐵次郎と云ふ。父親は可なり長命で、六十六歳まで健在であつたが、其の年の六月某日、腦溢血のやうな病氣で急死してゐる。尤も酒は平素から三合位は行けた。が母親はまだ三十を半ば越したぐらゐで、子宮病で倒れたとある。彼は十一の時から繼母に養はれた。成年に